

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月十九日

三四二

〔廣福寺文書〕

○二 肥後

高瀬修理亮武豐男菊池武信養子

奉寄進

師匠大智上人御所

畠地壹町者

在肥後國山鹿庄片保田村内也

右畠地者武明重代相傳之私領也爲奉報謝四恩三有永代所奉寄附也仍寄進狀如件

正平十七年 寅 七月十九日

藤原武明花押

〔附錄〕

〔廣福寺文書〕

○二 肥後

奉寄進

肥前國高來東郷賀津佐村雙桂山聖壽禪寺長老智上人御所

在肥後國玉名東郷内久井原村

右此村者肥前守武澄至于寂後時爲^{〔産所〕}布施可奉寄進之由被申置之間任

四恩三有
報謝ノ爲

菊池武照
ノ寄進狀

父武澄ノ
遺志ニ由

遺命^{〔附〕}當村山野田畠屋敷等不殘段歩永代所^{〔附〕}附也四至界注文在別紙住

持職并檢斷^{〔附〕}大小公私事永令停止地頭方綺畢無他^{〔附〕}御領掌候其旨趣者

一衆如法有行道無^{〔附〕}爲奉傳續靈山少林永平傳衣嫡々之法燈於彌勒下

生龍華之晨也仍爲末代龜鏡^{〔附〕}沙^{〔附〕}正平十七年 寅 八月廿二日

〔附錄〕 菊池肥前守武照ノ書歟

〔愚管記〕 八 七月十九日壬戌晴

北朝常住院僧正良愉ヲシテ六字法ヲ土御門殿ニ修セシム、^{〔土御門殿〕}

法云々

多武峯鳴動ス近衛道嗣寺家ヲシテ之ヲ祈謝セシム、

〔愚管記〕 八 七月廿六日己巳晴去十九日戊剋多武峯陵山鳴動事今日注

進之可召占形之由仰俊任了

廿七日庚午晴多武峯恠異占形守經^{〔安符〕}勘進之即遣寺家可令祈謝仰之

二十一日^{〔子〕}甲島津氏久兵糧料所トシテ薩摩深川院内北方半分ヲ禰寢

久清ニ沙汰セシム

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十一日

三四三

安倍守經
恠異ヲ占

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十二日

三四四

〔薩藩舊記〕

前集二十補遺 氏久公御譜中
正文在彌寢右近重永

深河院內北方半分事、爲兵糧料所々相計也、任先例、可被致沙汰之狀如件、

康安二年七月廿一日

修理亮(氏久)花押

彌寢孫次郎殿

〔參考〕

〔島津國史〕

道鑑公下 秋七月二十一日、(氏久)齡岳公使彌寢孫次郎、領深川院北

方半分、(鎌倉公舊傳)同上、小松氏系圖、此云孫次郎、蓋久清、其說見前年十

二十二日、(乙)幕府、贈正一位足利直義ノ祠ヲ、天龍寺ノ傍ニ建テ、大倉二
位明神ト號ス、

〔愚管記〕

八 七月廿二日、乙丑、晴、爲武家之沙汰、今日故入道左兵衛督(直義)卿

有勸請事、構仁祠於天龍寺傍、聊有子細、有此事云々、

〔建長寺年代記〕

○相模 貞治壬寅七月廿二日、有旨贈正二位直義 封大

倉二位大明神、小倉山咫尺奉祝座、

〔鎌倉大日記〕

貞治二年七月二日、直義靈追號大倉二位明神、

○直義、鎌倉ニ死スルコト、文和元年二月二十六日ノ條ニ、北朝、直義ニ

小倉山ニ
咫尺ノ地

從二位ヲ贈ルコト、延文三年二月十二日ノ條ニ、義詮、直義ノ十三年忌
法會ヲ等持寺ニ修スルコト、貞治三年二月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十三日、(丙寅)幕府評定始、

〔愚管記〕

八 七月廿三日、丙寅、晴、今日武家評定始云々、

幕府、斯波義將ヲ執事ト爲ス、

〔鎌倉大日記〕

執權 義將、左衛門佐、七月廿三日出仕、

〔武家年代記〕

執權 義將、修理大夫高經男、治部大輔、法名道將、號法苑寺、

〔執事補任次第〕

斯波此時有管領號、義滿御代、
治部大輔、義將、(康安)二年七月補任、
修理大夫高經、法名道朝、(靈源院息)五年五月、

〔太平記〕

三十七 尾張左衛門佐氏賴遁世事
都ニハ細川相模守敵ニナリシ後ハ、執事ト云者ナクシテ、每事叶ハサリケ

ル間、誰ヲカ其職ニ置ヘキト評定アリケルカ、此比時ヲ得タル佐々木佐渡
判官入道譽カ塔タルニ依テ、傍ノ人々皆追從ニヤ申ケン、尾張大夫入道
ノ子息左衛門佐殿ニ、(参考)太平記ニ増タル人アラシト申ケレハ、宰相中將
殿モ心中ニ異儀ナクシテ、執事職ヲ内々此人ニ定給ヒニケリ、父ノ大夫入
道ハ、元來當腹ノ三男、治部大輔義將ヲ寵愛シテ、先腹ノ兄二人ヲ世ニアラ

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十三日

三四五

細川清氏
ノ後ニハ
氏賴ヲ執
事ニセシ
トノ世評

高經義將
ヲ推舉ス

氏賴出家
ス

セテ見ントモ思ハサリケレハ、左衛門佐執事職ニ居ラルヘキ由ヲ聞テ、様々ノ非ヲ舉種々ノ咎ヲ立テ、此者曾テ其器用ニ非ル由ヲ宰相中將殿へ申サレケル、中將殿モ人ノ申ニ附安キ人ニテオハシケレハ、ケニモ子ヲ見ルコトハ父ニシカス、サラハ當腹ノ三男ヲ面ニ立テ、幼稚ノ程ハ、父ノ大夫入道ニ世務ヲ執行サスヘシト宣ヒケル、○参考太平記ニ、按櫻雲記、義將貞治元年二月爲執事、未知所據トアリ、左衛門佐是ヲ聞テ、父ヲヤ恨ニケン、世ヲウシトヤ思ヒケン、潛ニ出家シテ、イツチトモナク迷出ニケリ、附隨フ郎從共二百七十人、○前田家本、二百同時ニ皆髻ヲ剪テ、思々ニソ失ニケル、此人誠ニ父ノ所存ヲモ破ラス、我身ノ得道ヲモ願テ、出家遁世シヌル事、類少キ發心ナリ、但此比ノ人ノ有様ハ、昨日ハ髻剪テ、實貴ゲニ見ユルモ、今日ハ頭ヲ裹テ無慚無愧ニ舉動事ノミ多ケレハ、此遁世モ又行末通ラヌ事ニテヤアランスラント思ヒシニ、遂ニ道心サムル事ナクシテ、ハテ給ヒケルコソ有難ケレ、

〔塵添蓋囊鈔〕

十一

施行事

付遵行事、管領始事、義將事、氏賴遁世事

施行ヲ

シ行共ヨムハ何

事ノ施ノ字ニ於テ、二ノ心有、乞丐人等ニ物ヲ與ルヲセ行ト云ホドニ訓也、下知ノ狀ノ時ハ施行ト云、○中當時ハ管領ノヲ施行ト云、守護ノヲ遵行

執事ヲ管
領ト云フ

義將始メ
テコノ職
ニ就ク

ト云、守護代ノヲ渡狀ナント云歟、○中管領ト申ハ近比ノ事也、本ハ執事ト云キ、大御所ノ御時、高師直ノ朝臣久ク此職ニアリシ、執事ト號ス、サレハ執事ノ施行ト云、昔ハ高上杉ノ人々ノ役タリキ、近比御一族ノ態ト成テヨリ以來管領ト申也、鹿苑院殿ノ御代ノ初方、斯波修理大夫高經、號靈源院法名道朝、始テ此職ヲ承リ給時、再三固辭シ給シカバ、只天下ヲ管領ノ御計候ヘト仰出サレシカハ、領狀被申テ、四男治部大輔義將ヲ以テ此職ニ居給ト云々、號法苑寺、法名道將、後ニ右衛門督ニ任シ、正四位下ニ敍セラル、世ニ勘解由小路金吾ト云是也、然ルニ三男左衛門佐氏賴ハ、當家ニ彼職ニ居スル事此ノ家ノ瑕瑾也トテ、出家遁世シ給ヒケルト云リ、爰ニ或人ノ云、世ノ風聞ニハ今ノ如クナレ共、實ハ非尔、高經ニ五男有、嫡子家長ハ陸奥守トノ奥州ニ下向、次男左京大夫氏經ハ、築紫探題トノ九州ニ下向、三男左衛門佐氏賴、四男治部大輔義將、五男修理大夫義賴也、然ニ兄二人無在京間、氏賴惣領タルヘキ歟ト思給、又京極道譽禪門智ニ取テモテナシケリ、然レ共、其器用有ル故ニ、親父義將ヲ以テ管領トシ、惣領ノ牀タル間、述懷ノ義ヲ以テ遁世シ給カ、外聞ヲ彼事ニ披露有ケルトナン、遂ニ江州山上ノ邊リ菅ノ寺ニシ

テ圓寂ト云々、其ヨリ以降御一族ノ職ト成テ管領ト申也、關東モ管領ト云共、上杉久ク此職也、

〔參考〕

〔武家名目抄〕

職名部

管領

按管領といふ意ハ、もと事をすへふさぬる

いはれよて、正しき職名にもあらざりければ、定まれるしなもなく、一所の長官の稱よては有しなり、略○中足利殿の時に至りて、執事高師直、上杉朝定、仁木頼章、細川清氏あとを、希には管領ともいひしことの物に見えたるも、猶全くの職名にあらず、しかるに斯波義將執事とあるに及ひて、其職掌はもとより、御家人の所役あるのみならず、執事といふ名の大名一家の老臣と同きを厭て、常に管領と稱することゝなれり、さるは斯波氏公方一門の中にもすくれたる連枝なればあり、これより後ハ、斯波、細川、畠山の三家、一も公方家のかはるゝ此職に補せられて、他門の人覬覦の心を絶にいたれり、しかりしより、世に此三家を三職とも三管領ともいひ、常に管領とのみ唱へて、執事といふ名は知人なきかことくおれり、但常の辭には管領とは執權といふ本義とす、

三管領

〔尊卑分脈〕

清和源氏

高經

義將 第一自貞治元至同五、第二自康曆元至明德二、第三自明德四至應永五、此時改執事號管領、治部大輔左衛門佐、正四下、昇殿、或敘從三位右衛門

督、歌人、母、號、法、花、寺、

二十四日、卯細川清氏、細川賴之、讚岐白峯ニ戰ヒ敗死ス、

〔愚管記〕

裏書 傳聞去廿四日、相模守清氏朝臣、於讚岐國被誅伐云々、自去年九月之比、蒙

武將之勘氣、逃下若狹國、官軍發向之間、不能防禦、逃隱山門云々、不經幾日、參南方、相率楠木以下、舊年十二月八日、打入洛陽、武將赴于近江國、臨幸同之、同廿七日、武將又相率近國勢入洛、清氏以下不能防禦、引退南方了、其後不經幾日、清氏赴于四國了、爲同一族源賴之中國管領也、右馬頭也、被誅伐了、

〔武家年代記〕

中執權

清氏 和氏男、八郎、細川相模守、從四位下、貞治元二七廿

〔大乘院日記目錄〕

一 七月廿四日、細川相州清氏打死、

〔太平記〕

三十八、前、三十九、本、

細川清氏討死、附西長尾城沒落事

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

清氏若狹
ヨリ叡山
ニ逃レ南
方ニ參ズ

四國ニ赴
ケ

道法
號名

再ビ都ガチ
傾ケニガ
爲メニ渡ル
國ニメニガ

賴之ハ備
中ヨリ讚
岐ニ渡ル

讚岐ニハ細川相模守清氏ト、細川右馬頭賴之ト數月戰ヒケルカ、清氏遂ニ
 討レテ、四國事故ナク靜リニケリ、其軍ノ様ヲ傳聞ニ、以下五十四字無シ、ハ
 相模守四國ヲ打平ケテ、今一度都ヲ傾ケテ、將軍ヲ滅シ奉ラント企テ、源院西
 本、今一度都ヲ傾ケテ、堀浦ヨリ船ニ乗テ、讚岐へ渡ルト聞ヘシカハ、相模守力從
 兄弟ノ兵部大輔、少輔按名氏春記ニ、當作淡路國ノ勢ヲ率シテ、淡路金勝院
 本、作讚岐、三百餘騎ニテ馳著、利家金勝院本、作五百トアリ、其弟掃部助
 考、太平記ニ、按名信讚岐國ノ勢ヲ相催シテ、五百餘騎ニテ馳加ル、小笠原宮
 氏、春弟トアリ、讚岐國ノ勢ヲ率シテ、三百餘騎ニテ、太平記考
 内大輔、毛利家本、不出トアリ、原阿波國ノ勢ヲ率シテ、三百餘騎ニテ、
 千、三百トアリ、作、馳著ケル間、毛利家本、自掃部助至此不出、
 前、金勝院、南都本、云、此、外、四國ノ勢、共、此、彼、ヨリ、馳、加、ル、十五字アリ、清氏、前田
 模守ニノ勢ハ、程ナク五千餘騎ニ成ニケリ、院、天正本、作三千トアリ、西源其比
 右馬頭賴之ハ、山陽道ノ院、本、作、西國トアリ、西源蜂起ヲ鎮ントテ、備中國ニ居
 夕リケルカ、此事ヲ聞テ、備中備前兩國勢、院、天正本、作備後トアリ、千餘騎ヲ
 率シ、都本、作、太平記ニ、千、毛利家、北條家、金勝院、南讚岐國へ推渡ル、〇、參、考、天
 正、異、本、云、清氏、對、治、ノ、御、教、書、成、レ、レ、此時若相模守敵ノ船ヨリアカランスル

賴之ハ母
禪尼ニ遺シ
氏ニ遺シ
許リテ和シ
睦ム

處へ馳向テ戰ハ、一戰モ利アルマシカリシヲ、〇、前田家本、馳向テ打散サ
 ニリシヲ、右馬頭飽マテ心ニ智謀有テ、機變時ト共ニ消息スル人ナリケレハ、
 謀、〇、前田家本、賴之飽迄兼テ母儀禪尼ヲ以テ、西源院本、作使者トアリ、相模
 守ノ許へ言遣シケルハ、將軍群小ノ讒佞ヲ正サレス、貴方科ナキ刑罰ニ向
 ハセ給ヒシ時、陳謝ニ言ナクシテ、寇讎ニ恨アリシ事、賴之尤其理ニ服シ候
 キ、〇、前田家本、此、間、一、端、將、軍、ヲ、恨、ミ、サ、リ、ナ、カ、ラ、至、此、金、勝、院、本、不、出、而、云、
 被、申、候、シ、事、非、無、其、謂、ノ、十、六、字、ア、リ、仁木細川兩家
 ナ、且、將、軍、ヲ、恨、申、サ、レ、シ、事、其、謂、故、左、大、臣、殿、モ、〇、參、考、太、平、記、仁木細川兩家
 ヲ股肱トシテ、大樹累葉ノ九功ヲ光榮スヘシトコソ仰置レ候シニ、〇、前田
 被、仰、資、タ、ル、ヘ、シ、ト、一、家、ノ、好、ヲ、離、テ、敵、ニ、降、リ、多、年、ノ、忠、ヲ、捨、戰、ヲ、致、サ、レ、候、
 ハ、ン、事、〇、前、田、家、本、敵、ニ、降、亡、魂、ノ、恨、苦、ノ、下、迄、深、ク、不、義、ノ、譏、世、ノ、末、迄、モ、朽、
 へカラス、賴之苟モ此理ヲ存スル故ニ、全ク貴方ト合戰ヲ致ヘキ志ヲ廻サ
 ス、既往不咎ト申事候へハ、〇、前田家本、既往不御憤今ハ是迄ニテコソ候へ、
 枉テ御方へ御參候へ、御分國已下悉日比ニ易ラス申沙汰スヘキニテ候、若
 又其モ御意ニ叶ハテ、御本意ヲ天下ノ反覆ニ達セント、〇、前田家本、只宮方
 作、ト、思、召、シ、候、ハ、賴、之、力、ナ、ク、四、國、ヲ、捨、テ、備、中、へ、罷、歸、へ、ク、候、ト、言、ヲ、和、ケ

清氏和議
間ニ賴之
兵備ヲ整
清氏ハ白
峯ノ麓ニ
陣シ賴之
在リ歌津
ニ之

賴之ノ軍
多キ國者
窮ス兵糧
リ兵糧ニ
多キ國者
賴之ノ軍

賴之新開
真行ナシ
西行ナシ
長尾

中院少將
ノ城ヲ攻

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三五二

禮ヲ厚クシテ、頻ニ和睦ノ儀ヲ請レケルヲ、相模守心淺ク信シテ、問答ニ前
田家本問答ニ日數ヲ經ケル間ニ、右馬頭中國ノ勢ヲ待調ヘ、國ノ勢以下八
ノ三字無シ、堅ク拵テ、其後ハ音信モナカリケリ、相模守ノ陣ハ白峯麓考太
字、無城郭ヲ堅ク拵テ、其後ハ音信モナカリケリ、相模守ノ陣ハ白峯麓考太
平記ニ、峯、金勝院、右馬頭ノ城ハ歌津ナレハ、西源院、南都、天正、毛利家、北條
本作山トアリ、僅ニ二里ナリ、トア参考、太平記、五、六、里、寄ヤスル待テ
リ、其アハヒ僅ニ二里ナリ、トア参考、太平記、五、六、里、寄ヤスル待テ
ヤ戰フト、互ニ時ヲ伺テ、數日ヲ送リケル程ニ、北條家、金勝院、南都、天正、毛利家
數月トアリ、前田、右馬頭ノ勢大略遠國ノ者共ナレハ、兵糧ニツマリテ窮困
ス、角テハ右馬頭ハ讚岐國ニハ堪ヘシト見ヘケル程ニ、以下四十七字、右馬頭
結句、備前ノ飽浦薩摩權守信胤宮方ニ成テ、正、本、作、信、朝、非、也、按、信、胤、金、勝、院、天
既降南方而不詳、何者、復屬將軍、此海上ニ推浮フ小笠原美濃守記ニ、今、川、家、平
文路、如、今、新、降、南、方、者、可、疑、ト、ア、リ、海、上、ニ、推、浮、フ、小、笠、原、美、濃、守、記、ニ、今、川、家、平
天正、異、本、作、人、ト、ア、リ、前、田、家、本、鹽、飽、十、郎、美、濃、守、相、模、守、ニ、同、心、シ、テ、渡、海、ノ
鹽、飽、十、郎、美、濃、守、相、模、守、ニ、同、心、シ、テ、渡、海、ノ
路、往、反、前、田、家、本、作、人、ト、ア、リ、前、田、家、本、鹽、飽、十、郎、美、濃、守、相、模、守、ニ、同、心、シ、テ、渡、海、ノ
ノ勢ハ國々ニ聞ヘテ夥シ、只魏將司馬仲達カ、蜀ノ討手ニ向テ、戰ハテ勝事
ヲ得タリケン、其謀ニ相似タリ、七月二十三日ノ朝、新開、向、西、長、尾、城、今、川、家、平、
毛利家、金勝院、本有異說、右馬頭帷帳ノ中ヨリ出テ、仲達以下、五十二字、無シ、
詳出下、可合見トアリ、

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三五三

新開遠江守眞行ヲ近附テ宣ヒケルハ、當國兩陣ノ體ヲ見ルニ、敵軍ハ日々
ニ増リ、御方ハ漸々ニ減ス、角テ猶數日ヲ送ラハ、合戰難儀ニ及ヒヌト覺ル
是ニ依テ事ヲ計ルニ、宮方ノ大將ニ中院源少將ト云人、西長尾ト云所ニ城
ヲ構テオハスナル、此勢ヲ差向テ攻ヘキ勢ヲ見セハ、相模守定テ勢ヲ差分
テ城ヘ入ヘシ、其時御方ノ勢城ヲ攻ニスル體ニテ向城ヲ取テ、夜ニ入ラハ
箒ヲ多ク燒捨テ、異道ヨリヨリノ源院本、異道、馳歸リ、懸テ相模守カ城ヘ推寄
賴之搦手ニ廻リテ、先小勢ヲ出シ、敵ヲ欺ク程ナラハ、相模守縱一騎ナリト
モ、懸出テ戰ハスト云事有ヘカラス、是一舉ニ大敵ヲ亡ス謀ナルヘシトテ、
新開遠江守ニ四國中國ノ兵五百餘騎ヲ相副、路次ノ在家ニ火ヲ懸テ、西長
尾ヘ向ラレケル、○参考、太平記、今、川、家、毛、利、家、金、勝、院、本、並、云、新、開、遠、江、守
陣ノ體ヲ見候ニ、敵ハ中ニ一騎モ増リ、御方ハ漸々ニ減シ、角テ今、十、日、ニ、
トモ成候ハ、御陣中ハ一騎モ増リ、御方ハ漸々ニ減シ、角テ今、十、日、ニ、
ハ、源、先、將、御、合、戰、候、ハ、西、長、尾、ト、一、定、處、難、儀、出、來、ヘ、ト、覺、候、ハ、
中、院、源、少、將、御、合、戰、候、ハ、西、長、尾、ト、一、定、處、難、儀、出、來、ヘ、ト、覺、候、ハ、
ハ、勢、相、模、殿、餘、騎、給、テ、勢、盡、シ、テ、西、長、尾、城、殿、ノ、陣、合、テ、夜、ニ、入、ラ、
テ、相、模、殿、餘、騎、給、テ、勢、盡、シ、テ、西、長、尾、城、殿、ノ、陣、合、テ、夜、ニ、入、ラ、
申ケレハ、右馬頭實モ然ヘシト、不、金、勝、院、中、院、西、長、尾、城、殿、ノ、陣、合、テ、夜、ニ、入、ラ、
四國中國ノ勢五百騎ヲ相副テ、不、金、勝、院、中、院、西、長、尾、城、殿、ノ、陣、合、テ、夜、ニ、入、ラ、

眞行西長
尾ヲ攻ム

清氏兄弟
ニ當ラシシ

眞行間道
ヨリ白峯ノ
テ白峯ノ
大頼手ヲ
メ頼手ヲ
ツメ手ヲ
撃ハ

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三五四

按ノ如ク相模守是ヲ見テ、○前田家本、此間ニ、元來機早ナル敵ハ西長尾城ヲ攻落シテ、後へ廻ラント巧ケルソ、中院殿ニ合力セテハ叶フマシトテ、舍弟左馬助、從兄弟掃部助ヲ兩大將トシテ、千餘騎ノ勢ヲ西長尾城へ差向ラル、新開元來城ヲ攻ンスル爲ナラテハ、態日ヲ暮サント、足輕少々差向テ、城ノ麓ナル在家所々燒拂テ、向陣ヲソ取タリケル、○參考太平記ニ、毛利家、北條家、金勝院、南都本云、城ニ對シテ高ク嶮キ山ノ峯ニ打上テ、向陣ヲ取タリケル、前田家本、對城ハ尙大勢ナレハ、哀新開カ寄テ攻ヨカシ、手負少々射出シテ後、一度ニハツト懸出テ、一人モ殘サス討留ントソ勇ケル、○西源院本、城ハ尙大夜已ニ深ケレハ、新開向陣ニ籌ヲ多燒殘シテ、山ヲ越ル直道ノ有ケルヨリ引返シテ、相模守ノ城ノ前白峯麓へ推寄ル、○參考太平記ニ、金勝院本云、山ヲ越ル直道ノ案アリ、下同兼テ定タル相圖ナレハ、同二十四日ノ作ニ參考太平記ニ、西源院本ノ刻ニ、細川右馬頭五百餘騎ニテ、搦手へ廻リ、○參考太平記ニ、搦手、毛利家ノ城本、五百餘騎ニテ相模守ニ手ニ分レテ、関ノ聲ヲソ揚タリケル、此城元來鳥モ翔カタキ程ニ拵タレハ、寄手縱如何ナル大勢ナリトモ、十日二十日カ中ニハ、容易攻落スへキ城ナラス、○前田家本、敵縱大勢ニテ寄タリ、其上新

清氏ハ只
一騎敵陣
ニ向フ

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三五五

開西長尾ヨリ引返スト見へハ、左馬助、掃部助、馳歸テ寄手ヲ追拂ハン事、却テ城方ノ利ニ成へカリケルヲ、○前田家本、左馬助掃部助カ兩勢ヲ眞中ニ取籠テ、一時ニ亡サン、相模守ハイツモ己カ武勇ノ人ニ超タルヲ憑テ、軍立餘リニ大早ナル人ナリケレハ、寄手敵ニ作ル、○前田家本、ノ旗ノ手ヲ見ルト均ク、二ノ城戸ノ關ニ作ル、○西源院本、ニヲ開カセ、小具足ヲタニモ堅メス、裕ノ小袖引タヲリテ、鎧計ヲ取テ肩ニ抛懸テ、馬上ニテ上帶シメテ、只一騎懸出給へハ、相從フ兵三十餘騎モ、或ハ頬當ヲシテ、イマタ兜ヲモ著ス、或ハ籠手ヲ差テ、イマタ鎧ヲ著ス、眞先ニ裏連タル敵千餘カ中へ破テ入、○參考太平記ニ、此上餘騎、今諸本作千餘、哀剛ノ者ヤトハ見ナカラ、○前田家本、具足ヲスルカセサハ懸入、○參考太平記ニ、千、北條家、南都相模守一騎ニ懸分ラレテ、魚鱗ニモ進マス、鶴翼ニモ圍得ス、○前田家本、魚鱗、此ノ塚ノ上、彼ノ岡ニ打上リテ、馬人トモニ辟易セリ、相模守ハ鞍ノ前輪ニ引附テ、ネチ頸ニセラレケル野木備前次郎、○參考太平記ニ、野木、天正本作、野柿原孫

陶山三郎
清氏ノ馬
ヲ刺ス

四郎二人カ首ヲ、太刀ノ鋒ニ貫テ差擧、○參考太平記ニ、相模守、獲野木柿原
 彼ノ塚ノ上ナトニ控ヘタリ、唐土天竺鬼界大元ノ事ハ、國遠ケレハイマタ
 相模守彌勇ミ、留リテニ作ル、吾朝秋津嶋中ニ生レテ、清氏ニ勝ル手柄ノ者有
 知ス、○前田家本、唐土天竺トハ、誰モヤハイフ、敵モ他人ニ非ス、キタナク軍シテ笑ハルナト恥シメテ、
 ○參考太平記ニ、西源院本云、秋津嶋ノ中ニ生レテ、清氏ニ一太刀モ打附ヘ
 キ者ハ覺ヌ物ヲト呼リテ、只一騎云々トアリ、前田家本、黒心キ軍シテ、家ノ
 名失ナト愧シ、只一騎猶大勢ノ中ヘ懸入給フ、飽マテ馬強ナル打物ノ達者
 メテニ作ル、カ、逃ル敵ヲ追立追立斬テ落セハ、其鋒ニ廻ル者、或ハ馬ト共ニ尻居ニ打居
 ラレ、或ハ兜ノ鉢ヲ胸板マテ破附ラレ、深泥死骸ニ地ヲ易タリ、○前田家本、
 字無、爰ニ備中國住人陶山三郎ト、備前國住人伊賀掃部助ト、二騎田ノ中ナ
 ル細道ヲ閑々ト引ケルヲ、相模守追附テ切ント、諸鎧ヲ合テ攻ラレケル處
 ニ、陶山カ中間ソハナル溝ニオリ立テ、相模守ノ乗給ヘル鬼鹿毛ト云馬ノ
 草脇ヲソ鏝タリケル、○參考太平記ニ、自陶山三郎至此、西源院、天正本不出、
 死骸ニ地ヲ易タリ、爰ニ備中國住人、真壁孫四郎、是コソ相模殿ヨト見タリ
 ケレハ、馳違様ニ長鎗ノ柄ヲ取延テ、放チ撞ニ馬ノ草脇ヲツク云々ト、同ト
 ヲアリ、前田家本、相模守ノ馬ニ作ル、此馬サシモノ駿足ナリケレトモ、時ノ運
 ヲ放チ突ニソ蹴タリケル馬ニ作ル、此馬サシモノ駿足ナリケレトモ、時ノ運
 ニヤ曳レケン、一足モ更ニ動カス、スクミテ地ニソ立タリケル、相模守ハ近

伊賀高
清氏
ヲ刺ス

附テ敵ノ馬ヲ奪ハント、手負タル體ニテ、馬手ニヲリ立、太刀ヲ倒ニツイテ
 立レタリケルヲ、真壁孫四郎馳寄、一太刀打テ當倒サントスル處ニ、相模守
 走寄テ、真壁ヲ馬ヨリ引落シ、ネチ頸ニヤスル、人礫ニヤ打ト思案シタル様
 ニテ、中ニ差上テソ立レタル、伊賀掃部助高光ハ、懸合スル敵ニ騎斬テ落シ、
 鋒ニ餘ル血ヲ笠驗ニテ押拭ヒ、何クニカ相模殿ノオハスラント、東西ニ目
 ヲ賦ル處ニ、真壁孫四郎ヲ中ニ提ナカラ、其馬ニ乗ントスル敵アリ、穴夥シ
 凡夫トハ見ヘス、是ハ如何様相模殿ニテソオハスラン、是コソ願フ處ノ幸
 ヲト思ヒケレハ、伊賀掃部助、畠ヲスチカヒニ馬ヲ真闇ニ馳懸テ、無手ト組
 テ引カツク、相模守、真壁ヲハ右ノ手ニカイ颯テ投棄、掃部助ヲ射向ノ袖ノ
 下ニ壓ヘテ、頸ヲカ、ント、上帶延テ後ニ廻レル腰ノ刀ヲ引廻サレケル處
 ニ、掃部助、心早キ者ナリケレハ、組ト均シク抜タリケル刀ニテ、相模守ノ鎧
 ノ草摺ハネアケ、擧様ニ三刀サス、刺レテ弱レハ、勿返シテ、壓ヘテ首ヲソ取
 タリケル、○參考太平記ニ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都本、並云、相模守
 下立テ、敵ノ馬ヲ奪取テ、乘ント、大手ヲカヒロケテ、懸スハ、折テトウト伏ハ、弓手ニ
 ヲカヒ折テ、馳違様ニ、相模守ノ右ノ手ヲカヒ、懸スハ、折テトウト伏ハ、弓手ニ
 ハ離レヌ、片手ハナシ、乗替ノ馬ヤ有、後ヲ屹ト顧テ、相模守上ニ成テ、伊賀掃
 部助馳寄テ、無手ト組テ、岸ヨリ下ヘ轉落、落ル處ニ、相模守上ニ成テ、伊賀掃
 部助馳寄テ、無手ト組テ、岸ヨリ下ヘ轉落、落ル處ニ、相模守上ニ成テ、伊賀掃

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三六〇

傳 若狹守護 執事

天正本、無西長尾城陷事トアリ、前田家四國ハ時ノ間ニ靜リテ、記ニ、四國、毛本、是ノミナラス以下二十一字無シ、利家、淡路三國トアリ、細川右馬頭ニソ靡キ從ヒケル、

〔細川三將略傳〕

波〇阿 細川和氏 〇中有六氏、清氏、敏從、四位下、任相模守、從

足利尊氏父子屢有功、爲若狹守護職、康安元年五月、爲足利義詮執事、與佐々木高氏私結怨隙、遂爲之被讒、九月、叛義詮、貞治元年、據讚州白峰城、以應南帝、七月十四日、與細川賴之戰敗死、子二人、昌氏稱六郎、某稱八郎、弟賴利、左馬助、從清氏下、讚岐、及清氏戰死、與從弟細川氏春往泉州、不知其所終也、家氏、太輔、將監、及清氏叛也、留京師、後於讚岐死、子氏義、稱重郎、今讚州多度津庄村、有高島氏者、蓋其末孫也、云、

〔尊卑分脈〕

清和源氏 細川

和氏

清氏

執事、相模守、本名伊與守、從四下、阿波守、左將監、彌八、母、貞和元年七月廿四日、於讚岐白峯討死、

昌氏

八郎太郎、阿波守、母、

〔細川系圖〕

波〇丹

和氏

清氏

細川相模守兄弟四人、

昌氏

〔柏木系圖〕

路〇淡

和氏

清氏

相模守、初彌八、後左近將監、世人稱阿波將監、執事、職、貞治元年七月廿四日、於讚州爲同氏賴之討死、

○細川系圖、細川系譜、校異等、異事ナシ、清氏、細川賴春ト共ニ、細川顯氏ヲ擊ツコト、觀應元年十一月十六日ノ條ニ、幕府、清氏等ノ罪ヲ宥シ、所領ヲ安堵セシムルコト、同二年四月二日ノ條ニ、安國寺造營ノ功ニ依リ、伊豫守ニ任ゼラル、コト、同年六月二十六日ノ條ニ、義詮、直義不和ニ依リ、清氏等、京都ヲ遁ル、コト、同年七月二十一日ノ條ニ、下總親胤等ヲシテ、直冬ノ黨、大館右馬助等ヲ、門司ノ海上ニ擊タシムルコト、正平七年二月一日ノ條ニ、清氏、伊勢ニ入り、南軍ト戰フコト、文和元年十月五日ノ條ニ、幕府、清氏ヲ若狹守護職、並ニ稅所、今富名領主ト爲スコト、同三年九月九日ノ條ニ、尊氏、清氏ノ今比叡ノ陣ニ入ルコト、同四年三月八日ノ條ニ、南軍ト七條洞院油小路ニ戰ヒ、創ヲ被ルコト、同月十二日ノ條ニ、仁木義長ト、事ヲ以テ戰ハントスルコト、同年四月二十日

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三六一

世人阿波 將監下云

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三六二

ノ條ニ、清氏、幕府ニ越前守護職ヲ請ウテ、聽サレズシテ阿波ニ歸リ、南朝ニ參ルトノ風聞アルコト、延文二年六月十五日ノ條ニ、義詮、清氏ヲ執事ト爲スコト、同三年十月十日ノ條ニ、清氏、畠山國清等ト京都ヲ發シ、南軍ト河内四條ニ戰フコト、同四年十二月二十三日ノ條ニ、清氏等、楠木正儀等ヲ赤坂城ニ攻メテ之ヲ陷ルコト、同五年五月九日ノ條ニ、畠山國清等、河内ノ南軍ヲ防グト稱シテ、仁木義長ヲ討タントス、清氏、義詮ト共ニ京都ヲ逃レ、尋デ、歸洛スルコト、同年七月十八日ノ條ニ、義詮、清氏ノ異志アルヲ疑ヒ、後光嚴天皇ヲ奉ジテ、新熊野ニ移リ、清氏又若狹ニ奔ルコト、去年九月二十三日ノ條ニ、清氏、若狹大島八幡宮ノ祈禱卷數ヲ送レルヲ褒スルコト、同年十月十五日ノ條ニ、清氏、若狹ニ敗レ、近江坂本ニ走り、尋デ、南朝ニ降ルコト、同月二十七日ノ條ニ、清氏、久下頼直ヲ、丹波守護代ト爲スコト、同年十二月九日ノ條ニ、義詮、河野通盛ヲシテ、頼之ト謀リ、清氏ヲ擊タシムルコト、本年三月十三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部ホ之

細川清氏

花押



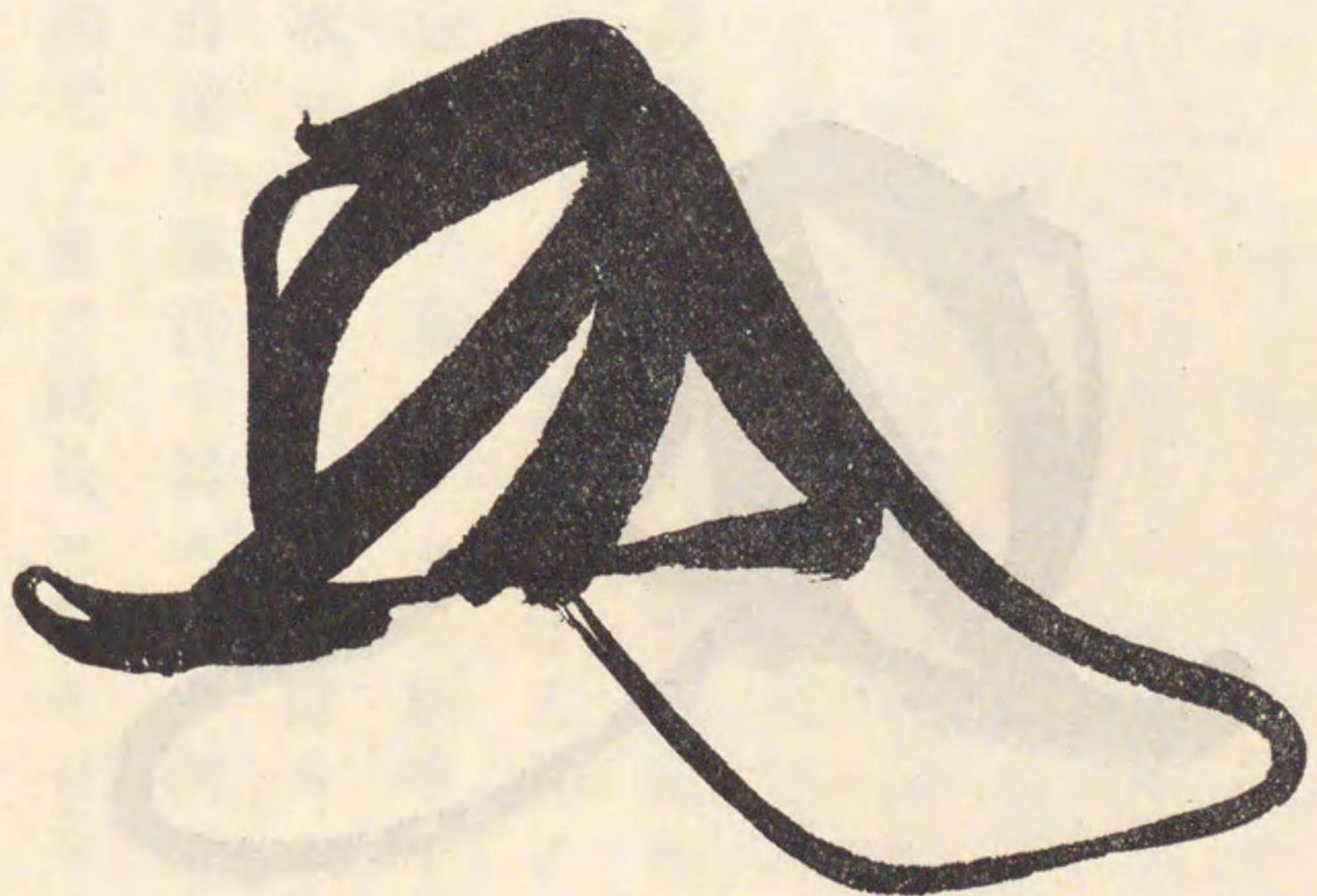
○離宮八幡宮文書(山越)
文和三年八月四日清氏遵行狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三六三

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三六四



○田代文書(後)
文和四年三月日軍忠狀證判



○長樂寺文書(若)
康安元年十月十五日書狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十四日

三六五

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十九日

三六六

二十九日、北朝、大德寺住持義亨二、若狹名田莊内井上村ノ知行人竝ニ其闕否ヲ問フ、

〔德禪寺文書〕〇山城

若狹國名田庄内井上村、當時誰人知行候哉、
可令注進給候之由候、其沙汰候、恐々敬白、

康安二 七月廿九日

大德寺

大德寺長老上人御房

北朝從二位五條爲視薨ス、

〔公卿補任〕

非參議從二位菅爲視、七月廿九日卒、

〔公卿補任〕

非參議從三位菅爲視、父故入道從三位季長卿二男、母、乾元

二八五文章生、嘉元二三一内藏人式部少丞、同四三三蒙方略宣、同十八日

對策及第、題敍殿同袴、琴尋問頭正四下行文章博士藤原朝臣淳範、同判、同十

德治二正五從五下、藏人、同廿九日紀伊權守、延應元十一八兵部權少輔、同三

三廿八從五上、同十一月三四罷職、應長二正七正五下臨時、正和三三一昇殿、

同四八廿右兵衛權佐、同十月一院司、同五正五從四下策勞、去權佐、元亨四正

官歴

世系

九月二十
九日薨ス
トノ説

五從四上策勞、元弘二三八正四下、同三六還本位、建武四十八更正四下、曆
應三八十三彈正大弼、四月十六罷大弼、康永二年十二月廿二日敍從三位元
前彈正大弼、三十一、文和二年十二月廿一日敍正三位、延文二年八月廿四日
爲長者、同三年正月六日敍從二位、三十三、

〔尊卑分脈〕

菅原氏

季長

爲規、從二、文章生、長者、彈正少弼、右兵衛佐、
爲視、康安二九廿九卒、七十二歳、

爲綱

河野通治、伊豫觀念寺ニ禁制ヲ掲グ、

〔觀念寺文書〕〇伊豫

禁制

觀念寺

右於當寺者、爲將軍家御願寺、被致御祈禱精誠之上者、軍勢已下甲乙人等不
可致亂入狼藉者也、若有違犯之輩者、任將軍家御教書之旨、可處重科之狀如
件、

康安二年七月廿九日

〔花押〕

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月二十九日

三六七

南朝正平十七年 北朝貞治元年七月三十日

〔附考〕
河野 通治 四十一代

○得能通遠、同寺領ヲ安堵セシムルコト、本年十一月十四日ノ條ニ見ユ、

三十日、癸酉北朝大神宮假殿遷宮行事所始、

〔愚管記〕八 七月九日、壬子、晴、伊勢内外宮假殿遷宮事、有勅問事、

十三日、丙辰、晴、略○中入夜、藏人左少辨嗣房來云、來十六日伊勢内宮假殿遷宮日時并行事所始也、件日相當國忌、可爲何樣哉、將又上卿藤中納言時光卿雖申領狀母儀遠忌也、兩條可有其憚歟、可計申者、兩條不打任候歟、可被相尋先例之由令申畢、

卅日、癸酉、晴、造太神宮行事所始云々、

八月小 朔

一日、甲戌八朔贈遺、

〔愚管記〕八 八月一日、甲戌、晴、朔日風俗如例、頗有其興者歟、

二日、乙亥、晴、夕立、自修理大夫入道々朝許、引送馬一疋、置鞍藤三位有範卿傳賜之、昨日依遣輕微之一種也、

二日、乙亥日向大光寺長甫岳翁寂ス、

〔延寶傳燈錄〕十三 南禪乾峯士曇國師法嗣

日州佛日山大光寺岳翁長甫禪師、勢州中原人、蚤參乾峯士曇、機語投契、峯付法衣、偈曰、千佛傳來一縷頭、太空縛住半肩收、當機分付嶽翁了、勾引兒孫弘祖猷、初住安養、日州郡主田島氏胤大光寺爲卓杖之地、除夜小參、先照後用、疎影橫斜、水清淺、先用後照、暗香浮動、月黃昏、照用同時、霜禽欲下先偷眼、照用不同、時粉蝶如知合斷魂、拈拄杖卓一下曰、恁麼批判、只作孤山處士詩話會、不知汾陽老人開悟門、何故寒梅雪綻在前村、下座、師於州内開興聖、大乘等六寺、康安二年八月二日示疾、衆集垂誠書偈曰、虛空落地、大海連天、月歸西嶽、威音已前、置筆跌座而化、諸徒樹塔曰多福、

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月一日 二日

傳記

士曇ニ參ス

山城安養寺住ス
田島氏大光寺ヲ胤ス

日向ニ六寺ヲ建立ス

〔續扶桑禪林僧寶傳〕二 大光嶽翁甫禪師傳

禪師諱長甫，號嶽翁，生勢州某氏。參乾峯廣智國師，相契，囑以偈曰：千佛傳來一縷頭，太空縛住半肩收。當機分付嶽翁了，勾引兒孫弘祖猷。竝副以南山衣盂，以表傳法之信。出住城州安養寺，偶杖錫遊日州，太守田嶋氏一見如平生歡。擇佛日山所謂金地者，創大光禪苑，挽為第一代開山。湧殿飛樓，照暎林巒，千楹列而巍々，四衆來而濟々，盛哉時也。國師大喜，且以甫與文殊大士有緣，為立大士像於正殿，其像嘗有神異。甫事之如生。康安二年將告終，召門弟子曰：山僧滅後不踰時日，當茶毘，不必作佛事報訃音。茶毘之後，收骨灰投水，不用舉哀造塔。又云：本山住持當選其器，所謂器者，不道有才，有智，唯以道行慈忍為先，次以護戒明律為當。其共住者，亦須遵法持律，而究明個事。若乏糧時，應每日出隊，老少相將，至草衣木食，辛勤行道。正先德遺風，出家人所應為者也。至囑々々，臨滅復書偈別衆，有虛空落地，大海連天之句，遂加趺座而逝。實康安二年八月初二日也。門弟子行闍維法，塔于寶峯，榜曰多福，有語錄若干卷。天正間，罹于回祿，無復存矣。所立寺宇有六，曰興聖，曰大乘，曰正法，曰靈光，曰極樂，曰寶聚，皆咄嗟而成云。

〔大光寺文書〕二 日向

〔附考〕大光寺開山岳翁和尚遺偈

虛空落地，大海連天，月飯西岳，威音以前。

康安二年八月二日 岳翁遺偈

珍重大衆

〔大光寺文書〕一 日向

當寺住侶後輩可守護規式

一 住持職事，小師之中，選器用，自法眷中可勸請。小師中無其器用者，山僧取立僧中可招請也。猶以無其器者，就于先師塔頭加評義，選器而可請矣。所謂器用者，非有智有學，貴賤老少，以道行慈悲，普請修造，利生興法等事為先，以持戒持律斷□□齋等，可為勤者也。共住僧侶持律遵繩同前。

一 寺家失食之時，住侶衆僧每日出隊，老少相伴遊化村落，乞食於其有機無緣，可供養大衆，補佐常住者，木食草衣，辛勤行道，出家的旨，古聖先德之遺□□學之云々，當世禪侶定有輕賤毀謗者，歟，不可痛之，不可耻之，緇衣本意，非為人天名譽，為佛法荷擔也。只以入里乞食，將一比丘之金言，可本據者也。

一 寺家修造，普以勸緣，可覆蔭山門，山僧當寺開基本願，濟度三界無福衆生，要

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

遺偈

大光寺規
住持職ハ
器用ヲ選
フベシ

寺家失食
ノ時遊化
乞食スベ

寺家ノ修
造ハ普勸
合力ニ依

住侶ハ戒規ヲ遵守ス

知事住持無實ノ難等ヲ斷ズニ處カラス

年中行事等ノコト

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

做佛法大興之檀度、依山僧無智無福、無一(下)ケ有力檀那接得之分、造功只依現前清衆勸緣行道力耳、不違本願、不論真俗貴賤、男女上下、不嫌寸材尺木、一錢一粒、普勸合力、永昌寺院者、四恩惣報、三有齊資、法界合識、同圓種智、一當寺僧侶堅持戒經、緇林法訓、日用清規明文、起居動靜、可合規繩、遵行、若於衆中違順相爭之時者、不論理非、任諸方准繩之義、兩ケ共可出院也、但僧與沙彌、行者與人工、不准義、於衆中者、不存尊卑貴賤之義、信佛祖之規繩、可定法令、

一知事僧、雖其身廉直、爲助寺家、存儉約義之處、依有衆徒并人工等惡毀、雖致無實難、不窮根源、不可出院、於其身、有露顯大罪者、雖不能抑留、猶以衆慈可有覆蔭、况有楚忽之義乎、住持職義、以同前、都鄙大小寺院、於此事多取難、笑於俗家他宗之族、偏是佛法衰頹、僧家荒廢、不可如之、所詮廻思慮於十方、率爾不可令行、

一年中行事修正七ケ日、每日勤行山僧平生所作行課不可欠却、禮佛誦經神呪等、新添行道者、當時住持隨意而行、每月當忌日、列祖諷經、并且望四節等諸諷經、不可退轉、安居楞嚴會以前禮佛九拜、不可省略、正當七月廿五日本

寺解夏、爲感得衆僧積功累德之行業、

一酒肴、五辛、時非食類、堅慎之、不可入於寺中、

一山林竹木、可護持事、不分老少、自他門弟、爲山門爲後人、可守護同心、依仁儀權勢等、不可施俗徒、但至寺家合力人者、隨宜可與之歟、

一十方檀那、爲訪前亡後化、或爲祈現當二世、有田畠寄附之輩者、永鎮位牌於本寺、懇懃可致諸檀祈禱、并亡沒追嚴者也、當寺立功造營以來、田園錢財合力檀那之子孫、與寺家住侶、互無疎隔、可有結緣、自家更無僧侶供養根地之間、普得貴賤真俗之皈依、廣祈修因得果之德本者也、

一本寺長老與諸大檀那和睦同心、不義之時者、互以慈愍禮謝、合躰同心、

一諸檀那寄進狀、以下寺中大小家具等、住持并僧侶不可私用、不許門外受用、永鎮公界用之、寄附狀於他所、若有其用者、寫案文可用之、門弟面々同心護持、而常可決有無、若有家具寺物等私用之輩者、永不可有寺家入頭交參之分、非釋子之種族、正是外道之種姓也、報檀家可有劫賊之罪科、

一天下諸師示寂之後、同門兄弟之中、略有不和之義、俗家猶以有此誠哉、况是僧者、以和合爲僧、縱雖有不義之躰、屋裡兄弟互加教誡者、忘却理非、拋捨身

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

酒肴五辛類、時非食類、山林竹木、可護持事、善ノ祈禱、懃ニスベシ

長老和睦同心、寄進狀、私用スベカラズ

減後同門和合スベシ

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

三七四

入寂ノ後

木脇祐爲
等ノ助縁
ヲ忘失ス
ベカラズ

平島資直
等ノ助縁
ニ報恩ス
ベシ

長岑菴主
立ニ工匠
長昌ノ忌
辰ニハ結
縁ニシテ

開基寺菴
住持職

心爲興法利生可掩息和同向外不可揚家醜先言在耳諦信々々

一山僧入寂之後不可忌齋不可諷經不可立塔不可安牌若於此地有終焉者

茶毗之後（後書）可埋安寶塔後末後改此一句灰骨共以可投水底不可遺骨茶毗之時不可表佛事不可報他寺

他鄉僧尼并真俗男女自家屋裏兄弟大悲呪一反可唱之命終之後不廻時

日可茶毗者也（後書）者ケ末後一句也更不可容多語者也三十年後莫道山僧無

遺囑仰冀寺家護持保任利生弘法

一木脇祐爲法號永祐守永祐胤法號長昌祐村永勝三ヶ同爲山僧之徒弟而

於當寺創草以來隨分合力各々精勤原夫夙植德本修因得果之證驗分明

者歟小僧門弟與彼子孫值遇結縁使不斷絕矣就中長昌寄付於山僧田地

懇志之至後輩豈忘失耶酌流尋源嗅香討根之謂也祐顯以後亡沒致追善

并可祈現當各願者哉

一平嶋資直法號長資內室見泰立當寺開基之願行偏依兩ヶ信力實力成達

者也始於寶殿梁柱至于當院成功無不山川河海奔波淨刹未開以前運出

家財五十錢貨加之終功之間合力不可勝計然則居此堂者存報恩追嚴之

義可祈子孫增福者也守永祐真法名永法懇志同前縁深義重故記之自餘

師資遠近結縁者依繁多不能記誌精志同前不可疎親僧徒所誓佛法弘通不可爲世諦流布者也

一開山檀那長至見一兩所忌齋寺家隨力營辦可致懇志之追善也山僧夙因

互稔成斯基業是偏非一世所感者歟

一長岑庵主并工匠長昌正忌辰可有結縁諷經成禱山僧而成佛閣新來晚到

安眠倒臥之床非此辛勤勸縁奔波行道之力乎

右爲未來際所定規式不可毀犯若違法令之輩者以寺中評義可出院不山

僧徒弟者歟大概所記雖無胸中一點私曲凡情難解之道伏乞三寶印可諸

天洞鑒

貞和六年卯月廿五日

開山比丘岳翁長甫（花押）

山僧開基寺菴住持職事次第不記之

興聖寺寄附之狀安在大光寺

大乘寺寄附之狀同前

正法菴寄附之狀同前并山嶋清寺之狀同在之

靈光寺

極樂寺重書等在子大光寺

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

三七五

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

三七六

寶聚寺雖為最初開山之寺、返還檀那已畢、

一諸寺住持職門弟之中、撰出法器、諸法眷中、可勸請法式行道之體裁、可任當寺之例者也、

一年中行事、日用修進、問取大光寺長老、互以評義可行諸事者也、

延文三年戊戌八月廿五日

住山長甫(花押)

自國寶殿
ノ緣起

(端卷)自國寶殿緣起

貞和四年七月二日、自未申剋大雨大風雷重也、天地夙夜不止、翌日晨旦大工入守之次、拜見寶殿上及冠木、兩處生痕、有恠不言、同日山僧率衆僧檀那真族等、普請之次各見之奇恠、同心或謂風吹打松枝擊之、或謂雨洗潑墨、大衆疑著、大衆山僧欲傳人塗墨、雖然無階梯間、送數日畢、同九日夜半、大工夢眞俗奇人來、現此瑞、諸人不信、寫瓶可歸歟、及思惟言語再三、頻見殿上唱之、山僧同十日未明越木脇息(息ヲラシ)文章、於即日於留守大工依夢想一木輩殿上見之、如文字語、衆僧人不信、大工乞昏墨寫下可置之、此時衆疑不上、某甲長惠登殿上見之、自國之二字、自字分明、從此貴賤上殿見之、希代奇特也、依此號自國寶殿、同月廿五

日就于寶殿勤行始之、當寺解夏、同日用之、九月三日造功已畢、山僧謂此瑞今夏百日、大衆普請行道無退轉謂歟、當寺開關已來、國中貴賤感夢奇特不可勝計間、不勝記誌耳、爲後人略拜書之、

依開山住持岳翁老師之命、

貞和四年重陽十六日

小師長惠謹誌之、

(追記)右所記事蹟者、蓋載可有開山和尚之錄中、既羅兵燹不存、今得艸藁謄寫畢、恐有芋羊之誤耳、

〔大光寺文書〕〇二日向

除夜小參

先照後用、疎影橫斜水□□先用後照、暗香浮動月黃昏、照用同時、霜禽欲下先偷眼、照用不同時、粉蝶如知合斷魂、拈丈、卓室中木上座、恁麼批判去、只作孤山處士詩話、(金瓶)不知汾陽老人開悟門、何故寒梅雪綻在前村、

〔大光寺文書〕〇一日向

文殊講私記〇本文

貞和六年首夏廿五日書寫之、

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

三七七

除夜小參
ノ語

文殊講私
記

貞和六年五月十二日午諷經至于消災呪殿裏文殊身躰瓔珞輪光蓮花悉皆向前動搖三遍眷屬獅子共以下動住持禮拜六七度再拜之間也至于衆僧喝食等同見了長能上座一人閉目誦經之刻不見之

〔大光寺文書〕

○日向

〔端卷〕東福開山建仁造塔幹緣源淵疏
東福開山國師東山建仁造塔

幹緣比丘源淵謹疏

伏望

十方檀越四部諸弟子運出自家珍造箇無縫塔焉
右原夫大覺世尊入滅一百餘年後阿育大王造塔八萬四千基福山聖一國師般涅槃以降既七十八載本京愛宕珍皇捨妙土而立布四十里金今昔雖殊幽顯相契但如彼全身入正定聚享可同舍利分拘尸那抑〔九カ〕十世法孫要瞰〔案四〕千光祖席仰慕常樂我淨之德用酬僧寶法財之恩慈雲再蔭西洛濱慧日重明東山上謹疏

辨圓ノ造
塔幹緣ノ
疏ヲ書寫ス

延文丁酉臘月 日疏

日向州佛日名山金地大光自國禪寺常住

康安二年壬寅三月五日

開山住持嶽翁永鎮山門

〔大光寺文書〕

○日向

永鎮本寺可訪亡沒

開山檀那二親通西

良慶大德米五十頃寄附寺家山僧買得蓮光寺田畠等

見一檀那亡父淨阿門前三段爲追善

見一禪尼先妣了印同門前田畠

土持領主福富助次郎爲亡父保元寺田一町六反四丈寄附在所當庄內

長鑿給分之内寺之後西坂之下田一反寄附田嶋殿依免許

一自餘之寄進狀面々各願現當之間寄附之狀明文在之不能記錄

〔慧日山宗派圖〕

坤莊嚴門派

乾峰派下

東福乾峰士曇

嶽翁長甫 日向大光祖

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

永世追善
スベキ人
名ヲ定ム

法系

日巖長慧

〔大光寺由來〕向○日 開山和尚之法系

支那國 徑山無準範

扶桑國 東福開聖一國師圓辨

東福南山士雲後住于筑前博多承天寺、鎌倉壽福、圓覺、建長之請、大刹、

東福十七世乾峯廣智國師五山四住

大光開岳翁長甫

〔廣智國師語錄〕附五錄

城州安養長甫長老、袖紙以求警策、其志勤矣、因假法語於上祖（虎物）圓悟大師、乾峯叟重示于大福方丈、

釋迦文多子塔前分半坐、授此印爾、後拈華第二重公案、至於付金襴、雞足山中候彌勒、是多少節文也、達磨迢迢自西竺遊梁、歷魏、冷坐少林深雪之中、有箇斷臂、老子解覷破、不免漏洩、分付伊謂之單傳、密密記子細推之一場之敗闕、自此便喧傳西來旨意、世間隨流將錯就錯、當地流行分五家七宗、遞立門戶、提唱就

士曇長甫
ノ請ニ依
リ克勤ノ
法語ヲ示
ス

士曇長甫
ノ請ニ依
リ克勤ノ
法語ヲ示
ス

實窮之端的成得甚邊事、是故從上達人、不喫這般茶飯、且如何是語當、將知六合外著得眼、早自別也、况無邊香水海浮動、王刹表下視底、乃少知落著、所以道此大丈夫事、撲迭掀豁、步驟作略、唯同夙契證、始善弘荷、終不撒沙撒土、遂與釋迦金色碧眼神光共一坐具地、等閑垂手殺人活人、初無窠臼、只此緊峭、萬苦千辛、至險至毒、下得斷命手脚、然後不虛印授也、白雲師翁云、神仙祕訣父子不傳、

〔廣智國師語錄〕附四錄 甫藏主送袈裟法緒

千佛傳來一縷頭、太空縛住半肩收、當機分付嶽翁了、勾引兒孫弘祖猷、

〔廣智國師語錄〕附五錄

伏承田嶋大居士、留心於內典、抗志於禪關、延接方來衲子、權輿古聖伽藍、其丹悃之所達、誠以可尚之者也、及至于佛滅二千年而建精舍、其地盡是古佛光明之所印也、自非親受靈山付囑焉、為大檀越者耶、爰請嶽翁甫藏主、以當開山住持、豈非夙世之緣、互稔成斯基業之也哉、唯願不涉有無功德、探過宗猷、目擊千里外而已、

福祐增長阿逸多、甫開梵刹達龍華、巨田高嶋鎮邦國、傑閣隆樓聳浦涯、不比賢

士曇ノ贊
甫ニ示ス
法語

于纒補草由來須達即檀家有功德也無功德喚取嶽翁參決他
〔廣智國師語錄〕法語 示長甫藏主

上祖釋迦老子死說經教渡漢以來頓教漸教各隨根器依文解義殊不知上祖
說大藏說小藏而所載出之宗猷也是以達磨大師不辭十萬里遠來大梁對武
帝坐少林接神光直指人心而見心上之性見性之時當人撥轉機智透脫自心
本性之外却來檢點所指之心所見之性始知衆生本來成佛也佛之義不是當
人作佛也而當人忽出佛地之外轉一切有心之者盡以歸佛地也全非人身而
作佛所謂得入無上道速成就佛身這般田地纔是悟明透徹之分也要須踏著
向上玄關諳悉末後一句曩昔雲門參睦州雖有折脚入頭之處而嗣雪峯存臨
濟見大愚雖有肋下築拳之處而紹黃蘗運原夫古德大有道之人不以悟理見
性還源返本而爲究竟極則之地者也所以出一叢林入一保社參法師決大匠
終以不忽焉長甫藏主學於此道有志之志也參侍老僧於東福室中以受潛鞭
密煉日久矣補以知藏之任若於一大藏教外知有別傳正宗正宗之外超脫而
去無忝虎丘隆師振起佛果真風於大千沙界至祝至祝

士曇ノ贊

〔廣智國師語錄〕四頌 嶽翁

萬仞峰頭八字碑老來分付子孫知祝融更有思大老諸佛平吞弄嶮巖

士儂ノ贊

〔友山錄〕中 贊岳翁頂相日向國大寺開山

法空爲座萬象爲舌卓兔角杖握龜毛拂著清淨衣說法身佛是真臨濟孫親入
廣智室早離惠峯晚入日域開七處寶坊興一方禪刹山野恁麼舉揚何曾一字
贊著

〔大光寺文書〕二日向

開山和尚沒後衆評連印書

當寺末寺之住持職并伽藍護持萬般之施設大衆以合躰同心無異義可定連
判之狀

- 書記長慧(花押)
- 知客玄透(花押)
- 監寺長崇(花押)
- 典座禪照
- 藏主長濟(花押)
- 浴主長忍(花押)
- 維那長穎(花押)
- 直歲長光(花押)

長甫寂後
衆評連印
書

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

三八四

長圓(花押) 覺性(花押)
長曼(花押) 知庸(花押)
長達(花押) 長藥(花押)
秀榮(花押)

康安二年十月八日

〔包紙〕
連判書

〔端卷〕
開山塔規式

住山松隱(花押)

定

大光寺開
山塔多福
庵定書

佛日山大光禪寺開山塔多福庵規式條々

一開山和尚法衣堅可守護、本寺入院之時、塔主隨身可度與之、若無塔主、御影侍者可捧之、入院了者、早々持歸可藏之云々、

一本寺同諸末寺文書等、任于開山和尚遺戒之旨、所由時者、寫取安文可用之、

正文者不可出門外云々、

一書籍等若有所用之人、以借狀可用之、同諸家具等、與本寺互可受用云々、

一因塔頭無力、自本寺分百姓一人寄附之、本寺大營時者、手足可召使云々、

一大乘寺鼓鉞鉦磬諸具足等者、有長昌子孫歸住□、永岳翁和尚爲開山、大乘寺興行時者、不移時日可返之云々、

右法眷中、以衆議所定置如件、

應永拾八季 辛卯十一月十五日

至均(花押)

守心(花押)

長一(花押)

自遠(花押)

省己

長林(花押)

〔參考〕

〔花押彙纂〕

之釋家

長甫翁

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二日

三八五

開山比丘岳翁長甫

○大光寺文書(自向)
當寺住侶後輩可守
護規式

大光寺文書

○大光寺文書(自向)
大光寺開山岳翁和
尙遺偈

〔印章彙纂〕 長甫翁



○大光寺文書(自向)
東福開山建仁造塔幹緣疏

〔大光寺文書〕 二日向

〔開山〕 山法衣傳來記

當寺開山和尙御羅衣、依他沾却、石柱和尙被買申、其死去後住山長仲所買返
申也、永鎮山門、覆蔭子孫、可守護法門者也、茲定德住持禎大姉并訓在二大姉、
手自□張把針、以理他生結緣也、

皆應永三十季 卯 八月十一日 住山長仲謹志之、

紗袈裟在此內、

勝幢院主長芳藏主所返申也、 被持任理公界二 闕ク、下

四日、北朝、釋奠ヲ延引ス、尋テ、追行ス、

〔愚管記〕 八 八月四日、丁丑、晴、釋奠延引、中丁云々、

十四日、丁亥、晴、釋奠、公卿左大辨宰相忠光卿、少納言秀長、辨行知等參向云々、

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月四日

長甫ノ法
衣

五日、戊寅南朝近衛中將九條某、淡輪忠重ニ、和泉淡輪莊公文得分ヲ安堵セシム、

〔淡輪文書〕乾伊

(九條中將)
(花押)

和泉國淡輪庄西方公田別ニ六升三合土別馬草事、公文本德分之上者、此間被召上之條、尤以不便之次第也、所詮於向後者、如元永代知行不可有相違也、領家九條中將殿御氣色所候也、仍執達如件、

正平十七年八月五日

左衛門少尉爲重奉

(淡輪忠重)
淡輪庄公文殿

○九條某、忠重ニ同得分ヲ安堵セシムルコト、正平十四年十一月二十七日ノ條ニ、同莊西方公田ヲ領セシムルコト、本年十二月九日ノ條ニ見ユ、

北朝關白近衛道嗣、中臣實幸ヲ香取社神主職ニ補ス、尋テ、實幸ヲ罷メ、中臣實顯ヲ之ニ替補ス、

〔愚管記〕八 八月五日、戊寅晴、略中香取社神主實幸補之、

土別馬草

〔楓軒文書纂〕十二 香取文書

香取社神主職事、如元管領不可有相違者、殿下御氣色如此、悉之以狀、

貞治元年十一月五日

右兵衛佐花押

神主實顯館

〔參考〕

〔香取大宮司系圖〕

實幸 大宮司
實實綱長子、貞和元年十一月廿一日任補、

秀廣 大宮司
觀應元年六月補任、

實顯 大宮司
貞治二年任補、

吉見氏賴、諏訪神左衛門尉某ノ、能登能登島御厨東方地頭職ヲ掠ムルヲ停メ、天野遠政ニ安堵セラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔加賀前田家藏〕天野文書

天野安藝入道寬譽、多年軍忠相積仁候、就中於當國、連々忠節異于他候之處、一所懸命之地、當國能州、以能登島御厨東方地頭職諏方神左衛門尉掠給候、可預安堵御裁許之由歎申候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月五日

三八九

一所懸命之地

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月六日 七日

三九〇

康安二年八月五日

前參河守氏頼(音見)花押

進上 御奉行所

天野安藝入道寛譽、多年軍忠之仁候、就中於當手、連々戰功異于他候之處、一所懸命之地、當國能州、以能登嶋御厨、東方地頭職、諏訪神左衛門尉、掠給候、就其歎申入候、可預安堵御裁許候哉、此段定彼仁可令言上候、恐々謹言、

八月五日

前參河守氏頼(音見)花押

謹上 七條殿(斯波高經)

○幕府能登島東方地頭職ヲ、遠政代ニ交付スルコト、觀應二年七月二十四日ノ條ニ、幕府能登野崎飯浦二村ヲ、遠政ニ交付スルコト、延文二年七月二日ノ條ニ見ユ、

六日、己卯北朝雜訴、

〔愚管記〕

八月六日、己卯陰、略今日雜訴御沙汰云々、

七日、庚辰斯波氏經、大友氏時等ト、豐前守護代菊池武盛ヲ討チテ、之ヲ破リ、尋テ、阿蘇惟村等ヲ招ク、

守護代以下五十餘人ヲ討チ取ル

〔阿蘇文書〕

室町家執事書狀

武光進退其後無心元候、但要害等御堅候之間、心安存候、彼邊事委細可承候、兼又豐前國合戰及三ヶ度ニ、每度御方打勝候了、就中去七日合戰、敵方守護代以下可然之仁五十餘人討取候、御敵悉降參、一國大略御方罷成之間、悅喜無極候、定御同心候哉、尙々其邊事無心元候、恐々謹言、

八月九日

氏經(斯波)花押

阿蘇大宮司殿(惟世)

到來八月十一日巳刻、

〔阿蘇文書〕

室町家執事文書

きのふあうせんもんこけさん候、おれのまやうちうの事、御ほんあうのてい、かさり申され候、悦喜申さかりなく候、せいまやうをもて、あひさうひこけいやく申候しあひさ、いよくたのま申て候、御同心のてうあひさ、悦入候、

一きもちたくま申候ま、いこのへんにふうせ川候、まんよふにあひさ候へとも、かねて御あんなち候いて、ときこのあまかんときたるへく候あ

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月七日

三九一

七十餘人
ヲ討テ取
ル

日向ノ軍
勢肥後八
代ニ攻メ入
ラントス

いふ御心へのふめこけるをらのせいふをもく申候、せつねきこしめ
し、よく／＼御ようしんあるへく候、

一中ふせんの事、去七日かつせんこ御方うちうち、まゆこ又さいくわんい
けむねとの物三十よ人、あうして七十よ人うちとりて候、あのとちくに
の人々、大アやく御うさこけきて候、やまかあさをいけの人々、たういの
こなりかうるにて御とさあけ候、まつらの人々もすてこうちいて候よ
しきこゑ候、日向の人々くませいあいとにも、やけしろこうち入へきよ
し申て候、かやうにまよいう同心こうちあち候あいふ、ほと候いしとあ
んして候、あぢ／＼これの心中、このせいあまへ尋申され候へく候、ふし
んれん／＼にうけ給候い、悦入候、恐々謹言、

八月十三日

大友 氏時花押

阿蘇大宮司殿

〔阿蘇文書〕

四 室町家執事書狀

〔編書〕 到來 康安二九二

連々雖可進使者候、先度如申候道路難儀之間、無案内令懈怠、心中更非等閑

料所モ進
ズベシ

候、其邊事一向憑存候、當城（豐後高崎郡）攻寄候者、隨進退可有御計候、兼又料所事、自是雖
可進候、御望在所不存知之間、不進候、注給候者、可書進候、且京都可被申子細
候者、可承存候、身之一大事候、可注進候、定不可有子細候、此間御辛苦返々察
申候、恐々謹言、

八月廿七日

左京大夫氏經花押

謹上 阿蘇大宮司殿

〔志賀文書〕

三 肥後

志賀藏人頼房當病之間、雖不叶起居、自去年八月參住高崎城、私候大將御陣、
致日夜警固之上、差遣子息彌太郎氏房於豊後國大野庄鳥屋城、打塞凶徒武
光本國之通路、致不退合戰之間、連々軍忠、雖不違注進、

貞治元年十一月十日合戰之時、

武光一族鬼塚左衛門次郎討取之上、氏房親類大窪孫三郎、若黨中尾兵

衛三郎左近大郎被疵畢、各其條アリ

同十一日、

分捕頸一、不知名字、若黨進又五郎、窪助次郎、中間後藤次、六郎次郎、彦五郎、源

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月七日

頼房病ヲ
力メ高崎
城ニ參住
ス氏房豊
後大野庄
鳥屋城ニ
戦フ

内被疵訖

同廿九日

若黨泉右衛門太郎高濤討死、若黨古見孫三郎、中間六郎次郎、源八七郎次郎被疵畢、

同二年潤正月廿五日

若黨進平五盛見討死、若黨後藤太實房、中尾兵衛三郎氏平被疵畢、以前條々大概如斯、此外不可勝計、合戰未落居、劇務之砌日數相隔者、依可有公私不審、先粗所令注進也、早預御證判、爲備後規、言上如件、

貞治二年卯月 日

承了 (大友氏卿) 刑部大輔(花押)

○北黨大友氏時、筑後肥後ノ南軍ヲ撃タントシ、惟村ヲ招クコト、二月十五日ノ條ニ、菊池武光、豊後萬壽寺城ヲ去リ、斯波氏經、少貳冬資等ヲ筑前長者原ニ撃チテ之ヲ破ルコト、九月二十一日ノ條ニ見ユ、

十日、癸未北朝、大德寺住持義亨ニ、若狹名田莊内田村ヲ安堵セシム、

〔大德寺文書〕丁山城

若狹國名田庄内田村事、可止其妨之由、被申彈(那智親王)正親王了、存其旨、可被全知行給者、天氣如此、仍執達如件、

康安二年 八月十日

右中辨行知

(義字) 徹翁上人禪空

十一日、甲申基氏、岩松直國ノ本領ヲ安堵ス、

〔正本文書〕

本知行分事、如元所還補也、早守先例、可被致沙汰之狀如件、

康安二年八月十一日

基氏(花押)

(直國) 岩松治部少輔殿

十五日、戊子後村上天皇、御製ヲ宗良親王ニ賜フ、尋デ、親王御返歌ヲ上ラセラル、

〔李花集〕

秋歌

正平十七年秋住吉行宮より、おとしれ八月十五夜こそ

月もおもしろうりしか、いづゝ見つらんかと仰らまて、年へぬるひあ
の住る乃秋のあまを月都とおもひさよやまを有しうの、御返事よ
申侍し、

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月十一日 十五日

三九五

明月ヲ御覽セラレテ御興アリ

いづ、せむ月も都と光そふ君すとの江乃秋のゆるしさ
月よ君思ひ出たり秋深し我をよみての山とあきくよ

北朝石清水放生會ヲ延引ス、尋テ、追行ス、

〔愚管記〕

八 八月八日、辛巳、晴、○中自禁裏有御書、放生會參向辨事、可令問

答信兼朝臣由也、令申畏奉由、

十一日、甲申、陰晴不定、入夜雷鳴雨降、信兼朝臣放生會參向事、令申領狀之間、
申入禁裏了、藏人頭今度之闕、可有御沙汰之由勅約也、

十五日、戊子、陰、申剋降雨、放生會延引、依社家訴訟也云々、

九月十五日、丁巳、晴、放生會上卿參議保光卿、辨信兼朝臣、次將左中將公彦朝
臣云々、

十七日、庚寅南軍、北黨攝津守護代箕浦定俊等ヲ、同國神崎ニ撃チテ、之ヲ走
ラス、

〔愚管記〕

八 八月十七日、庚寅、晴陰不定、時々降雨、南方凶徒打入攝州云々、

守護代一戰之後引退云々、官軍等猶可令發向之由風聞、
十八日、辛卯、晴、攝州凶徒引退之由有其說、

近衛道嗣
ヲシテ放
生會參向
辨事ノコト
ヲ信兼ニ
問ハシメ
テハシメ
ラハシメ
テ

社家訴訟
ニ依リテ
延引ス

南軍引退
ノ風聞

〔北河原森本文書〕

伊丹杜本軍人允基長申軍忠事

○上略全文ハ正平十六年十月次今年八月十七日、於神崎御合戰之時、致忠節
候畢、此等子細、箕浦次郎右衛門尉令見知之上者、賜御證判、爲備後證、粗言上

如件、

康安二年八月廿五日

一見了(佐々木高秀)
(花押)

〔太平記〕

三十八前三田家本 和田楠與箕浦次郎左衛門軍事

南方ノ敵軍○敵軍ノ五字無シ、和田楠モ、相模守ニ兼テ相圖ヲ定テ、同時ニ

合戰ヲ始ント議シタリケルカ、七月二十四日、相模守討レテ、四國中國ハ、
考太平記ニ、金勝院大略細川右馬頭頼之ニ靡キ從ヌト聞ヘケレハ、日來ノ
本不載四國トアリ、

支度相違シテ、氣ヲ損シ色ヲ失テソ居タリケル、サモアレ加様ニテ徒ニ日
ヲ送ラハ、敵ハ彌勝ニ乘テ、諸國ノ御方降人ニナル者アリヌト覺レハ、一軍

シテ、國々ノ官方ニ氣ヲ直サセントテ、和田楠其勢八百餘騎ヲ率シ、野伏六
千餘人○院本、不載野伏トアリ、前田家本、野伏以下六字無シ、神崎ノ橋爪へ

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月十七日

南軍清氏
ノ死ニ依
リテ計畫
齟齬ス

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月十七日

度々ニ及ヘリ、サレトモ箕浦懸破テハ通り、取テ返テハ戦ヒケルニ、太平記考
 生ハ知ス七八、騎懸破テ云々トアリ、一番ニ間ニ西源院本、其河原林彈正左
 衛門ハ本、載寺倉五郎トアリ、討レヌ、是ヲ見テ芥河右馬允スケナフ太平記考
 疑トアリ、前田家本、芥川右馬允無訓傳會爲名乎、可引分レテ落テ行ントシケ
 ルヲ、日比ノ口ニハ似ヌ者カナト、箕浦ニ言ヲ懸ラレ、一所ニ打寄テ相伴フ、
 箕浦是ヲ案内者ニテ、數箇所ノ敵ノ中ヲ遁レ出都ヲ差テソ上リケル、下ノ
 手ニ控ヘタル者共ハ、落方ヲ失テ惘然トシテ居タルヲ、源院本、考太平記ニ、西
 小勢ナリトモ、志ヲ同シテ居ケル處ニ、箕浦四郎左衛門進出テ得ケルハ、御方
 三カ間ニ、一人モナカテ取テハ有ヘキト云モ、果サレバ、少カシクハ、先懸ノ
 ハテ懸レ、或ハ出テ程被テ、左右ヘ颯ト引退ク、始百騎許ト見ヘシ、佐々木カ勢、或
 キ居タリケル云々、本、陣暫息ツ、木村兵庫允泰則、本、考太平記ニ、西源院
 齟齬ト兵共ノ掟面存知ノ前ナレトモ、戰難儀ナル時、死ナントスレハ生、
 生ントスレハ死スル者ニテ候ソ、只幾度モ敵ノナキ方ヘヒカデ、敵ノ大勢
 控ヘタラン所ヘ懸入テ戰ハンニ、西源院本、今一、討レハ元來ノ儀、討レヌ
 ハ懸拔テ、西ヲ指テ、落テ行ンニ、敵モ流石命ヲ捨テハ、サノミ長追ヲハシ候

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月十七日

ハンヤ、云處實モト思ハ、泰則ニ續ケヤ人々ト云儘ニ、西源院本、西ヲ指
 ハト云ケル、淨光寺ノ前ニ、百騎許西源院本、桶カ、控ヘタル敵ノ方ヘ、馬ヲ引
 返シテ歩マセ行敵是ヲ見テ、是ハ何様降人ニ出ル者カト、少猶豫シテ控ヘ
 タル處ニ、西源院本、守リ、居歩立ナル石津助五郎行泰ニ、矢二筋三筋射サ
 セテ、敵ノ馬ノ足些シトロニナレハ、三騎ノ者トモオツト喚テ懸入、百騎許
 控ヘタル敵、颯ト分レ靡キテ、敢テ是ニ當ラントセス、只射手ヲ進メテ射サ
 セケル程ニ、箕浦彌次郎討レヌ、本、考太平記ニ、金勝院本、作彌同四郎左衛
 門、本、考太平記ニ、四郎、北條家、南都本、深手ヲ負テ田中ニ伏タリ、本、考太平
 源院本、云、木村泰範、我ニ續ケ、人々ト引返シテ、矢二筋射サ、降人ニ出ルカ
 下、桶カ勢、少猶豫シケル處ニ、田上、石澤、杉、芹川ニテ、武共ナリ、只置テ、馬々
 足ケレ、喚カセテ、小川ノ有ケル前ニ、當テ引退テ、戰ハントモ、セ、散々
 ケレコソ、射サセケル去程ニ、多賀左近將監ハ、馬射テ、頭コソ、落行ケレ、
 次郎ハ、死セシトヤ思、和カ武者ナリ、立敵テ、八騎ニ取籠レ、一騎懸入ケ
 ル志、本、考太平記ニ、腹切、切シテ、深手ヲ負テ、中ニ伏テ、右衛門ケル力、
 ルリ、同四郎、左衛門、切シテ、深手ヲ負テ、中ニ伏テ、右衛門ケル力、
 劣ラヌ、大男ノ一、縮シタルヲ、鎧ノ上ニ、行ケル云々、本、考太平記ニ、
 リキニシテ、尼崎道場迄、只一息ニ、上ニ、行ケル云々、本、考太平記ニ、

左衛門、本、考太平記ニ、六郎、今、衛門家、金三所院、迄、手、上、作、次、郎、今、作、四、郎、相、木、村

兵庫モ馬ノ平頸草脇二所射サセテ、馬ヲ参考太平記ニ、西源院本云、深田ノア
 ゼニ下立タリ、スハヤ討レヌト見ヘケルガ、木村兵庫放レ馬ノアリケルニ
 打乗テ、徒歩ニ成タル鹽治ヲ、馬ノ上ヨリ手ヲ引テ、本云、参考太平記ニ、金勝院
 騎テ、徒立ニ成タル鹽治ヨリ、敵味方引合云々、下同トアリ、尼崎ヘ落テ行、敵跡
 モ多キニ打ノセ、馬ノ上ヨリ手ヲ引合云々、下同トアリ、尼崎ヘ落テ行、敵跡
 ニ附テモ追サリケレハ、道場ノ内ニ一夜隠レ居テ、翌ノ夜京ヘソ上リケル、
 文○参考太平記ニ、自正川河原林正左衛門寺倉五郎討レ、本云、甚簡省、與本
 ヲ追拂御方次郎道左衛門尉上村兵衛助、鹽治六郎左衛門尉、平頭三頭、斬レヌ者モ
 ナカリケリ、四郎左衛門尉、馬ノ餘ニ手痛敵ニ打合テ、兎ノ眞額、小手ノハ
 ノ、御方ノ兵散々ニナリケル、同彌二郎同所ニ討死ス、此者共如此成シカ、和田楠
 等、只一軍ニ攝州ノ敵ヲ追落シテ、勝ニ乗トイヘトモ、赤松判官記ニ、参考太平
 リ、信濃彦五郎作兵衛助、顯トアリ、兄弟、猶兵庫ノ北ナル多田部城ニ籠
 テ、○参考太平記ニ、金勝、兵庫湊河ヲ管領スト聞ヘケレハ、九月十六日、石堂
 右馬頭、和田楠三千餘騎ニテ、兵庫湊川ヘ推寄、一字モ殘ラス、燒拂フ、此時赤
 松判官兄弟ハ、多田部、山路二箇所ノ作、○参考太平記ニ、金勝院、本城ニ籠テ、敵
 懸ラハ、爰ニテ利ヲセント待懸ケルカ、楠如何思ヒケン、懸テ、兵庫ヨリ引返

和赤松田
 信濃彦五
 郎等ノ籠
 部城ヲ襲
 フ

シケレハ、赤松出合ニ及ハス、野伏少々城ヨリ出シテ、遠矢射懸タル計ニテ、
 ハカハカシキ軍ハナカリケリ、○下略、改元等ノ日ノ條ニ收ム、
 ○北軍、京都ヨリ攝津ニ向ヒ、義詮、東寺ニ陣スルコト、九月二十二日ノ
 條ニ見ユ、

義詮、越前長樂寺ヲ廢シ、同國永徳寺ヲ安國寺ト爲ス、

〔前田家所藏文書〕

古蹟文
 徵三

先年回祿之後、無指再興、今者廢寺也、難對揚云々、者爲兩庄兼帶之地頭、度々
 吹舉難棄捐之上、兩寺之用捨、非無其謂之子細見狀、右然則改長樂寺、以永徳
 寺可稱越前安國寺之狀如件、

康安二年八月十七日

左中將花押

當寺長老

二十三日、丙申、幕府、播磨松原莊領家職ヲ、石清水八幡宮雜掌ニ交付ス、

〔離宮八幡宮文書〕

○山城

石清水八幡宮領播磨國松原庄領家職事、任御教書同御書下之旨、今月廿三日
 日、茲彼所沙汰付領家職同名々、於社家雜掌候畢、仍渡狀如件、

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二十三日

長樂寺ハ
 回祿ノ後
 再興ナシ

康安二年八月廿三日

藤原賴重(花押)

二十五日、戊戌南朝、筑前箱崎八幡宮領那珂西郷ノ地等ヲ、大宮司田村重政ニ還付ス、

〔田村文書〕 一 筑前

八幡宮崎宮大宮司重政申、神領那珂西郷内辻堂島地壹所内堀田三段在之、號瓶酒免、事爲大宮司分之處、俊興房代官心法爲非器身、令展轉買得上者、就社家興行、可返賜由、重政訴申之間、可明申子細之由、度々雖令催促、心法令難溢之上、爲大宮司本知行内之條、顯然之間、於此島地者、所被返付重政也、仍下知如件、

正平十七年八月廿五日

惣官沙彌(花押)

俊興房代官心法買求メタル地

白井九郎行次郎ノ非

八幡宮崎宮大宮司重政申、〔申領方〕糟屋西郷内中原田地參段〔木〕白井九郎次郎爲非器所令知行、〔事カ〕被成神領興行令旨上者、可返給之由、依訴申、相尋子細之處、〔無カ〕異儀之間、於彼田地者、所被返付重政也、仍下知如件、

正平十七年八月廿八日

惣官沙彌(花押)

○北朝重政ヲ箱崎大宮司ト爲スコト、延文五年八月六日ノ條ニ見ユ、

二十七日、庚子南朝、攝津柳津河尻二分ヲ、權中納言某家職掌ニ沙汰セシム、

〔南朝文書〕

攝津國柳津河尻貳分事、任國宣之旨、可令沙汰給權中納言家職掌於當所之狀如件、

正平十七年八月廿七日

兵庫助

渡邊中務丞殿

○國宣ノ日ヲ詳ニセズ、姑ク是日ニ掲グ、

一色範親、兵糧料所トシテ、相良孫五郎ニ、日向飢肥北郷山東本政所方四分ノ一地頭職ヲ、相良豊前前司某ニ、同郷内山西星倉方半分地頭職ヲ預ク、

〔相良家文書〕 一

日向國飢肥北郷山東本政所方四分地頭職事、爲兵糧所々預置也、任先例致沙汰彌可致忠節之狀如件、

康安二年八月廿七日

〔一色範親〕刑部少輔(花押)

相良孫五郎殿

南朝正平十七年 北朝貞治元年八月二十七日

日向國飢肥鄉内山西星倉方半分地頭職事爲兵糧所々預置也、任先例致沙汰、彌可致忠節之狀如件、

康安二年八月廿七日

刑部少輔(花押)

相良豊前々司殿

○範親、孫五郎ニ、兵糧料所トシテ、日向國富莊北加納郷地頭職ヲ預ク
ルコト、延文五年十一月十三日ノ條ニ見ユ、

二十九日、壬寅斯波氏經、斑島源次郎ノ請ニ依リ、肥前由津利葉三郎跡滿澤ノ地ヲ管セシム、

〔斑島文書〕

○東京帝國大學所藏

(附箋)斯波左京大夫氏經

肥前國由津利葉三郎跡滿澤三十事就望申所預置也、若有子細者、可有其沙汰、仍執達如件、

康安二年八月廿九日

(斯波氏經)左京大夫(花押)

斑島源次郎殿

滿澤三十町

三流衆僧
勤修

○氏經、佐志菊壽丸ノ忠節ヲ褒スルコト、四月十一日ノ條ニ見ユ、
是月、入道尊道親王、愛染王護摩ヲ修シテ、彗星ヲ祈禳セラル、

〔門葉記〕

○山城 門主行狀三

入道一品尊道親王

號後青龍院

第百卅四代座

主、(貞治元年)同八月日、於本坊、始修愛染王護摩、彗星御祈、三流衆僧數壇勤修内也、

九月 癸卯朔盡

一日、癸卯光嚴法皇、法隆寺ニ御幸アラセラル、尋テ、高野山ヨリ吉野ニ御幸シ給ヒ、後村上天皇ト御對面アラセラル、

〔斑鳩嘉元記〕

和大 三百六十五 康安二年 壬寅 九月一日、持明院法皇、禪僧當寺御參詣、在之已下十餘人、御乘馬也、一夜御逗留、一事以上北室之沙汰、次日、二日、中食以後、西寺御入、當朝程ハ、東寺御巡禮之後、中門ヨリ直ニ御還向畢、寺中ハ御歩行也、

西寺東寺ヲ巡禮セラル

〔太平記〕

三十九前 光嚴法皇行脚 附崩御事

光嚴院禪定法皇ハ、正平七年ノ比、皇自吉野還幸、按、第三十三卷、持明院出賀名生云々、延文二年、即正平十二年也、今云正平、南山賀名生ノ奥ヨリ、楚ノ囚ヲ赦サレサセ給ヒテ、都ヘ還御成タリシ後、世中ヲイト、ウキ物ニ思召知セ給ヒシカハ、姑射山ノ雲ヲ辭シ、汾水陽ノ花ヲ捨テ、猶御身ヲ輕ク持ハヤト思召ケリ、御有増荒増ニ作ル末通テ、方袍圓頂ノ出塵ノ徒ト成セ給ヒシカハ、河州行宮落飾、延文元年於河州離宮、由良覺明和尚奉命著禪衣云々、由是見之、光嚴帝非也、賀名生出、伏見里ノ奥、光嚴院ト聞ヘシ、幽閑ノ地ニ家、今言還都後出家者非也、トアリ伏見里ノ奥、光嚴院ト聞ヘシ、幽閑ノ地ニ

伏見里ノ奥、光嚴院ニ住マセ

給フ

順覺一人ヲ供トシテ、西國巡禮ニ旅立チ給フ

攝津難波浦ニテノ御詠

高野山ニ向ハセラ

ソ住セ給ヒケル、是モ猶都近キ所ナレハ、舊臣ノ參リ仕ヘントスルモ厭ハシク、浮世ノ事ノ御耳ニ觸ルモ冷シクカ、西源院本、イ思召ケレハ、來無所止去無住、西源院本、來ルニ無所、拄杖頭邊活路通ト、中峰和尚ノ作ラレシ送行偈、誠ニ由アリト御心ニ染テ、人工行者ノ一人ヲモ召具セラレス、只順覺〇參考太平記ニ、金勝院ト申ケル僧ヲ一人御供ニテ、山林料數ノ爲ニ立出本作道覺、下微之トアリサセ給フ、先西國ノ方ヲ御覽セント思召テ、攝津國難波浦ヲ過サセ給フニ、御津ノ濱松霞渡テ、曙ノ氣色物哀ナレハ、遙ニ御覽セラレテ、

誰待テミツノ濱松カスムラン我日ノ本ノ春ナラヌ世ニト打涙クマセ給フ、西源院本、慰マ山遠キ浦ノ夕日ノ浪ニ沈マントスルマテ、興セサセ給ヒテ、猶過ウシト思召タルニ、望無窮水接天色、看不盡山映夕映ト云對句ノ時節ニ相叶タルニモ、捨ヌ世ナラハ、何故カ懸ル風景ヲモ見ルヘキト仰ラレケルモ物悲シ、是ヨリ高野山ヲ御覽セント思召テ、住吉遠里小野ヘ出サセ給ヒタレハ、燒痕回縁春容早、松影穿紅日脚西ナリ、海天野景歩ニ隨テ新ナル風流ニ、御足タユムトモ思召レス、昔ハ銷金輕羅ノ茵ナラテハ、假ニモ踏セ給ハサリシ玉趾ヲ、深泥濕土ノ黷ニ汚レサセ給ヒ、御

金剛山ヲ眺メテ亡
卒ノ靈ヲ哀
レマセ
紀伊川ニテ
橋上ニテ
荒武者ノ
暴難ニ遇
ヒ川中ニ
落チサセ
ラル

供ノ僧ハ、仕ヘテ懸シ肘後ノ府ニ替レル一鉢ヲ脇ニカケ、今夜境浦マテモ
歩マセ給ヘハ、鹽ノ干潟ニムレ立テ、玉藻ヲ拾ヒ、○西源院本、鹽干ノ作、鷗儀
菜取海人トモノ、各ツゲノ小櫛ヲサシテ、葦間ニ隠レ顯レタル様ヲ御覽セ
ラル、ニモ、○前田家本、今夜ハ境ノ浦迄ト歩セ給ヘハ、鹽干ノ葦間モ隠レ
玉藻ヲ拾、○穢菜ヲ執、海士人共ノ作ル、御貢備シ民ノ營、是程ニ身ヲ苦シメケルヲ
知テ、等閑ニスサヒケル事ヨト、今更淺マシク思召知セ給フ、首ヲ回シテ東
ニ望メハ、雲ニ聯リ霞ニ消テ、高ク峙テル山アリ、道ニ休メル樵ニ、山ノ名ヲ
問セ給ヘハ、是コソ音ニ聞ヘ候金剛山ノ城トテ日本國ノ武士トモノ、幾千
萬ト云數ヲモ知ス、討レ候シ所ニテ候ヘトソ申ケル、是ヲ聞召テ、穴淺マシ
ヤ、此合戰ト云モ、我一方ノ皇統ニテ、天下ヲ爭ヒシカハ、其亡卒ノ惡趣ニ墮
シテ、多劫カ間苦ヲ受ン事モ、我罪障ニコソ成ヌラメト、先非ヲ悔サセオハ
シマス、日ヲ經テ紀伊川ヲ渡ラセ給ヒケル時、橋柱朽テ、見ルモ危キ柴橋ア
リ、御足冷シク御肝消テ、渡リ兼サセ給ヒタレハ、橋ノ半ニ立迷ヒテオハス
ルヲ、誰トハ知ス、如何様此邊ニ臂ヲ張、作り眼スル者ニテソアルラント覺
タル武士七八人、○本考五六騎トアリ、天正跡ヨリ來リケルカ、法皇ノ橋ノ上ニ

大塔ノ開
キノ見
テ
羅界ノ曼
テ
ラフ
ル

立セ給ヒタルヲ見テ、此ナル僧ノ臆病氣ナル見度モナサヨ、是程急ク道ノ
一ツ橋ヲ渡ラハトク渡レカシ、サナクハ後ニ渡レカシトテ、押ノケ進ラセ
ケル程ニ、法皇橋ノ上ヨリ押落サレサセ給ヒテ、水ニ沈マセ給ヒニケリ、順
覺、アラ淺マシヤトテ、○西源院本、アラ悲シ衣著ナカラ飛入テ、引起シ進ラ
セタレハ、御膝ハ岩ノカトニ當リテ血ニナリ、御衣ハ水ニ漬リテシホリ得
ス、泣々傍ナル辻堂ヘ入進ラセテ、御衣ヲ脱替サセ進ラセケリ、古モ懸ル事
ヤアルヘキト、君臣トモニ捨ル世ヲ、サスカニ思召出ケレハ、○西源院本、サ
作ル、ニ涙ノ懸ル御袖ハヌレテ、ホスヘキ隙モナシ、行末細キ針道ヲ經テ、御
登山有ケレバ、山又山、水又水、登臨何日盡サント、身力疲レテ思召ル、ニモ、
先年大覺寺法皇、○後考多帝トアリ、此寺ヘ御幸ナリシニ、供奉ノ卿相雲客諸
トモニ、一町ニ三度ノ禮拜ヲシテ、首ヲ地ニツケ、誠ヲ致サレケル事モ、有難
カリケル御願カナ、予カ在位ノ時モ、代靜ナリセハ、ナドカ其芳躅ヲ踏サラ
ント思召准ヘラル、サテ御山ニモ御著有シカハ、○西源院、前田家本、サテ大
塔ノ扉ヲ開セテ、兩界ノ曼陀羅ヲ御拜見アレハ、胎藏界七百餘尊、金剛界五
百餘尊ヲハ、入道太政大臣清盛公、○餘考中臺八葉ノ九尊ヲハ、平清盛肉身百

七百餘尊ヲハ、入道太政大臣清盛カニ作ル、手ヲ書タル尊容ナリ、サシモ積悪ノ静海イカナル宿善ニ催サレ、懸ル大善根ヲ致シケン、六大無礙ノ月晴ル時有テ、四曼相即ノ花發ヘキ春ヲ待ケリ、サテハ是モ只一向ナル惡人ニテハ無リケルヨト、今爰ニ思召知セ給フ、落花爲雪笠無重、深樹謬昏日未傾、其日頓テ奥院ヘ御參詣有テ、大師御入定ノ室ノ戸ヲ開カセ給ヘハ、嶺松含風、顯瑜伽上乘之理、山花籠雲、祕赤肉中臺之相、前佛ノ化縁ハ過ヌレトモ、五時ノ說今耳ニ有カト覺ヘ、慈尊ノ出世ハ遙ナレトモ、三會ノ粧已ニ眼ニ遮ルカ如シ、三日マテ奥院ニ通夜有テ、曉立出サセ給フニ、一首ノ御製アリ、

奥院ニテノ御詠

高野山迷ノ夢モ覺ルヤト其曉ヲ待ヌ夜ソナキ

安居ノ間ハ、御心閑ニ此山中ニコソ御座アラメト思召テ、諸堂御巡拜アル處ニ、只今出家シタル者ト覺シクテ、濃墨染ニシホレタル桑門二人御前ニ畏テ、其事トナク只サメサメトソ泣居タリケル、何者ナルラント怪シク思召テ、ツクノ○前田家本、一ト御覽シケレハ、紀伊川ヲ御渡有シ時、橋ノ上ヨリ法皇ヲ推落シ進ラセタリシ者共ニテソ有ケル、不思議ヤ何事ニ今遁世ヲシケルソヤ、是程心ナキ放逸ノ者モ、世ヲ捨ル心ノ有ケルカト思召テ

不輕菩薩ノ精神ニ生キ給フ

大和路ヨリ吉野殿ヘ入ラセ給フ

散聖道人

過サセ給ヘハ、此遁世者御跡ニ從ヒテ、順覺ニ泣々申ケルハ、○前田家本、此主カ語申候ニ社、存知仕テ候ヘ、其態何ト仕ルヘ、紀伊川ヲ御渡候シ時、懸ルシ共存候ハテ、如此罷成テムノ三十六字アリ、紀伊川ヲ御渡候シ時、懸ル止事ナキ御事トモ知リ奉リ候ハテ、玉體ニアシク觸奉リシ事、餘ニ淺マシク存候テ、此貌ニ罷成テ候、佛種ハ縁ヨリ起ル儀モ候ナレハ、今ヨリ、薪ヲヒロヒ、水ヲ汲態ニテ候トモ、三年カ間常隨給仕申候テ、○西源院本、給仕ツカ佛神三寶ノ御トカメヲモ免レ候ハントソ申ケル、ヨシヤ不輕菩薩ノ道ヲ行給ヒシニ、罵詈誶諍スル人ヲモ咎メス、打擲蹂躪スル者ヲモ、却テ敬禮シ給ヒキ、況我已ニ貌ヲヤツシテ、人其昔ヲ知ス、一時ノ誤何カ苦シカルヘキ、出家ハ誠ニ因縁不思議ナレトモ、隨順センコトハ努努叶フマシキ由ヲ仰ラレケレトモ、此者強テ片時モ離レ進ラセサリシカハ、曉闕伽ノ水汲ニ遣サレタル其間ニ、順覺ヲ召具シテ、潛ニ高野ヲソ御出有ケル、○參考太平記、此金勝院本、御下向ハ、大和路ニ懸ラセ給ヒシカハ、道ノ便モ好トテ、南方主上ノ御座アル吉野殿ヘ入セ給フ、此三四年ノ先マテハ、兩統南北ニ分レ、此ニ戰ヒ彼ニ寇セシカハ、○西源院本、尅セ、吳越會稽ニ謀シカ如ク、漢楚霸上ニ軍セシニモ過タリシニ、今ハ散聖道人聖道人ニ作ル、ト成セ給ヒテ、玉體

ヲ麻衣草鞋ニヤツシ、鸞輿ヲ跣行ノ徒涉ニ易テ、遙々ト此山中迄分入セ給ヒタレハ、傳奏イマタ事ノ由ヲ奏セサル前ニ、直衣ノ袖ヲヌラシ、主上イマタ御相看ナキ前ニ、御涙ヲソ流サセ給ヒケル、是ニ一日一夜御逗留有テ、様々ノ御物語有シニ、主上サテモ只今ノ光儀、覺テノ後ノ夢、夢ノ中ノ迷カトコソ覺テ候ヘ、縦仙院ノ故宮ヲ棄テ、釋氏ノ真門ニ入セ給フトモ、寛平○參平記○宇多花山○參真冷○參泉帝○參皇子○諱師、舊キ跡ヲコソ追レ候ヘキニ、院前○西源帝トアリ、家本○應准○寬平○之昔○被追○尊體ヲ浮萍ノ水上ニ寄テ、叡心ヲ枯木ノ禪餘ニ附ラレ候ヌル事、如何ナル御發心ニテ候ケルソヤ、御羨シクコソ候ヘト尋申サセ給ヒケレハ、法皇御涙ニ咽ヒテ、暫ハ御詞ヲモ出サレス、良有テ、聰明文思ノ四徳ヲ集テ、叡旨ニ係候ヘハ、一言イマタ擧サル先ニ、三隅ノ高察モ候ハンカ、予元來萬劫煩惱ノ身ヲ以テ、一種○西源院本樹○作ル、虚空ノ塵ニアルヲ、本意トハ存セサリシカトモ、前業ノ係ル所ニ舊縁ヲ離レ兼テ、住ヘキ有増ノ山ハ○西源院本荒○心ニ有ナカラ、遠ク待レヌ老ノ來ル道ヲハ留ル關モナクテ、年月ヲ送シ程ニ、天下ノ亂一日モ息時無リシカハ、元弘ノ始ニハ、江州番馬迄落下リ、五百餘人ノ百○參相○參齟齬○天正○本作○四百○爲得○トアリ、兵共カ自

法皇御涙
咽ビツ
御物語
アラセテ

重望ノ位
望ヲ懸
望ヲ懸
望ヲ懸

諸卿モ
袖ヲ絞
涙ヲ絞

害セシ中ニ交リテ、腥羶ノ血ニ心ヲ醉シメ、正平ノ末ニハ、當山ノ幽閉ニ逢テ、兩年ヲ○參於○賀名○至延○文二○年歸○洛、凡○六年○也トアリ、過ルマテ、秋刑ノ罪ニ膽ヲ嘗キ、○西源院本兩年○巨ル、是程サレハ世ハ憂物ニテ有ケルカト、初テ驚ク計ニ覺候シカハ、重祚ノ位ニ望ヲモ懸ス、萬機ノ政ニ心ヲモ留サリシカトモ、一方ノ戰士我ヲ強テ本主トセシカハ、遁出ヘキ隙ナクテ、哀イツカ山深キスミカニ、雲ヲ友トシ松ヲ鄰トシテ、心安ク生涯ヲ盡スヘシト、心ニ懸テ念シ思ヒシ處ニ、天地命ヲ革テ讓位ノ儀出來シカハ、蟄懷一時ニ啓テ、此姿ニ成テコソ候ヘト、御涙ノ中ニ語盡サセ給ヘハ、一人諸卿諸トモニ、御袖ヲシホル計ナリ、今ハトテ御歸アラントスルニ、寮ノ御馬ヲ進ラセラレタレトモ、堅ク御辭退有テ召レス、イツシカ疲サセ給ヒヌレトモ、猶雪ノ如クナル御足ニ、アラアラトシタル草鞋ヲ召レテ、立出サセ給ヘハ、主上ハ武者所マテ出御成テ、御簾ヲ褰ラレ、月卿雲客ハ庭上ノ外マテ送進ラセテ、皆涙ニソ立ヌレ給ヒケル、道スカラノ山館野亭ヲ御覽セラル、ニモ、先年麥里ノ囚○西源院前○田家○本、ニ逢セ給ヒテ、一日片時モ過難シト、御心ヲ傷シメ給ヒシ松門茅屋アリ、戰圖ニ入山中ナラスハ、懸ル處ニソ住ナマシ

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二日

四一六

ト、今ハ昔ノ憂スミカヲ御慕○西源院本、有ケルソ悲シキ、○下略、光嚴天皇
七日ノ條ニ收ム、ル、貞治三年七月

〔大乘院日記目錄〕

一 月日(九月之)、光嚴院法皇、高野山以下御修行於吉野南方御

對面御物語在之、

二日甲辰、南朝宮内權少輔橋本某ヲシテ、攝津葺屋莊下司職跡ヲ、河内金剛
輪寺雜掌ニ交付セシム、

〔金剛輪寺文書〕

河内

攝津國葺屋庄下司跡、任先度綸旨、國宣、可被沙汰給金剛輪寺雜掌於下地之
狀如件、

正平十七年九月二日

(橋本正徳)
左馬頭(花押)

橋本宮内權少輔殿

攝津國葺屋庄下司跡事、任去年九月二日國宣之旨、可令沙汰給金剛輪寺雜
掌於下地之狀如件、

正平十八年後正月十九日

(橋本)
宮内權少輔(花押)

渡邊中務丞殿

○南朝同跡ヲ河内駒谷安養寺ニ寄附スルコト、正平三年五月九日ノ
條ニ見ユ、

北黨刑部少輔某、土持時榮ノ日向石崎城ノ戦功ヲ褒ス、

〔土持文書〕

向日

日向國飢肥北郷石崎城凶徒退治之時、馳參抽軍忠之條、尤神妙、向後彌可被
致忠節之狀如件、

康安二年九月二日

刑部少輔 殿

(附卷)
土持八郎殿

佐々木氏頼、近江山上郷内熊原村ヲ、永源寺ニ寄ス、

〔永源寺文書〕

近江

(附卷)
佐々木雪江居士寺領寄進狀
爲衆僧御時料分、山上郷内熊原村、除軍役、諸公事果役以下一圓令進上候、恐
惶敬白、

康安貳年九月二日

(佐々木氏頼)
崇永(花押)

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二日

四一七

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月三日

四一八

衣鉢侍者禪師

○氏賴、永源寺ヲ創シ、元光ヲ住セシムルコト、去年正月十八日ノ條ニ見ユ、

三日、北朝、刑部少輔安部守經ヲ權大輔ト爲ス、

〔師守記〕

○二十九 帝國圖書館本

十一月十日、辛亥、天晴、

〔宣〕

紙刑部少輔安部守經、大輔事、獻之、早可被下知之狀如件、

九月三日

權中納言判

大外記局

宣旨

康安二年九月三日 宣旨

刑部少輔安部朝臣守經

宣轉任權大輔、

藏人右中辨兼丹波權介平行知 奉

請文

謹請

宣旨

從五下貞和四十七鉞云々、
刑部權少輔安部朝臣守經

正五下源匡綱替、
宣轉任權大輔、

右宣旨早可令下知之狀、謹所請如件、師茂恐惶謹言、

貞治元年十一月十日

大外記中原師茂 狀

興福寺、春日社、領若狹耳西郷ノコトヲ幕府ニ請フ、

〔御舉狀等執筆引付〕

春日社、領若狹國耳西郷間事子細先度被仰了、雜掌重參申候歟、可令尋聞食給旨、別當前大僧正御房御消息所候也、恐々謹言、

九月三日

法印公憲

謹上 石橋入道殿

六日、北朝、斯波義種ヲ、民部少輔ト爲ス、

〔師守記〕

○二十八 帝國圖書館本

十月一日、癸酉、天晴、孟冬月朔、方吉慶、所願一

々可成就月也、壽福增長延命、子孫繁昌、官位俸祿可 任意、幸甚々々、

今日宣旨到來、源義種任 輔事也、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月六日

四一九

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月六日

四二〇

時光卿則被出請文了、件義種、利足修理大夫入道、(足利)子也、發向接州大將云々、仍去月六日口宣也、於請、(略)日於補歷者、直口宣日訖、(略)中

口宣一紙、(從五位下源義種、宜任治部少輔事)獻之、早可被下知之狀如件、(時光卿)權中納言判

九月六日

大外記局

宣旨

康安二年九月六日 宣旨

從五位下源義種

宜任民部少輔、

藏人頭左近衛權中將藤原爲遠(奉)

請文

謹請

宣旨

九月六日、
從五位下源朝臣義種

(正五下藤宗重替、)
宜任民部少輔、

右宣旨早可令下知之狀、謹所請如件、師茂恐惶謹言、(大外記中原師茂 狀)
貞治元年四月一日 大外記中原師茂 狀

追言上、

義種民部少輔事、御狀雖載、治部少輔由守口宣、進上請文候、可得御意候哉、師茂重恐惶謹言、

○義詮、義種ト共ニ、攝津ニ向ヒ、東寺ニ陣スルコト、本月二十二日ノ條ニ見ユ、

七日、(己酉)老人星、南極ニ見ハル、尋テ、兵庫頭安倍宗時、勘文ヲ奏ス、

〔師守記〕(二十九)帝國圖書館本 十一月十一日、壬子、天晴、(中略、雜訴ノコトニ)

(收ノ條ニ)今日大夫史於記錄所、老人星勘文見申、家君兵庫頭宗時朝臣内々奏之云々、被相尋自餘陰陽師之處、分明不申、老人星由、然而注進文ハ、老人星文也云々、去月三日自太閤被尋下官務間、注進之由語申之、宗時朝臣注進、予於當所寫之了、大判事同寫之、(略、中)

(漢書)今月七日、曉寅時以來、老人星見于南極、

(十一日)天文要錄云、老人星者、主天子之候壽也、主后妃之德守也、主君臣之儀也、万

勘文

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月七日

四二一

民之昌也、

占云、老人星見則天下太平、

天文錄云、老人星見則治平主壽也、

天地瑞祥志云、老人星見則治平也、

瑞應圖云、王者承天得理則老人星臨其國石民、

占曰、老人星明則主壽昌、天下多賢士、

右占文指歸梗概如件、

貞治元年九月 日

兵庫頭安倍宗時

九日、辛亥、菊池武光、豐後府中ニ入ル、斯波氏經、援ヲ阿蘇惟村ニ求ム、

〔阿蘇文書〕

四室町家執事書狀

不審之處、悅（疾力）了、凶徒既打入符中候、未攻當城候、若寄來候者、一向憑申候、

次通路事、土左次郎致談合籌策候者、悅入候、恐々謹言、

九月九日

氏經花押

阿蘇大宮司殿

到來九月十日、

○氏經、援ヲ惟村ニ求ムルコト、去月七日ノ條ニ、氏經、惟村ノ戦功ヲ褒

通路ハ土
左次郎ト
談合スベシ

スルコト、本月十六日ノ條ニ見ユ、

北朝平座及ビ小除目、

〔公卿補任〕

三十四

參 議從三位藤爲秀 侍從、阿波權守、九月九日辭退、

非參議從三位藤保光 治部卿、九月九日任參木、

（山井）藤有範 九月九日任式部大輔、

〔柳原家記錄〕

六十二辨官補任二下

權左少辨正五位下藤宣方 九月日任權大

納言、宣明卿男、實經雄卿男、

〔愚管記〕

八

九月九日、辛亥、晴、平座、上卿藤中納言時光卿、被行小除目、保光

卿任參議、宣方宣明卿子息任右少辨、其外無差事、

北朝、權僧正深守ヲ法親王ト爲ス、

〔愚管記〕

八

九月九日、辛亥、晴、

今夜權僧正深守立親王宣下云々、武家執奏云々、先日内々被仰合執奏之

〔華頂要略〕

百四十大覺寺

諸門跡傳一

二品權僧正深守法親王

邦良親王第三御子、母尾

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月九日

四二三

上卿

武家執奏

張局、益助、益性、兩親王資、

〔大覺寺門跡略記〕 深守親王

後二條院皇孫前坊邦良親王第三子、母長橋局、曆應四年出家、主大金剛院、任

權僧正、康永四年於下河原道場稟灌頂於性圓親王、康安二年九月九日親王

宣下、親王之子不當彼二品、雖然有室、貴則彼品之例、故宣下云、

興福寺大日郷公文職朝倉入道宗賢ノ、春日社領越前河口莊ヲ濫妨スルヲ

沙汰セラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔御舉狀等執筆引付〕

春日社領河口庄雜掌範盛申、大口郷公文職朝倉入道押妨間事、申詞如此、子

細見狀候歟、忿速可有尋御沙汰候哉之由、大乘院前大僧正御房御消息所候

也、恐々謹言、

九月九日

法印公憲

謹上 修理大夫入道殿

十日、壬子丹波守護仁木義尹、神護寺ノ訴ヲ幕府ニ進達ス、

〔神護寺文書〕

○山城

丹波國吉富新庄惣追捕使職并刑部卿公文職事、高雄神護寺雜掌、帶去年十一月廿日御教書歎申之支狀、謹進覽之候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

康安二年九月十日

兵部大輔義尹(花押)

進上 御奉行所

十三日、乙卯北朝和歌御會、

〔新拾遺和歌集〕

秋歌上

康安二年九月十三夜、うへのをれことも、題をさ

くりて、歌つううまつりし時、月前雲と云ことを、

民部卿爲明(御子左)

をのつうらたゝよふ雲もまむ月の光も消へてゐるゝ空哉

十五日、丁巳北朝、東寺二、寶莊嚴院敷地ヲ管領セシム、

〔東寺百合文書〕

○ヶ山四十三之四十七

寶莊嚴院敷地、可令管領給者、天氣如此、仍執達如件、

康安二年九月十五日

左少辨判

謹上 治部卿法印御房

十六日、戊午月食、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月十三日 十五日 十六日

〔愚管記〕 八 九月十六日、戊午、晴、月蝕正現云々、

〔本朝統曆〕 十 九十六望、三月蝕七分弱、申七、酉七、

斯波氏經、阿蘇惟村ノ戰功ヲ褒ス、

〔阿蘇文書〕 四 室町家執事書狀

矢部友知、大野鞍岡者、共爲御方、致忠節候之條、感悅無極候、就中國人等同參御方之條、日出候、重被差遣軍勢候、當國他國御軍忠尤異他候哉、難比類自餘人々候、尙々悦喜無極候、彌可被廻御籌策候、恐々謹言、

(康安二) 九月十六日

(康安二) 氏經花押

○武光、豐後府中ニ入ルヲ以テ、氏經、惟村ノ援ヲ求ムルコト、本月九日ノ條ニ見ユ、

二十日、戌、壬北朝、天台座主承胤法親王ノ職ヲ罷メ、尋テ、恆鎮法親王ヲ之ニ補ス、

〔華頂要略〕 天台座主記五 第三百三十六二品承胤親王 梨本 貞治元年九月廿日辭、不被遂拜堂

第三百三十七無品恆鎮親王、梨本、龜山院御猶子、常盤井中務卿恆明親王男、承

鎮親王弟子 貞治元年九月廿一日補任、

〔法中補任〕 天台座主次第

恆鎮親王 梶井王恒明親王 康安二年月日任、

〔愚管記〕 八 九月廿三日、乙丑、晴、傳聞、今夜右府先著陣、次條事定、次改元定云々、(恒鎮力) 仗議以前、以承珍法親王爲天台座主、宣下云々、上卿可尋記、(全通)

〔貞治改元定記〕 官記治條 康安二年九月廿三日、乙丑、晴、改元定也、○中略、改元

日ノ條ニ收ム、及子刻先有座主宣下、以二品承胤親王御辭退、上卿坊城中納言俊冬卿、參著仗座、奧、職事右中辨、行知進、與座、仰之、次上卿移端座、召官人令置軾、次召大內記秀長、依是來著床子、仰宣命草事、次少內記康隆持參草、入蓋、上卿披覽起座、於弓場地、從之、以職事奏聞之、被返下也、則取替清書又奏聞、無程返上、次上卿復仗座、命退畢、召少納言秀長下給宣命、召內記令撤筥蓋、其後上卿起座被退去了、改元同日座主宣下、正元々年例也、

〔迎陽記〕 三 九月廿三日、乙丑、天晴、今日改元定也、○中略、改元ノコトニカ、

天合、先有座主宣下事、梶井新宮無品恒、上卿坊城中納言、奉行職事、行知、仰宣下事於上卿退、後上卿移端座、以官人召內記、予進軾、仰詞、以無品恆鎮法親王、爲

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十日

四二七

上卿

改元同日
座主宣下
正元例
年ノ例

天台座主宣命令草進^三予退以少內記中原康隆進宣命草^{紙屋番書也無品}入上卿披見返賜康隆々々持筥立小庭上卿進弓場奏聞職事行知內覽申免云々於弓場取替清書又奏聞被返下上卿歸著陣康隆置宣命於上卿前退上卿召少納言予進軾賜宣命取副笏退次召內記康隆參軾空筥退上卿召官人令撤軾退抑改元日座主宣下例凡^通遯后儀也正嘉三年三月廿六日改正元時先有座主宣下^{尊助法}此例御代佳例之間被宣下云々

〔祇園執行日記拔萃〕第百卅九恒鎮法親王 梨本恒明親王御子梨本承胤

親王御弟子貞治元年九月廿三日宣下御拜堂^{貞治}

祇園別當檀那院內大臣法印承忠目代西勝坊教慶律師次目代杉生坊郷

坊暹惠貞治二六十八 先目代教慶律師當年祇園馬上屋^{一字}蟲損捕狼藉罪

科武家申入座主間改補仍貞治二年六月十八日補任次目代西勝坊教慶

律師山門執申武家之間同七月二日還補次日代西勝坊御坊憲慶^{暹惠}貞

治三年四月二日教慶律師死去間相續補任執行靜晴法印

二十一日^癸是ヨリ先妙心寺石清水八幡宮神人等ノ同寺内小田ヲ濫妨

スルヲ停メラレンコトヲ北朝ニ訴フ是日北朝石清水八幡宮ヲシテ

濫妨ヲ停メ之ヲ妙心寺ニ安堵セシム

〔妙心寺文書〕〇山城

〔編者〕妙心寺小田事書案 康安二九十八

妙心寺々々内小田稱八幡神人立點札致違亂間事

右當寺者爲花園院勅願寺異于他之地也爰於小田者雖爲立錐寺家所致管

領也而八幡社司中近邊依有自專之所令混亂于彼地歟之間無左右稱神人

今月十一日引卒數十人亂入寺内立置點札於彼小田剩對僧體致過言狼藉

之條先代未聞之珍事也縱有所存者尤致上訴可爲穩便之沙汰歟之處忽令

亂入嚴重勅願寺及狼藉之條爲向後爭無嚴密之御沙汰哉且又神人不入仁

和寺中之條往古規式也仍被相尋子細於社務之處更以不存知之云々所詮

急速被經御奏聞令伏彼狼藉以下之樣欲被成勅裁矣

〔編者〕兩度奏聞狀

當寺管領小田稱八幡神人致違亂間事々書如此候細碎之地雖非無其憚候相當住持閣之條無興隆候歟之旨申入候急速計申御沙汰候哉恐惶謹言

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

神人等數十人ヲ引率シテ寺内ニ亂入シ點札ヲ立ツ

神人仁和寺ニ入ラザルハ往古ヨリノ規式

再度ノ申文

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

四三〇

九月十八日

頭辨殿

寺内小田事、可被停止濫妨之旨、已被仰社家之上者、故被成下安堵勅裁可全當知行候、能樣計申御沙汰候哉、恐惶謹言、

九月廿一日

頭辨殿

繪旨

〔繪旨〕 妙心寺々内小田安堵事 康安二九廿一

妙心寺々内田地、八幡神人違亂事、奏聞之處、可止其妨之由、被仰社家候、可令存知給之旨、天氣所候也、仍執達如件、

九月廿一日

右大辨資定

〔宗廟〕 授翁上人禪室

〔繪旨〕 妙心寺二九廿一 小田稱八幡社司違亂停止事

妙心寺申、寺内田地、號當宮神人、致違亂云々、事實者不可然也、早可止其妨之由、嚴密可被下知之旨、天氣所候也、仍執達如件、

九月廿一日

右大辨資定

八幡檢校法印御房

菊池武光、豊後萬壽寺城下ヲ去ラントス、斯波氏經、志賀氏房等ヲシテ、其通路ヲ塞ガシム、是日、武光、斯波氏經、少貳冬資等ト、筑前長者原ニ戦ヒ、之ヲ破ル、

〔佐賀文書纂〕

〔深江文書〕

安富民部大夫泰重申軍忠事

右去九月十四日、豊後國萬壽寺御立之間、御共仕、所々致宿直候畢、同廿一日、

御敵京都大將并冬資以下凶徒、依打出於長者原、御合戦之間、致種々軍忠、分

捕之條、預御檢知畢、次松浦御敵蜂起之由、在園司筑前守令申之間、同廿五日

福井罷下、致合力之處、御敵退散之由、依風聞令參上之處、御敵又鏡濱崎打寄

之由、其間候之間、十月五日、重福井罷下、在園司令同心、於一貴寺高嶽、對于御

敵抽忠勤者也、將又冬資、宗像大宮司以下凶徒、依打出、香椎大隅御出之間、十

安富泰重
軍忠狀

長者原ノ
合戦

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

四三一

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

四三二

一月三日馳上、令御供者也、同廿一日、薙打御發向之間、御共仕、同廿四日迄于歸津之期、御共之上者、下賜證判、可備將來龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

正平十七年十一月廿五日

承了(菊池彦光)花押

〔松浦文書〕七

長者原合戰之時、致忠節之條、尤神妙、彌可抽戰功也、仍執達如件、

正平十七年十月廿六日

右中將

函

松浦鮎河六郎次郎殿

〔志賀文書〕三

肥後

志賀藏人賴房當病之間、雖不叶起居、自去年八月參住高崎城、私候大將御陣、致日夜警固之上、差遣子息彌太郎氏房於豐後國大野庄鳥屋城、打塞凶徒武光本國之通路、致不退合戰之間、連々軍忠雖不違注進(カ、ル、全、文、ハ、八、月、七、日、ノ、條、早、預、御、證、判、爲、備、後、規、言、上、如、件、)、

貞治二年卯月 日

志賀賴房
軍忠狀
鳥屋城

承了(大友氏)刑部大輔花押

〔志賀文書〕十

肥後

賀村内近地名地頭職事、玄心重代相傳所領也、但子息藏人二郎於鳥屋城令打死之間、息女愛鶴女嫡子依爲孫子鬼二郎九(仁、)相副次第證文、限永代所讓與也、於御公事以下者、守惣領宛配之旨、可勤仕也、仍讓狀如件、

應安三年 庚戌七月廿五日

沙彌玄心花押

このゆつり狀一見了、沙彌花押

〔太平記〕三十八

前

菊池少貳大友軍事

左京大夫(三田家)西源院前田家本探題已ニ大友(西源院本、カ館ニ著ヌト聞ヘケレハ、)菊池肥後守武光敵ニ勢ノ著ヌ先ニ打散セトテ、菊池彦次郎(太平記ニ、金勝院本、作彦三郎、下倣之、按彦次郎名武義、城越前守、宇都宮、岩野、鹿子木トアリ、西源院前田家本、舍弟、彦次郎ニ作ル、)民部大輔(院本、考太名、眞員トアリ、金勝院本、考太名、眞員トアリ、)テ、(参考、太平記ニ、五千トアリ、)探題左京大夫(夫上、毛利家、北條家、西源院、南都、本、載、攻、爲、ニ、九月、二十三日、家本、考、太平記ニ、毛、利、豊、後、國、ヘ、發、向、ス、)

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

四三三

志賀二郎
鳥屋城
戦ニ討死

武光菊池
彦次郎等
ナシテ
後ニ發向
セシム

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

四三四

氏經路次
ニ迎ヘ撃
タシトシ
テ少松浦
像松浦等
遺ノ諸黨
ヲ

菊池彦次
郎傷ク

少貳筑後
二郎同新
左衛門尉
戰死ス

武光新
手ノ兵ヲ
キテ豐後
府ニ向フ

氏經ト大
友氏トハ
高崎城ニ
少貳頼尙
ハ岡城ニ
宗像大宮
司ハ宗像
城ニ據ル

氏經ノ九
州著

探題左京大夫是ヲ聞テ、抑我九州靜謐ノ爲ニ下サレタル者カ、敵ノ城ヘ寄
スシテ、却テ敵ニ寄ラレタリト京都ヘ聞ヘンスル事、先武略ノ足サルニ相
似タリ、サレハ敵ヲ城ニテ相待マテモ有マシ、路次ニ馳向テ戰ヘトテ、探題
ノ子息松王丸○參考太平記ニ、天正本、イマタ幼稚ニテ、今年十一歳ニ成ケ
ルヲ大將ニテ、太宰少貳、舍弟筑後二郎、天正本、作三郎トアリ、金勝院、同新左衛門
尉、竝○參考太平記ニ、按第三十三卷、菊池合戰、段、諸本、宗像大宮司、松浦一黨、都
合其勢七千餘騎ニテ、筑前國院○參考太平記ニ、西源、長者原ト云所ニ馳向テ、
路ヲ遮テソ待懸タル、同二十七日ニ、菊池彦二郎五千餘騎ヲ二手ニ作り、長
者原ヘ推寄テ戰ケルニ、岩野、鹿子木將監、○參考太平記ニ、南都、下田帶刀已
下、宗徒ノ勇士三百餘騎討レテ、其日ノ大將菊池彦二郎、三所マテ創ヲ被リ
ケレハ、宮方ノ軍勢已ニ二十餘町引退、○參考太平記ニ、二十、天正本、作三十、
非也、トスハヤ打負ヌト見ヘケル處ニ、城越前守五百餘騎入代テ戰ケルニ、
少貳筑後二郎、○參考太平記ニ、金勝院、天正本、此、同新左衛門尉二人、共ニ一
所ニテ討レヌ、○參考太平記ニ、少貳家譜云、對馬次郎頼資、對馬與、其外松浦、
宗像大宮司カ一族若黨四百餘人討レニケレハ、○參考太平記ニ、四百、今探

題少貳大友二度目ノ軍ニ打負テ、皆散々ニ成ニケリ、菊池已ニ手合ノ軍ニ
打勝シカハ、探題ノ勇威モ恐ル、ニ足スト侮テ、菊池肥後守武光、新手ノ兵
三千餘騎ヲ率シテ、舍弟彦次郎カ勢ニ馳加テ、豊後府ヘ發向ス、是迄モ猶探
題少貳大友、松浦、宗像カ勢ハ、七千餘騎有ケルカ、菊池ニ氣ヲ吞レテ、懸合ノ
合戰叶フマシトヤ思ヒケン、探題ト大友トハ、豊後高崎城ニ引籠リ、太宰少
貳ハ岡城ニ楯籠リ、大宮司ハ宗像城ニ籠リテ、嶮岨ヲ命ニ憑ケレハ、菊池豊
後ノ府ニ陣ヲ取、三方ノ敵ヲ物トモセス、三ノ城ノ中ヲ推隔テ、今年ハ已ニ
三年迄、遠攻ニコソシタリケレ、抑少貳大友ハ大勢ニテ城ニ籠リ、菊池ハ小
勢ニテ是ヲ圍ム、菊池カ兵必シモ皆剛ナルヘカラス、少貳大友カ勢必シモ
皆臆病ナルヘキニアラス、只士卒ノ剛臆ハ、○西源院本、進、大將ノ心ニヨル
故ニ、九國ハ加様ニ成ケルナリ、

〔參考〕

〔北肥戰誌〕

三 探題氏經下向付長者原軍之事

少貳大友、度々菊池ニ打負テ、宮方鎮西ヘ蔓ル由、京都ヘ聞ヘ、將軍義詮公ヨ
リ、足利修理大夫高經ノ次男斯波左京大夫氏經ヲ、九州ノ探題ニ成シテ被

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十一日

四三五

氏經大宰府ヲ攻メ
筑前ニ發
向ス

差下、貞治元年壬寅九月、豐後國鶴崎津へ著船アル折節、菊池ハ此比少貳頼
尙カ豊後へ落去テ、大友ト一所ニ居タルヲ退治スヘシト、豐州ニ打入り、万
壽寺ニ陣シテ在ケルカ、探題ノ下向ヲ聞、大宰府ノ宮ノ御座所心元ナシト
テ、探題未タ著船ナキ前、九月十四日、万壽寺ノ陣ヲ拂フテ、筑前へ赴キヌ、斯
テ氏經鶴崎へ著船ノ由、少貳大友聞付テ、大ニ悦ヒ、急キ出向テ面謁シケリ、
兩人トモニ其比入道シテ、少貳ハ梅溪ト號シ、大友ハ天祐ト稱ス、氏經下向
ノ勢ヒニ乘シ、宮方ノ城ヲ攻落ス事六箇所也、扱氏經軍兵ヲ卒シ、宮ノ御所
大宰府へ押寄セラル、少貳入道梅溪、同子息源孫次郎冬資、大友孫太郎氏繼
以下、探題ニ相屬シ、山鹿、麻生、松浦等、宗像大宮司、爰カシコヨリ馳集テ、其勢
都合一万八千餘騎、筑前國へ打入テ、大日嶽今出上原、三井野等ノ所々ニ陣
ヲトル、大友入道天祐モ、探題ノ子息松王丸ヲ介錯シ、次男式部大輔親世、戶
次右京進頼達等、其勢三千餘騎ニテ、筑後國迄出張シ、敵ノ通路ヲ相遮ル、斯
テ菊池ハ、探題以下大勢攻來ル由ヲ聞、サラハ中途へ出向テ可戰ト、宮ノ御
供申シテ、大宰府ヲ打出ル、供奉ノ雲客ニハ、竹林院中納言、中院中將武家ニ
ハ、田中彈正少弼、岩松相模守、宇都宮三河守、名和伯耆判官、兒島備後入道、原

菊池ノ先
驅敗ス

田、秋月、千葉、大村、高木、後藤、有馬、安富、其外近國ノ宮方相集テ、都合六万餘騎
也、菊池ハ先陣ニテ、同名豐前守、城越前守以下、松浦ノ波多、福井合テ一万四
千餘騎、九月廿一日、或ハ九月廿七日、長者原へ陣ヲ取ル、探題左京大夫氏經
モ、大宰源孫次郎冬資、宗像大宮司、松浦黨ノ者トモヲ先陣トシテ、長者原へ
打出タリ、中ニモ冬資、氏直、松浦黨等、進テ一戰ヲ相始ム、菊池カ前驅豐前守
武勝、秋月、原田、波多、福井、鹿子木、打負テ引退ク、二陣ノ肥後守武光、大ニ腹ヲ
立、云、甲斐ナキ先陣哉、イテサラハ某代ント、城越前守、八代左衛門佐ヲ左右
トシ、其勢二千五百餘騎、一度ニ切掛リ、入亂テ相戰フ、肥前國高來一揆、武光
ニ屬シテ戰功ヲ抽テ、安富民部大輔泰重分捕ス、探題ノ方ニハ、舍弟尾張六
良氏重ヲ初、藤田六良、長野掃部允、新開荒五郎、山鹿麻生、松浦黨、少貳ノ一族、
命ヲ際ニ戰ヒシカ、武藤對馬與次郎資俊、同對馬孫次郎、同筑後次郎以下二
百餘人討レテ、合戰終ニ利ヲ失ヒ、探題氏經、大友、少貳、立足モナク敗軍シテ、
豐後國へ引退ク、筑後へ陣シタル松王丸、大友入道モ同陣ヲ引ケリ、斯テ菊
池ハ軍ニ打勝テ、大日嶽ニ陣ヲトリ、宮ノ仰ヲ承テ、九國二島ノ兵ヲ召シ、豐
後へ發向シテ、探題并大友、少貳ヲ誅伐セント議ス、斯ル處ニ、上松浦ノ敵蜂

氏經等豐
後ニ退ク
武光等豐
後ニ發向
スセント議

松浦黨ノ蜂起

一貴寺高嶽ニ戰フ武光香椎大隈ニ向

武光豊後ニ入ル肥後ノ一族豊後ニ入ル

起スル由、在國司筑前守カ方ヨリ觸廻スニ依テ、肥前國宮方トモ、同月廿五日、國司ノ在ツル上松浦福井へ駈向ヒ、合カスルノ處、彼逆徒退散ノ由、風聞シケレハ、皆菊池カ陣へ相集ル、然ルニ又松浦ノ者トモ蜂起シテ、鏡濱崎へ打寄ノ由、相聞ユルニ依テ、十月五日、諸勢重テ福井へ發向シ、在國司ト令同心、一貴寺高嶽ニ於テ相戰ヒ、敵ヲ追拂フ、其後大宰孫次良冬資、宗像大宮司以下ノ殘黨打出ルニ依テ、十一月三日、菊池自ラ香椎大隈へ馳向ヒ、同廿一日、菟打へ發向シテ、逆徒ヲ悉ク追拂ヒヌ、斯テ菊池ハ筑前ノ敵ヲ打治メテ、探題退治トシ、同月廿四日、五万五千餘騎ヲ卒シ、筑前國ヲ立テ、上筑後生葉ヲ過キ、豊後へ打入り、先ツ玖珠城へ入テ、同名豊前守、城越前守、赤星遠江守、八代左衛門佐ヲ府内へ差向ル、又肥後へ在ツル一族菊池對馬入道義順モ、武光ニカヲ合セント、島津、伊東、左森、大嶽、山形、牛糞、土持以下一万三千人ヲ相催シ、日州梓越ヲ歷テ、是モ豊後へ亂入、斯リシ程ニ、探題氏經、大友、少貳、一戰ニモ不及、府内ヲ落テ、探題ト大友父子ハ高崎ノ城へ取籠リ、少貳入道ハ、松岡ノ城へ入り、其餘ノ者トモハ、悉ク臼杵ノ城へ北籠リケリ、菊池此ノ三ツノ城ヲ攻テ、今年ハ爰ニ歲ヲ越ヘヌ、

長者ヶ原

〔筑前國續風土記〕

表 糟屋郡 二十五

長者ヶ原

下中原村の境内ニ有、長者ヶ原

の内長者の鞍懸松とて、九圍計ある大木有し、延寶の末倒れて、今もあし、其上、小高き所有、此邊の圃の字を御所の陣と云、貞治元年九月廿三日、探題斯波左京大夫子、松王丸とて、十一歳ニ成リたるを大將として、太宰少貳舍弟筑後二郎、同新左衛門、宗像大宮司、松浦一黨都合七千餘人まで、此所ニ馳向ヒ、道ヲ遮テ、菊池ヲ寄來るを待兼ふリ、同廿七日、菊池彦次郎五千餘人を二手とし、此長者原ニ押寄テ戰スル、菊池方岩野鹿子木將監、下田帶刀以下、宗徒の勇士三百餘人討取セ、彦次郎も三所迄疵を蒙つテ、宮方の軍勢已ニ二十餘町引退ク、すこや打負ぬと見ヘリ、所、城越前守五百餘人を同^具年して入替テ戰タル、少貳筑後次郎、同新左衛門尉二人共ニ一所ニ討^具をぬ、其外松浦宗像大宮司一族若黨四百餘人討せて、少貳二度めの軍ニ打負ぬ、皆散々ニ成リ、此時松王丸陣を所、御所の陣と云也、又長者ヶ原の邊古城墳多し、皆石棺にて石を蓋ヨセリ、

〔筑前國續風土記拾遺〕

表 糟屋郡

長者原古戰場

原町村の境内東方にあり、

道路の南方に小高き所有、御所陣といふ、本編に、探題斯波左京大夫子松

御所陣

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十二日 二十三日

四四〇

王丸ヲ陣せし所のよし見へされと、是を征西將軍宮の御陣所ありし故よ、御所とちいふあるへし、略中菊池の陣を、太宰府よりし故西よ在、探題は軍の、大日岳金井手等の所に在く東方也、御所陣の廣原の中西方にあを、宮の御陣所は址をねへし、矧や又御所の號あるをや、

二十二日、甲子北軍、京都ヲ發シテ、攝津ニ向フ、義詮、出デ、東寺ニ陣ス、

〔愚管記〕八 九月廿二日、甲子、晴、今日官軍發向攝州、武將進發東寺云々、

〔師守記〕〇二十八 帝國圖書館本 十月一日、癸酉、天晴、〇中今日宣旨到來、源義種

任民部少輔輔事也、

時光卿則被出請文了、件義種、利足修理大夫入道、子也發向攝州大將云々、

〇南軍、北黨攝津守護代箕浦定俊等ヲ、神崎ニ擊チテ之ヲ走ラスコト、去月十七日ノ條ニ、義詮等、東寺ヨリ京都ニ還ルコト、十月二日ノ條ニ見ユ、

二十三日、乙丑北朝、貞治ト改元ス、

〔愚管記〕八月十五日、戊子、陰、申剋降雨、〇中今日改元勘者宣下云々、右府奉

斯波義種

改元勘者宣下

改元定延引

道嗣參仕

道嗣ニ勅書ヲ賜フ

勅

權中納言時光卿

左大辨忠光卿

正三位有範卿

勘解由長官高嗣卿

大藏卿長綱卿

從四位上時親朝臣

文章博士氏種朝臣等云々、

廿五日、戊戌、陰、入夜雨降、今日改元定延引、

九月廿三日、乙丑、晴、今夜改元定也、公卿右大臣、按察大納言、實繼坊城中納言、俊冬藤中納言、時光右兵衛督、隆家新宰相、保光左大辨宰相、忠光等參入云々、

年號被用貞治了、今夜不出仕、

〔伏見宮御記錄〕

利六十三 改元記

永和一品記于時參議

康和二年九月廿三日、乙丑、晴、今日改元定也、進勘文之人待別勅參陣代々、固實也、仍此子細兼日示付奉行藏人左少辨嗣房之處、爲別勅可存知之由送書狀者也、〇中略北朝、右大臣、鷹司冬通、上次予起座參御所、右府無御對面、歟、忠光候御湯殿末之處、有出御、元號事、更不被思召寄、一向可被群議之由有、勅定、執柄晝間兩三度被遣勅書之處、他行云々、適尋合被申御返事、今夜改元、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四四一

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

職事無申旨之間(依脫カ)不存知他行云々此條被咎職事無沙汰也謂歟於內覽者勘
 文不整之間非怠歟雖無申旨是程大儀爭不被存知哉不得御意之趣同有勅
 語頗背叡慮歟可恐此間諸卿(多通)右大臣按察大納言實繼坊城中納言俊冬藤著
 陣次上卿召外記師茂朝臣參軾被問上達部參否次以官人被召文書官人尋
 取前駟持參之懸弓括進上之上卿不被見被傳按察大納言々々々氣色位次
 之後取文見了如常次第見下見文之作法大略同前藤中納言見了傳右兵衛
 督參議座又次第見下至忠光前忠光置笏於右膝下(座下)取文置前刷衣袂先
 解紙捻以兩指展之次披懸昏如常押文於右方次取一通(數通之時)繆持續文
 見國解更見端續文(見合之)見了押當繆持文於胸左方卷之置懸左方三通如
 此見了乍著板半許卷之持上卷了如本結之(片鑑真結猶可)置前取笏候可讀
 上之由有上宣忠光微唯置笏披見之儀如先但不渡文於右並置懸昏中央頗
 披見之立國次第(先出羽次淡路次筑後)并置之次取笏候氣色先之今夜雖有三ヶ國出
 羽一國可令申又定文後日可書上之由有上宣次取出羽國解讀之續文不讀
 右手ニ繆持讀申之(自出羽守從五位下平朝臣清衡誠惶誠恐謹言至年號月
 右狀今夜依無上宣不略之參議伺)次國解與聊卷之次卷續文國解端ハ卷合
 申略之家記有先例就而不申之

置懸昏上爲定文無煩之料也云々は家說也續文爲下國解爲上乍繆置之尋
 常之說歟次取笏候無上宣之間忠光申云可定申歟上卿氣色忠光逃足申云
 出羽守清衡申ス雜事三ヶ條ノ事各叶續文被裁許何事候哉(其國ノ司申ス
 此可申也予去年定申之時如此而今夜思直了但爲兩說之申了直足上者不可爲違失候)自下薦次第定申條取出羽ノ國
 ノ司ノ申請ル(由脫カ)雜事三ヶ條事左大辨藤原朝臣定申ニ同ス云々人々定詞大
 略如此次可書定歟之由忠光申之上(依無)大臣氣色者以官人召六位史々秀職
 來忠光後方仰曰硯史退出先之按察卿曰召史事硯料歟後日可書上之由有
 上宣云々
 忠光申云後日雖書上於陣爭無右筆之儀哉端作許書上爲先例上卿同被仰
 此由歟次史持參硯置參議座上忠光咳嗽聲者史持來置忠光座前次忠光置笏
 引寄硯先納水次摩墨(三度)試筆二管(後試筆下方不掛筆)次取出續昏卷取懸
 昏押帖之納硯下方此等次第同小除目右筆仍委不注次向座下繆持續昏卷返
 之取副笏候氣色(去年置續昏於硯篋候氣色了然而上卿令目給次忠光取續
 家光卿取爲如此之間以此說爲善)昏染筆書定文出羽守平朝臣清衡申請雜事三ヶ條トマテ書之次置定文於
 前可讀申歟之由伺上卿々々目許者置笏取定文如形讀申之(此事去年不
 後日可書上之)

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四四五

改元定
年號勘文
下大臣

勘文七通

猶上者不可必然之由先々習沙汰歟然則家光卿記云讀申定文事如形雖書始
 申之作法申歟陣定之習書了必讀之例也雖不書了於右筆之作法者爭無讀
 所遂御所爲也但何上宣乎次置定文於座前橫次文書解如本卷合也定文等
 插懷中訖賜共者此人此次文書申請定文持參之次可返進之由可申上卿之由
 有一說然而後日可書之由上宣之上者文書當座不可返進之條勿論歟以不
 伺爲善次直筆聊押出以官人召史令撤硯次改元定也頗經程之間條事定畢
 之由以官人忠光告奉行職事此間藏人左少辨於陣下年號勘文懸紙結申於
 大臣々々披懸紙取一通被結申如先仰々詞三通仰畢退入此作任事也但後
 日引勘之處元亨四年改元定彼祖父季房卿右少辨人上卿結申一通仰上卿
 々詞悉見畢退頗遲意歟云々三通仰々詞之由無所見追彼所意歟上卿
 見畢如元結之假結置前取笏氣色按察大納言氣色位次置笏頗及手取之上
 卿又被押遣次展懸紙悉見訖七通也已及天明都護卿尤同上宣可用此儀之
 彌移刻畢如本結之取笏氣色坊城中納言次第見下如條事定新宰相見畢
 取笏氣色忠光置笏於座下取勘文置前刷衣袖以兩手展結緒次披懸紙取勘
 文聊珍重歟心有披見之而依意巧不賴資卿所爲如此然立次第置紙中央先文
 士次位先可讀勘文ヲ置右也可置直左也次大辨參議爲寂末之時不披見可並
 置次第歟並祖兼光卿記云先解結緒展之其上披懸紙中央程次取笏候氣

勘文讀申
次第

勘申ヨリ
位署名ニ
迄切音ニ
引文ノ名
ハ吳音全
文ハ漢音

色大臣可讀申之由被示忠光申云任位次可讀申歟先可讀申博士勘文歟上
 宣自文章博士可讀申次又申云忠光勘文猶可讀申歟將又他人可讀候歟先
 例不同歟此申詞元仁度賴資卿所爲如此壽永兼光卿不及何申右大辨勘文
 我卿被成敗無上宣者參議可何申也長承元年大帥入道實光卿進勘文則讀申
 仁治元年信盛卿雖何之猶可讀申之由有上宣嘉禎元爲長卿者上宣日只讀申
 七次置笏先取文章博士氏種朝臣勘文讀申之額上方冠先之天曙畢爲掌燈
 者透火可讀也當式低面讀之自勘申至位署名字不漏一字切音ニ讀之右字元
 後卿依通具卿諷諫於當讀之此已讀樣見與年號相計或漢或對馬相交相交可隨
 事跡也引文名吳音其文一向漢音也公卿不讀二字四品以下讀之博士勘文
 讀之卷畢置懸紙左方次取藤中納言勘文讀之藤原朝臣下次取自勘文讀之
 カリ姓不讀忠光下ハ自勘文不守位次寂末讀之他家如此歟而經光卿守本座
 讀之前中納言兼綱卿延文度所爲又如此仍所追近例也歟先可讀申博士勘
 申之條宜也若猶以早下之儀亂位次按結句可讀也至我勘文之時可何申歟
 自餘勘文等次第讀了如元卷整結之直居置前取笏候上宣令定申次忠光
 正笏逃足定申云權中納言藤原朝臣式部大輔藤原朝臣勘解由長官菅原朝

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四四五

臣、大藏卿菅原朝臣、刑部卿時親朝臣、文章博士氏種朝臣等勘申、年號可被用
 何字哉事、勘解由長官菅原朝臣、勘申寬安、殊難不候、此申詞家例如此、委細載略之、定例也、予今度所存載勘申之由、欲申之處、自勘文事不取條之間、頗背道
理歟、元仁賴資卿爲參議、大辨定申云、年號可被用、何字哉事、云々、是勘文、人、數濟々間相計也、云々、准此例、取條者、所存載勘文之由、令申之條、不可有難、然而大辨參議尤可存嚴重、當家哉、之、申、連、勘、者、名、字、雖、非、嚴、重、而、如、此、仍、存、此、儀、兼
光卿資實卿第二度參仗之時、所存載勘文、模、此、例、所、存、載、勘、文、了、其、外、資、宣、卿、初
度參仗之時、勘文之外、其字、云々、忠、光、今、度、模、此、例、所、存、載、勘、文、了、其、外、資、宣、卿、初
殊難之由、欲申之處、取難、不、案、得、之、間、存、略、了、似、無、念、於、彼、例、者、爲、納、言、已、後
之間、被取條事、省略、不足、准、據、初、度、之、間、舉、申、一、字、第、二、度、或、加、勘、文、或、納、言、已、後
卿舉申二字、依彼例、今度、不可、舉、申、二、字、歟、而、全、分、無、也、次、新、宰、相、逃、足、申、云、年、號、可
其字之間、申一字、如此事、不可、守、株、可、依、時、之、故、也、
 被用何字哉事、左大辨藤原朝臣、勘申貞治無殊難候云々、次右兵衛督逃足、（忠光）
 申云、年號字可被用哉事、左大辨藤原朝臣、勘申貞治何事候哉云々、次藤中納
 言定申云、年號可被用何字哉事、所存載勘文、其外左大辨藤原朝臣、勘申嘉觀、
 大藏卿菅原朝臣、勘申建正可宜哉云々、此申詞頗不審、所存載勘文之由、定申
申々字之條、違家例、似舉 次坊城中納言定申云、年號事、權中納言勘申應永、大藏
 卿菅原朝臣、勘申建正之間、可被計用云々、次按察大納言定申云、年號事、貞治、
 寬安間可被計用、次上卿被定申云、年號事、應永、貞治云々、次上卿以官人召職
 事、此間可取上文書之由、可被仰歟、而無其儀之間、所待申上宣也、次嗣房參進

字難

建正ニ就
キテ忠光
ノ意見

時光ノ意
見
俊冬ノ意

軾、今一度次第可申上之由、有上宣者、自下、第次第申之、今度不嗣房於軾自懷
 中取出折紙、合爪點、次爲奏聞參御所、可一同之由、定被仰歟、字難等、且可有沙
 汰之由、上卿被示諸卿之條、大略近代例也、而無其命、已次納言雖有不審之氣、
 非上宣之間、鉗口歟、暫經程之處、坊城中納言申其由、上卿被諾、頗雖出物似公
 平、然人々不敢申、忠光不審之間、字難等、且可申之由、有上宣歟之旨、尋按察卿
 之處、次第可申云々者、雖非指事、閉口無興之間、忠光申云、建正旁難被用歟、其
 故者、正字在下之條、於本朝無之、被用上之字、初用下、其例繁多、雖不及子細、異
 朝號、下正字、天正、永正、皆僞號也、頗可謂不快、建正則朱氏號也、本爲建貞、而憚
 宋諱、改正字云々、然而頗可謂不快歟、又建武在近、不庶幾、其上建立也、正有君
 釋、而立王之儀、可被憚歟、建元爲年號之濫觴、元字又有君訓、雖似准據、遠不可
 讓異域歟、尤可謂不快歟、藤中納言申云、用上字被置下事、近至延文、其例繁多、
 建字事、建武強不可謂不快、君訓事、不分明歟、云々、坊城中納言、正君訓事、禮部
 類ナント、サル釋モヤ候ラン、不分明歟、但雖舉申、強不可申、所存云々、其外詞
 等忘却、忠光又申云、正字雖君釋、立王之難、不可有憚之由、被申歟、將又君釋却
 不可有之由、被申歟者、兩黃門返答不分明、此間嗣房卿歸出仰云、一同可定申
云々、上卿不被留之間、可祇候歟之

由、職事遮而申之、許諾之後候、賦、爲開群議也。忠光又申云、毛詩曰、其儀不忒、正維四國、鳴鳩也、此四國正ハ差天子也、爭無君釋哉、右兵衛督申云、廣韻正ハ君也云々、有君訓之條勿論歟、坊城云、雖有君釋、押而君ト讀條不可然、上モカミナレハトテ君ト可讀哉、忠光云、此條何事哉、字韻字者、猶雖被棄置、五經文爭不被用哉、就之坊城猶雖設會釋、義理分明不心得、大略雌伏歟、按察卿云、不可限此字、一往難勢誠有其謂、コ、マテニテ可申他號事歟、次寬安事、按察卿申云、寬安上下字共多佳例、年號柄又神妙、而依爲似火難音、古來不被用、是堅固之俗難歟、建安涉嶮難音之由有難、其ハ上字同音也、下字音又相似之故歟、是ハ上字寬トハテタルヲ火ト讀成、下字安ヲ難ト讀テ、課此難之條太無謂、可被宥用歟云々、忠光所存又如此之間、有其謂之由、同號才學不過之故也、坊城藤黃門猶就俗難不庶幾由也、右兵衛督申云、應仁音依涉鬼訓不被用云々、次坊城申云、貞治四人被舉申歟、就人數多可被執申歟云々、按察云、強不可依人數多少、貞治無殊難、貞字至貞和無指失字也、下治寬治已後多佳例、但德治爲不快、然而仁治之後、隔寬元一號、後深草院代始被用寶治、非無准據、凡吉凶相交字、強不可舉惡隱善、被宥用有何事哉、之由存許也云々、誠有其謂、凡德治不吉可課德字歟、其故者上

寬安ニ就
キテ實繼
ノ意見

貞治ニ就
キテ實繼
ノ意見

德字本朝無之、異朝北齊安德王號、改隆化爲德昌云々、太以不吉、養和者養字在上初度也、然而下和字不憚、正和、貞和被用之、以上養字爲不快、壽永在上初度也、是又下永字非不吉、建永貞永貞、永康永被用之、以上壽字爲不快、如德治者、德字在初度也、可爲此字失、於治字者、更不被棄歟、此條猶及巨難者、雖爲勘進字、可述所存之處、強不爲再往之沙汰之間、不申出、貞治舉奏人々、何不申立此理哉、坊城云、貞治雖無殊難、引文意若可有沙汰歟云々、新宰相、貞治事無殊難字之間、可被用歟、之由舉申畢、但就引文有難之條、不覺悟、可被申子細候、藤中納言云、利武人之貞、外聞雖有憚、武家彌執天下、公家可衰微之文歟、不庶幾云々、

坊城同之、申所存之條、漏達有恐之間、雖閉口武人之文、尤不可然云々、忠光申云、勘進字雖不可加詞、引文之難出來、爲勘者祇候、爭不申披所存哉、此難頗無謂、其故者此文易巽卦初六爻辭也、巽ト云ハ、王者德巽順ニシテ、四海八埏、無不隨命令、故象曰、隨風巽也云々、而至初六者、初上無定位之故ニ、處合之初有未知合其恐、仍治之王者志有疑、如此時ハ、自以武人之德治之、然者注曰、成命齊邪莫善武人云々、是全非發士卒取干戈、帝王有武人之威ハ、不知不知シテ

貞ノ字ニ
就キテ忠
光ノ意見

俊冬ト忠
光トノ争
論

自隨王化也。凡堯時有四凶。湯武^モ起兵誅無道。如此之類繁多也。雖聖人之時。非可無叛之者。又不可棄兵器之條。勿論將又文武不兼備者。不可為聖人。武者王者一德也。更不可為各別。其上武字止戈也。以戰栗不可為武本意。今以霸道武字之意。及如此之難歟。謂卦者聖人德異順之卦也。謂爻ハ王者備武人德之意也。全不可有難。坊城申云。易如普通書不可意得。雖吉文依卜筮可為凶。々文^モ又可為吉。就文不可定善惡。又六爻各畧位之間。一卦意雖為吉。依爻可有凶。卦與爻各別也。巽卦雖為王者之德。至爻可為凶文者。爭被用哉云々。忠光又申云。此條不得其意。依卜筮吉凶^(悔方)晦吝之條。只今何事哉。六爻異德。不可依一卦之條。是又非易之本意歟。可謂乾卦自潛龍在下。至亢龍有悔。雖^(異方)略位別德。六爻共不離乾德。六十四卦皆可如此歟。知命書雖未窺見。粗了見之分也。坊城云。然者亢龍有悔。ト云文^ヲモ。吉文ニ取可被擇申歟云々。忠光云。此條何事哉。雖異位。各具一卦德事^ヲ會釋許也。巽初六如亢龍有悔者。誠可有此難。王者巽順之德。不可備之由被申之間。如此述所存也。坊城猶陸梁。以多言欲曲理歟。此上祕詞畢。按察云。此相論枝葉歟。只就武字々面被申難計歟。兩方義勢已聞畢。於今者不可及再往沙汰。武字廣^{シテ}兼備文德之由被申之上者。以其儀可被取置歟。

應永ニ就
キテ實繼
時光ノ意
見

云々。忠光又申云。文和引文者。文和于内。武信于外云々。此時強不被嫌武字歟。藤中納言云。其者文字在上。一向武字計引文被用之條。可有憚云々。是又何事哉。文字不在傍者。永被棄置武字之條。未得其意。然而不及重問答。仗座議奏。不可有其隱。近日事頗以無思慮。凡者敵國蜂起。武將發向之時節。被用此文之條。可謂相應歟。上古議奏皆以如此。而吹毛之難等出來。尤以難治。次應永事有沙汰。上卿聊有被申旨。分明不聞及。按察云。應永雖為堅固之俗難。近代公家武家者。洛陽^ヲ引ト號之。應者可也。永ハ引也。可引如何。頗如狂言。人々入與右兵衛督云。先々此難候歟。忠光云。隔二字之例未聞之。藤中納言云。有先例歟。忠光又云。若三字事歟。長元一度例也。長久在其元云々。非繼體之號。強不庶幾歟。如何。藤中納言又云。三字猶以被用之上者。隔二字之條。雖為初例。有何事哉云々。予問云。久應稱之。是何應哉。不見本書之間。不及思量者。藤中納言答云。依上下文。可了簡也云々。此條勿論。勘者不覺悟歟。頗可謂珍事。依非他人事。不及重問答。凡應字。應和村上聖代。雖不能左右。應德不快。此二字不可擇申之由。有論言云々。應保又。以有不快事等歟。應長一年號也。上應不珍重。其上引文之意。不分明。旁難被許容歟。此等子細。雖蓄心中。不及廣沙汰上。勘者在傍。依無其詮。猶豫畢。

嘉觀ニ就
キテ實繼
見光ノ意

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四五二

貞治下定
詔書ヲ作
ル仰詞

貞治大略
異議無シ

次嘉觀事、按察云、觀應近不吉號也、六借之樣、覺云々、藤中納言云、上下相違畢、尙可被憚者、應永ニ可有此難歟云々、按察云、雖爲兩字、觀應者就觀字有難、不可依上下、又云、長承則此引文同所之文也、然者非無先規、是又爲勘進（キ）字之間、聊述子細、進勘文之人參仗猶豫、爲避（避）如此之難義歟、應永上下文、勘者無覺悟之條、可謂太早、嘉觀家光卿初而勘進字也、任舊勘進計也、強無引汲之志、秦始皇博狼沙中爲盜被驚云々、先々每度有此難、今度無申出之人、先之以嗣房被奏字難之趣、又歸出、猶一同可定申之由仰之、此後殊無沙汰、貞治、寬安可執申歟之由有沙汰、建正事以前職事不奏云々、同可申歟云々、忠光申云、一兩字撰定可被申歟、其外字等於今者、不可及奏聞哉者、按察許諾、貞治不舉申之、人々大略無異儀之間、貞治一同、此外猶可被宥用者、寬安無殊難之由奏之、此條々上卿不被成敗、按察卿大略助成者也、此間忠光申云、此次勘文可被返進歟、按察云、其事云々、被留職事、忠光氣色、藤黃門置笏押遣之、此事頗遲々畢、雖無上宣、參議可申驚歟如何、上卿賜文書於嗣房、賜之退、參御所、聊經時刻歸出云、依天變地妖、兵革改元、改康安二年爲貞治元年、依永久之例、令作詔書（此詞改元字違先規、父祖所爲不如此、定爲失歟、次忠光揖起座退出、爲儒卿至詔書之期、尤可祇候也、然

事教ヲ仰フ
吉書

詔書

而依勞事早出畢、于時已一點也、後聞、上卿、召大內記秀長、仰詔書事後被退出、次按察大納言移端座行事、

詔書草清書奏聞之後、召中務大輔忠兼下給之、次仰赦事、大夫史量實參軾奉之、次下官藏人方吉書、其儀如何、官方右中辨行知、藏人方左少辨嗣房云々、

〔改元部類（自永仁至貞治）〕

永和一品御記（于時參議） ○中

詔、示變者天地之誠也、告妖者國家之兆也、仁以攘災、惠以降祉、朕謬以眇末之身、久備大中之尊、四海之波瀾不靜、萬機之諮詢易紊、雖慎丹心於一日、未悅黔首於群方、德之惟薄、最以爲憂、爰匪管逢玄蓋之降譴、頻又恐黃輿之驚聽、兵塵未散、叡襟旁勞、夕惕之至、時而不休、或依各徵（依力）以建元、或驚厄會（會力）以革故、是以皆克復禮與物更始之義也、其改康安二年爲貞治元年、大赦天下、今日味爽以前、大辟以下罪、無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、咸皆赦除、但犯八虐、故致謀斂、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又復天下今年半徭、老人及僧尼、年百歲以上、賜穀四斛、九十已上三斛、八十已上二斛、七十以上一斛、庶仰靈應於二儀、將却餘殃於萬里、普告中外、俾知朕意、主者施行、

康安二年九月廿三日 有御

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四五三

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

忠光ノ勘

年號事、今度勘者七人也、改建治爲
勘申年號事、弘安之時如此、其外無例、爲

嘉觀

大史記曰、從臣嘉觀、厚念休烈、

貞治用今度

周易曰、利武人之貞、志治也、

右依宣旨勘申如件、

造東大寺長官參議左大辨藤原朝臣忠光

時光ノ勘

建德

康曆曰、天子建德、固生、

長祥

修文殿御覽曰、調長祥和、天之喜風也、

應永

會要、久應稱之、永有天下、

權中納言藤原時光

有範ノ勘

勘申

大觀

年號事、此勘文書樣、尤不審、元亨正中兩度、父藤範、勘文、年號事、勘申、同行書之、又式部大輔許書之、不書位、已以相違了、

周易曰、大觀在上、注云、下賤而上貴也、

正義曰、大觀在上、謂大爲在下所觀、又云、觀者王者道德之美而可觀也、

萬寧

尙書曰、萬邦咸寧、注云、賢才在位、天下安矣、

永昌

晉書曰、卜年之基、惟永、卜世之祚、克昌、

右依宣旨勘申如件、

正三位行式部大輔藤原朝臣有範

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

高嗣ノ勘申

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

勘申

四五六

年號事

貞久

周易曰、利貞久於其道、

寬安

毛詩注疏曰、行寬仁安靜之政、以定天下、

養元

藝文類聚曰、機衡建子、萬物含滋、黃鐘育化、以養元基、長履景福、至于億年、

右依宣旨勘申如件、

康安二年九月日

從三位行勘解由長官菅原朝臣高嗣

勘申

年號事

慶長

毛詩注疏曰、文王功德深厚、故福慶延長、

長綱ノ勘申

恒久

周易曰、天地之道、恒久而不已也、

建正

周禮曰、乃施法于官府、而建其正、

延德

孟子曰、開延道德、

文弘

晉書曰、博我以文、弘我以道、

右依宣旨、勘申如件、

康安二年九月十八日

從三位行大藏卿菅原朝臣長綱

勘申

年號事

長仁

史記曰、春作夏長仁也、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四五七

時親ノ勘申

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

承寬

禮記正義曰、民皆承寬裕、無澆詭也、

仁養

漢書曰、仁以養之、義以行之、令事物各得其理、
右依宣旨、勘申如件、

康安二年九月日

從四位下行刑部卿菅原朝臣時親

勘申年號事

仁長

周易曰、君子體仁、足以長人、嘉會、足以合禮、

嘉慶

藝文類聚曰、海隅漸惠、朔南暨聲、有生之倫、咸被嘉慶、

文仁

毛詩注疏曰、有鳥曰鳳、膺文曰仁、自舞見則天下安寧、

文章博士藤原朝臣氏種

氏種ノ勘申

〔改元部類記〕

○岩崎文庫所藏

康安二年九月廿三日、乙丑、今夜改元定、改康安爲

貞治、

公時ノ書狀

公時朝臣狀
改元勘文進覽之候、人々舉奏之分ハ、右府貞治、實繼、寬安、坊城中納言、應永、藤中納言、嘉慶、右兵衛督、貞治、新宰相、保光、左大辨宰相、寬安、如此候ける由

承候、就易之義勢、坊城與左大辨聊確論事候けるかと奉及候、然而就群議、

貞治被用候、今度承久之例候云々、上卿早出之間、詔書以後者、按察奉行候

き、大内記秀長、中務輔忠兼候、大概分如此候、按察（佐力）其計會事等之間、未及記

置之由被申候、猶も御不審事候者、奉候て相尋可申候、他事期後信候、恐々

謹言、

十月十一日

公時○下略、時光以下ノ勘申

〔貞治改元定記〕

官記

康安二年九月廿三日、乙丑、晴、改元定也、依予著束帶、

丸輅帶、西終刻參陣、著床子座、頃之後四位大外記師茂朝臣加著之、六位一火扇、薦

外記康隆、右大史秀職等同參陣之辨侍友里内々參仕、職事藏人左少辨祇候、

公卿次第被參也、及子刻先有座主宣下、○中略、天台座主宣下ノコトニ此間

按察大納言實繼卿、被遂復任已後著陣、先於立部外、召陣官人、被問時、次著與

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四五九

實繼ノ復陣以後著

天變地妖
元依ル改
三ヶ事改
注進ス

御著陣儀

座之後、則移端座、召官人令置軾、次藏人右中辨行知就軾、下內藏寮請奏、上卿被返下同辨、々於床子時動著床子之、下予如例、結申懷中了、於申文者被略之、丑尅許、奉行職事、左少辨以秀職被尋之、依天變地妖以下兩事、改元者連綿勿論也、依三ヶ事被改元之例、御不審可被勘申云々、依永久以來五ヶ度例、令申之處、可注申之由、被仰之間、予於陣座披抄物、馳筆注進了、四品外記史同被尋之、正元以來五ヶ度正元、嘉曆、康永、貞和、康安、例注進之云々、於脇陣注之云々、寅終尅、上卿右大臣殿冬、通公、御參內、令經床子前給、此時藏人右中辨、管少納言秀長、兩人先是、四品外史、予等候床子、辨少納言如蹲居、外史予平伏也、右府於辨前有御小揖、直令著端座給、一上事、今夜關白殿下、以左大辨、召官人令置軾、先有御著陣儀、大臣之後、御著陣也、次左大辨宰相忠光卿參著仗座、須臾之後、來著床子座、右中辨、予動座如例、直右中辨行知、座頭、予、右大史高橋秀職覽申文於左大、辨、其次第如例、次大丞起座、右中辨、予、參著仗座、秀職、挿申文於杖進小庭、作法、如常、隨上卿御目參軾、奉覽申文、上卿御披覽之後、如元卷整被返下之、秀職結申、儀、如常、例、令讀申之、每度、高、大稱、唯、後取副杖退去訖、其後藏人治部少輔仲光參軾、奉下內藏寮請奏、上卿召右中辨被下之、辨於床子下、予如例結申了、此後右府有御堂上、

宜陽殿御
座等ノ儀
ヲ略ス

條事定

外史予於床子前蹲居也、今度宜陽殿御座并留御前、陽明門代等被略之、申文和泉加賀鈎匙文、右大史三善家連馬新也、任代々御例用意之、其後上卿右府、則令著仗座、直端、給公卿、按察大納言實繼卿、坊城中納言俊冬卿、藤中納言時光卿、勅授事已、被宣下云々、依帶劍也、右兵衛督隆家卿、參議、新、宰相保光卿、去九日任參議、十四日申拜賀、參向、左大辨宰相忠光卿等次第參著之、此時分、卯、先有條事定、上卿召官人、召大外記師茂朝臣、參軾、被問公卿參、否、仰詞、不分、皆參之由申之云々、官人召文書、出羽、淡路、筑後三ヶ國解、加繼文、有懸紙、其中ヲ片、益ニ被結也、官人自御共衛府長手傳取々、副弓持參、挿弓弭、指寄御前進之、上卿令拔取給、不及御一覽、則傳給、按察大納言、亞相披見之後、如元卷整、傳俊冬卿、々々披見、傳時光卿、次隆家卿、次保光卿、次忠光卿、次第傳見之、忠光卿依上宣可讀申之由、被仰歎、讀申國解、出羽一、其後自下薦、次第被定申之、大丞伺上卿御氣色、發言之後、至上卿次第被定申、出羽一、次大丞以官人召史、召御硯、秀職持參、置左大辨前、外記、硯申、職事、被借渡之、讀文、并墨、次大丞摺墨、披續紙書定文、端一、行許、由也、其後國解并定文等大丞被懷中了、時剋可遲引歎、後日被清書、可奏聞由、有上宣云々、次召史被撤御硯了、國解定文、後日御奏聞之例、雖爲勿論、曆應度、

改元定

難申ノ字

天變地妖
兵革改元
詔書ヲ作

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四六二

故殿初度令申行給之時、於當座有御奏聞、尤可被用彼例歟如何、
 次有改元定職事藏人左少辨嗣房就軾奉下年號勘文云々、紙中ヲ被結之、仰
 詞令定申與云々、上卿右府披見、令結申給之後、職事退去、上卿如元卷整、傳給
 實繼卿、次俊冬卿、次時光卿、次隆家卿、次保光卿、次忠光卿等各披覽、卷整被傳
 見之、其次第同前、其後大丞隨上宣讀申勘文、先翰林、次別勘文、時光卿則大丞
 發言、自下薦次第至上卿、被定申年號、各被定申、之字從左、次上卿召職事嗣房、諸卿申詞
 令奏聞給、嗣房則歸出、令一揆、可定申之由被仰之、此時分漢天既曙、令撤松明
 也、此後群卿重有議奏、各舉申之字、互加難、有問答歟、雖側耳、分明不聞、貞治
 引文、俊冬與忠光卿、數反問答、其後以貞治、寬安、建正、應永等、重有御奏聞、此時
 勘文等付職事、有御返上、諸卿議奏之間、職事候、無程又歸出、猶被於撰定一兩
 可被申云々、此後又議定、以貞治、寬安、上卿御奏聞、經數刻之後、被申合殿下云
 數々、其間經職事嗣房歸參仰之、其詞云、依天變地妖兵革改元、改康安二年、為貞
 治元年、任永久例、詔書令作云々、次上卿召大內記秀長、被仰詔書草事、同詞
 云々、之後、則御退出、是以前、公卿俊冬卿、時光卿、隆家卿、保光、忠光等卿、各起座退
 出也、按察大納言實繼卿一身被殘留之、右府御退出之後、亞相移著端座被行

上卿清書
ヲ召ス

敎事ヲ仰
セラル

官方吉書
御覽

藏人方吉
書

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

四六三

事、次少內記康隆持參詔書草、入管上卿一覽之後起座、於弓場代、康隆持管以
 職事奏聞、內覽御被返下之後、上卿復仗座、召清書、康隆則持參、黃紙、入上卿又
 起座、如元於弓場有奏聞、被返下之後、卿重被申了、復仗座、召中務輔忠兼、權
 輔、上卿亞相之前、下給下之歟、詔書了、詔書則外記次上卿召史被仰敎事、予
 正笏步進、經柱外參軾一揖、上卿被仰云、依天變地妖兵革、改康安二年、為貞治
 元年、任永久例、詔書施行以前、囚令厚免之由、傳仰云々、予奉之後、微音、聞ル稱
 唯右廻退去、不尋申辨也、是左少辨雖依存故實、不及尋申也、傳仰官人之由
 也、今日官人堀川判官親弘可參仕也、然而令選參者、只可為其由、後日、次左少
 辨、嗣房持參官方吉書、加賀國年新解文也、入管蓋被持參也、件吉書予出諸之、
 所付左、就軾被覽上卿云々、一見之後、辨返給退去、經內覽奏聞之後、可下上卿
 云々、左少辨則持參、殿下御里第有內覽、頭辨同車、藏人方吉、頃之後歸參、殿下
 出座、內々、直堂上奏聞、主上無出御、付內侍內々、次左少辨進軾、下官方吉書於
 被召云々、直堂上奏聞、奏聞云々、藏人方同前也、次左少辨進軾、下官方吉書於
 上卿、々々結申之、則被返下同辨了、於敷政門代、乍立傳子、々懷中笏、以左右手
 下給、披右結申、微唯取副笏之後、懷中如例、次頭右大辨資定朝臣就軾、下藏人
 方吉書、內藏寮請上卿右少辨被下之、辨如先於敷政門代傳子給、結申之儀如

奉行職事
内覽ナシ

例、其後上卿被起座、予同退出、于時已終剋也。
 今夜職事頭辨資定、藏人右中辨行知、藏人左少辨嗣房、奉藏人治部少輔仲光等參仕之、今夜關白殿下無御參内、仍吉書猶里第有内覽、於詔書者内覽申免云々、抑今日改元日次事、奉行職事遂不及内覽、仍無御存知之間、無御參内之由被申云々、以外之次第歟、頻可有御參内之由、内々以勅書改被申、卒爾之御參不可叶之由被申、遂無御參也、御爵憤之故歟、
 四品外史、新號治定以前退出了、服病氣令指出候由稱之、始終不祇候、無念之由發言者也、秀職稱損事、赦事以前逐電之間、予參軾了、先例多者六位歟、然而上卿等可被召史之上者、五位參奉之條、不可有子細事歟、
 條事定中、夫史秀職參仗座著油了、自參議座橫敷之上程進參也、永久改元詔書被尋外史之間、所持本付職事進入、則被返下云々、今夜不被始行之以前、可爲永久例之旨、以秀職左少辨觸之、爲吉書國尋申了、依三ヶ年改元例、外史、予注進之後治云々、
 永久者予注進了、外史者不注進候也、被用予注進之例高名歟、
 右府御退出之時、予於立部外構見參、條事定定文國解等、急可被宣下之次第

申入了、御心得之由有仰、略○中

公卿被舉申年號字等、

右大臣、應永、按察大納言、寬治、坊城中納言、應永、藤中納言、嘉觀、右兵衛督、貞治、
 新宰相、貞治、左大辨宰相、寬安、

〔迎陽記〕

三 九月廿三日、乙丑、天晴、今日改元定也、家君先御參殿中、其後帥黃

門招請之間、入御彼亭、改元可參之由相存之間、如然事爲申談也、而俄心氣興盛以外之間、今夜不參云々、其後家君御參内、御直衣也、大臣以下束帶、直衣著用、聊雖可有斟酌、内々祇候、又有先規不能左右、予秉燭著束帶帶劍、參内、量實等乘車尻參御湯殿末、祇候之由、付女房申入了、都護卿先以直衣體參仕、爲裝束著用、構局之間、暫閑談、年號字釋等事被談之、先有座主宣下事、○中略、天台二十日ノカ、ル、本月、次按察大納言著陣、復任、以辨行知也、俄々諸卿等參集、此間被召家君於泉殿、詔書例等有御談合、都護卿一人祇候御前云々、詔書舊草等御不審候間、少々令入見參給、此間新宰相參會、年號間事聊相談、其後於御湯殿末、坊城藤兩中納言、右兵衛督新宰相、家君、予等祇候、有一獻、飲散之間、出御有御雜談、今夜殿下無御參、勅定云、執柄初度之上、改元者爲國家重事、就旁

關白ノ出
仕ナキハ
緩急ノ至

一上事

條事定

俊冬下忠
光貞治ノ
文ニ就ス
テ問答ス

令參仕、可申沙汰之處、不參緩怠之至也。如此時宜不快體也。今度例可被用何
 度之由、内々尋申入之處、被申合執柄、可有治定之由、被仰出、俄而今度例可爲
 永久例、依天變地妖兵革改元之由、内々先被仰下間、草詔書、先備叡覽、可爲此
 分哉之由、申入之處、無子細之由、被仰下之間、書儲詔書兩通、草了、寅終、右府冬
 公、御參、令經床子座前給有御揖、行知、予、兼日可候之、由、仲光相觸、各揖所蹲居、師房朝臣、量
 實兼蹲居、有御著陣儀、左大辨宰相著橫敷畢、今夜一上事、以左大辨宰相被與
 奪申右府云々、御著陣了後、御堂上之處、先恐可被始改元、已後可有御對面之
 由、被申給間、則又御著陣、有條事定、公卿實經卿大納言、改元、初參、坊城中納言、藤中
 納言、右兵衛督、初參、保光、日野、新宰相、初參、左大辨宰相等著了、定畢後、有改元事、參
 仗公卿同前、奉行職事、嗣房、下年號勘文七通、上ヲ紙ニテ卷結也、自上卿次第見下、其儀
 悉見了傳也、廻覽畢後、上卿可讀申之由、被仰候間、左大辨宰相讀進、次第定申、
 右府、應永、按察、貞治、坊城、應永、藤中、嘉觀、右兵、貞治、新宰相、貞治、左大辨、寬安、上
 卿召職事、嗣房此分奏聞之處、歸出、一同可定申之由、被仰、面々議定、坊城中納
 言與左大辨宰相、就貞治文、及再三問答、徘徊陣邊事儀見物、但於意見者相隔
 之間、委不及聞取、寬安、貞治、應永此間、可在叡慮之由、重申入、嗣房又歸出、猶一

行知ヲ安
シテ兩字
貞治ノ意
道ニ就ス
見テノ意
見テノ意
道ニ就ス
見テノ意

仰詞

御畫

吉書奏

同可定申之由、仰之、仍寬安、貞治兩字奏聞、此間行知爲御使勅問、執柄兩字之
 間、被申合處、執柄御返事云、貞治文、利武人之貞志、（源九）治云々、聊似有憚然而近日
 大軍發向時分、武人利口叶時儀、依炎旱改元之時、如永字被用、貞治可然歟之
 由、被申云々、仍字治定、職事出陣、仰詔書事、職事退後、諸卿退出、按察大納言猶
 在座、上卿召内記、予參軾、仰詞、依天變地妖兵革、改康安二年爲貞治元年、任永
 久例、詔書令作、（三）此已後事、被與奪、按察大納言、右府御退出、按察大納言移端
 座、次以少内記、康隆進詔書草、入、管、上卿披見返給、管、康隆從上、卿進弓場奏聞、
 申次嗣房、兩度内覽職事、申免云々、被返下上卿、歸著陣、康隆置管於上卿前、退、
 上卿召内記、康隆參進、可清書之由、被仰、退、取替清書持參、如先、奏聞、被返下上
 卿於弓場、披見無御畫、仍重職事持參、申其由、仍被載御畫、則被返下上卿、歸著
 其儀、同前、上卿召史、々秀職進小庭平伏、上卿被問中務參否、秀職稱唯退、次召
 中務權大輔忠兼、按察、光昭、卿、進軾給、詔書、管、入、退、忠兼傳外記、康隆畢、次有吉書奏、
 辨嗣房爲内覽參執柄、翌朝午剋事訖歸畢、已未剋也、今度勘者七人、弘安度、七
 藤中納言時光卿、建德、長祥、應永、
 左大辨宰相忠光卿、嘉觀、貞治、被用、今度、新字也、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

初勘進此間在國故也

式部大輔有範卿

勘解由三位高嗣卿

貞久 寬安 養元

家君

慶長 恒久 建正 延德 文弘

刑部卿時親朝臣

長仁 承寬 仁養

文章博士氏種朝臣

仁長 嘉慶 文仁

式部大輔勘進永昌晉書曰下年之基惟隔五字取之未聞其例三字猶以長元以後初有之五字隔希代事也凡此勘文書引合一枚不加懸紙不封以書狀送職事其狀體內々狀會尺人等有之云々旁無故實之義也抑今度詔被載三ヶ條先例被尋兩局量實注進如此

有範勘申
ノ永昌ハ
五字隔ナ
リ
詔書ニ三
條ヲ記
スル先例

依三箇事改元例

改天永四年爲永久

依天變兵革疾疫也

改正中三年爲嘉曆

依天變地震疾疫也

改曆應五年爲康永

依天變地妖病事也

改康永四年爲貞和

依天變水害疾疫也

改延文六年爲康安

依天變地妖疾疫也

康安二年九月十三日(二十九)丑刻

〔伏見宮御記錄〕三 雲上一覽

後光嚴院

貞治六壬寅九廿三改元地震兵

〔大乘院日記目錄〕一

康安二年 改元貞治元九月廿三

〔公卿補任〕三十

康安二年九月廿三日改元爲貞治元年

〔皇代記〕後光嚴院

當今 貞治元壬寅年改元九月廿三日

〔如是院年代記〕

百代後光嚴院 貞治元九月二十日改元

○後光嚴天皇改元定奉行ノコトヲ近衛道嗣ニ諮ハシメ給フコト七月七日ノ條ニ見ユ

北朝右大臣鷹司冬通ヲ一上卜爲ス

〔公卿補任〕三十

右大臣正二位藤冬通三十九九月廿三日爲一上左大臣與

辨忠

〔愚管記〕八

九月廿三日乙丑晴略○中

入夜左大辨宰相來余著直衣冠出座左大辨來著余示云一上事可觸申右

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十三日

二十日ト
ノ説

府者、左大辨起座、余歸入簾中、

〔伏見宮御記錄〕

利六十三 永和一品記于時參議

康安二年九月廿三日、乙丑、晴、今日改元定也、略○今夜先被與奪一上、可存知
 之由、日比自殿下承之、仍欲早參之處、從昨夜病氣相萌之間、依相扶頗移時刻、
 及子刻、著楚々束帶、丸柄駕毛車、先參關白殿、以藏人右中辨行知申入之頃、
 殿下冠直衣、令出公卿座給、行知傳召由忠光正笏參進、入公卿座末間、著疊一揖、
 直足之後、聊居向候之、仰云、一上事云々、其後詞分明不聞及、忠光微唯、居直、一揖退出、次
 參右大臣第、藏人少輔仲光出、合申參仕之由、暫候公卿座、及寅刻、相府欲被出
 座、忠光起座、佇立中門外、左府出東腋戶、經南階、衛府長取松明、被著公卿座、與有揖、
 之後申次、可告其由歟、問答、仲光之處、不承云々、定違例歟、次忠光入中門廊妻戶、北折入公卿座、（殿アラシ）妻戶著座、
 西面、一揖、向直主人方、正笏申云、一上事讓申之由、關白可申旨候也、此詞建仁
 一日、（實錄）囊祖資實卿為參議大辨勤仕之時、相府被微唯、予欲退座之處、被示曰、著
 陣之時、公卿扈從先例也、今夜無其仁、降立之條如何云々、此事非家禮者、雖為
 便宜、強不可然、仍不申明分答、揖起座、直逐電、則參內、候殿上邊、人々在此所、次
 右府被參、經床子座前、有揖、上官、右中辨行知、少納言秀長、大外記師茂朝臣、大

時光參內

著陣

夫史量實候床子、皆蹲居、無答揖之儀歟、次被著陣、一上著陣事端座、大臣以後初著也、依略
 之云々、無故省略、猶以有次忠光入宣仁門請益、著橫切座、揖等次相府被目忠
 光、揖起座、著脇陣、一揖、直辨、行知、座頭、量實、各動座、次忠光目直辨、催文書、辨目
 座頭、次右大史秀職、以申文著床子、次座頭已上申上、次奏、史以申文、趨來忠光
 前、置文、以下於前床子上、拔笏揖、退復本座、次忠光插笏於左膝下、座下先刷衣
 袖之後、解紙捻、展著之、次披懸紙、先引帶上方、次下方、折著床子、半許卷之、次持
 上卷之、次結紙捻、片、取返文束、向史方置床子上、次置笏、自直辨奏、史趨來取
 文、復座之後、退入、插文於杖、還著床子、次忠光揖起座、辨史動著一宰相座、其儀
 先一揖、懸右膝著座、又一揖、不直足、先々居直申之了、不直足之頗敬屈、申大臣
 云、申文、可入聽之程也、大臣目許、忠光低面微唯、起揚直足、頗左顧、次奏、史參、（蓋説力）軾進文、大
 臣披見之、如元卷調之下、賜史、々賜之、於杖上披文、結申、大臣被仰々詞、不取史
 每度高唯、結了退出、至宣仁門代邊之時、忠光揖起座、著沓著本座、次藏人少輔
 仲光下藏人方吉書、大臣被結申、職事退、次召辨行知、下賜之、次相府揖起座、被
 參御所、忠光平伏如例、略○下

〔貞治改元定記〕

官記治康 康安二年九月廿三日、乙丑、晴、改元定也、略○今夜右

府御參内以前、自殿下以下大辨宰相忠光卿爲御使、被讓申一上於右大臣殿、了殿下御直有御出座、被召仰大辨也、右府同御出座令奉給云々、

〔迎陽記〕

三 九月廿三日、天晴、今日改元定也、○中今夜一上事、以左大辨

宰相、被與奪申右府云々、

○近衛道嗣、一上ヲ次大臣ニ讓リテ、改元定ヲ奉行セシムル先例ヲ奏スルコト、七月七日ノ條ニ見ユ、

二十六日、辰北朝、德禪寺義亨徹ニ、若狹名田莊内田村下村等ヲ安堵セシム、

〔德禪寺文書〕

○山城

〔附錄〕寶篋院殿御判

若狹國名田庄内田村下村并別納等事、就花山院入道中納言家寄附、被成下安堵論旨之上、所止政所祈所儀也、寺家管領不可有相違之狀如件、

康安二年九月廿六日

〔參議〕花押

德禪寺長老

○北朝、大德寺長老ニ、田村ノ知行人并ニ其闕否ヲ問フコト、七月二十

九日ノ條ニ見ユ、

二十七日、巳北朝、源雅元ヲ、從五位下ニ敍ス、

〔師守記〕

○三十一 帝國圖書館本

十二月十三日、甲申、天晴、今曉卯剋、小雨下、則止、

○中略、内侍所臨時御神樂ノコトニ、今日前源大納言卿、進狀於家君云、先

カ、ル、十二月二十三日ノ條ニ收ム、日令申候、雅元敍爵事、口宣案爲御心得進之、故源宰相雅顯卿嫡子、雅世遁俗

之剋讓與舍弟雅元、相續彼跡候也、○中被獻請文云、雅元敍爵事、口宣案賜預

了、可存知候、雅世遁俗事、何比候乎、爲存知、以便宜蒙仰候者、畏存候、○中

上卿三條中納言

貞治元年九月廿七日 宣旨

源雅元

宜敍從五位下、

藏人頭左近衛權中將藤原爲遠

二十九日、辛未下野茂木越後入道心蓮、同國茂木東西内飯野郷、河口郷及比井河瀨檜山村等ノ地ヲ三郎朝音ニ讓ル、

〔茂木文書〕

○一 羽後

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月二十七日 二十九日

兄雅世ノ跡ヲ相續ス

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月三十日
讓渡（同前等）所領事

茂木郡東西内飯野郷、河口郷并井河瀬檜山村、小井土郷内馬籠野内事
右任故入道殿（明阿）御讓狀三郎朝（管之）所爲傳領也、不可有敢他妨、但公（檜山）
者、一期之間、新三良朝長（辰ノ）計置者也、隨命無異儀者、可加扶（持力）也、仍讓狀如件、

康安二年九月廿九日

○基氏朝音ヲシテ、京都ノ軍ニ會セシムルコト、十二月二十三日ノ條
ニ見ユ、

三十日、（壬申）北朝、記錄所寄人結番次第ヲ更定ス、

〔師守記〕（二十八）○帝國圖書館本 十月三日、乙亥、天晴、今日召次行包持來記錄所

番文、維衡朝臣他界并師治被除之、（真里小路）嗣房被召加了、彼是結改了、家君、予、加奉返
賜了、○中

記錄所

定寄人結番事

一番十六日、廿一日、廿六日、十一月廿六日、

信兼朝臣 時親朝臣

維衡卒ス
師治ヲ除
ク嗣房ヲ加

師 香

二番十七日、廿二日、廿七日、

行 知 在衡朝臣

章 世

三番十八日、廿三日、廿八日、

嗣 房 師 連

宗 季

四番十九日、廿四日、廿九日、

匡遠宿禰 奉 量 實 奉

明 宗

五番廿五日、三十日、十一月十五日、

師茂朝臣 奉 師 守 奉

右守結番次第、毎日無懈怠、可被祇候當所於議定、日、廿一日、十一日、庭中、日、廿六日、十一日、越
訴日、廿九日、十九日、等日者、可有皆參之由、所被仰下也、各存其旨、可被參勤之狀、所定
如件、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月三十日

貞治元年九月卅日

是月、基氏、箱根山ニ赴キ、畠山國清ヲ降ス、

〔中村文書〕

遺文所載

中村定行
軍忠狀

中村彌次郎定行申軍忠事

自去康安二年三月八日、奉屬當御手、令發向伊豆國、於同廿八日三戶城攻口致合戰以來、至于今月、所々城于沒落之期所抽軍忠也、然早御判爲備後證恐々言上如件、

康安二年九月 日

一見了花押基氏申傳候

〔安保安書〕

武藏

氏滿安保
泰規ヲ招ク

若御新入間河御座之間、不日馳參可被致警固之狀、依仰執達如件、

康安二年九月十五日

(山名氏清カ)
陸奥守(花押)

安保安五郎左衛門入道殿

〔正文書〕

泰規國清
ニ味方ス

手波賀郷以前御拜領之事、安保安信濃入道過失之段者、畠山阿州爲御敵被楯

籠伊豆城之時、彼安保安入道、畠山阿州仁同意之事、依無其隱、被召上鎌倉、已可蒙御不審御沙汰落居之處、兩寺之爲訴訟、大喜和尚申口よて御申候間、被助命、著大衣候、拜領之地者、皆被召候りと存候、

貞治三年六月十一日

瑞泉寺殿
基氏 御判

小嶋勘解由左衛門入道申通こて書進上候、安保安信濃入道ハ今の信濃守候おうちよて候、

〔鎌倉大日記〕

康安元年十一月廿三日、畠山阿波入道(國清)自入間川殿御勘氣、(基氏)中

略翌年康安二年九月、入間川殿御向箱根山、依降參、家人遊佐入道兄弟以下多被誅、

〔太平記〕

三十八前

畠山兄弟楯籠修禪寺城并遊佐入道自害事

筑紫ニハ宮方蜂起ストイヘトモ、東國ハ程ナク靜リヌ、去年ヨリ参考太

安元年、畠山入道道誓、舍弟尾張守義深参考太平記ニ、毛利家本、或作義國、前後不一、作國照者非也、下倣之、伊豆修禪寺ニ楯籠テ、東八箇國ノ勢ト戰ケルカ、兵糧盡テ落方モナカリケレハ、皆城中ニテ討死セントス、左馬頭殿ヨリ使者ヲ以テ、先非ヲ悔テ子孫ヲ思ハ、頸ヲ延テ降參スヘキ由仰ラレケ

修禪寺ニ
楯籠ル
兵糧盡ク

國清出家
シ義深伊家
豆守護職
ニ還補薩
レテ基氏
降ル

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四七八

ルヲ誠ソト信シテ道誓ハ禪僧○前田家本ニナリ、舍弟尾張守ハ伊豆國守
護職還補ノ御教書ヲ賜テ、九月十日○参考太平記ニ、今川家毛利家本、作十月十日、北條家、南都本、作十一月十日、
金勝院本、作九月十一日、西源院本、作十一月二十一日、天正院本、作十一月二十一日、
本、作十一月二十五日、トアリ、前田家本、十一月二十一日、作、降參シタリケル
カ、道誓ハ伊豆ノ府ニ居テ、先舍弟尾張守ヲ鎌倉左馬頭ノオハスル箱根ノ
陣ヘソ參ラセケル、○参考太平記ニ、道誓居伊豆府以下、金勝院本不出、天正
禪寺城ニ轉漕ニ疲テ、東八箇國ヲ一拉ニ思フ様ニ戰ケル、サレハモ、是ヲ對治セ
ハ、許多ノ御使ヲ以テ仰ラシメ、案ノ不義ニ行ハテ、重疊スヘトモシ、先非ヲ悔
成子孫ケル思ハ、兜ヲ脱軍門ニ評定有テ、此トテ、伊豆守護職還補ノ御教書ヲ
切タル體ニテ、後ニ相從タリケル、間、左右執事、若共、五百餘人、誠ニ思ヘ
軍勢モ未退散、是ハ何ト有哉、覽ト、道誓ハ身ヲ危ク思ケル、共、左馬頭殿モ、諸
リ、字ア舊好アル人ハ、萬死ヲ出テ、二度見參ニ入事ノ嬉シサヨナト云テ、一獻
ヲ勸メ、此程情ナクアタリツル傍輩ハ、イツシカ媚諛テ、言ヲ卑クシ禮ヲ厚
クシテ、頻ニ追從ヲシケル、間、門前ニ鞍置馬ノ立止隙モナク、○前田家本、馬
止隙モナク、座上ニ酒肴ヲ置連テ、時モ無リケリ、角テ三四日、○参考太平記
五日、ト經テ後、出、而云、懸リケレトモ、左馬頭モ、諸軍勢モ、イマタ退散セ、本
ア、

稻生平次
國清ニ基
氏ノ謀ヲ

國清夜藤
乘道場
澤ノ道場
ニ逃ル
上洛

義深箱根
ヲ逃レテ
結城中務
大輔ニ依

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四七九

ハ何トアル事ヤラント、道誓身ヲ危クシ、九月十八日夜、○参考太平記ニ、九月
トアリ、前田家本、十一月十八日、天正院本、作十二月五日、稻生平次、西源院本、作、
左衛門トアリ、潛ニ來テ道誓ニ耳語ケルハ、降參御免ノ事ハ、元來出拔ル、
事ニ候ヘハ、明日討手ヲ向ラルヘキニテ候ナル、實モ聞ニ合セテ、豊島因幡
守俄ニ陣ヲ取易テ、道ヲ差塞ク體ニ見ヘテ候、○参考太平記ニ、金勝院本、無
テ、以下三十字無シ、合セ、今夜急何クヘモ落サセ給フヘシト告タリケル、道
誓聞モ敢ス、舍弟式部大輔ニ、○参考太平記ニ、今川家、毛利家、金勝院本、作、尾
義深共逃、藤澤云々、與本文、此下、尾張守、義深、結城、陣營、而云、道誓、屹ト胸シ
ケルカ、假初ニ出ル由ニテ、中間一人ニ太刀持セ、家、○参考太平記ニ、中間、毛利
兄弟二人徒歩ニテ、其夜先藤澤ノ道場迄ソ落タリケル、上人甲斐甲斐敷、馬
二匹、乘二人相副テ、夜晝ノ界モナク、馬ニ鞭ヲ進メテ上洛シケルヲハ、知
人更ニ無リケリ、○西源院本、兄弟二人徒歩ニテ、潛ニ上洛セ、舍弟尾張守義深
ハ、箱根ノ御陣ニ有ケルカ、翌ノ夜、或時衆ノ懸ル事ト告ケルニ驚テ、サテハ
我モ何クヘカ落ナマシト案スレ共、東西南北皆道塞リテ、落ヘキ方モ無リ
ケレハ、結城中務大輔カ陣屋ニ來テ、院、○参考太平記ニ、西源院、ヒラニ憑ヘキ由

長唐櫃ノ底ニ入レテ藤澤ノ道場ニ送ル

遊佐入道性阿

性阿禪僧ノ衣ヲ著ケ京都ニ

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四八〇

ヲソ宣ヒケル是ヲ隱サンスル事ハ至極ノ難儀ナレトモ弓矢取身ノ習人ニ憑マレテ叶ハシト云事ヤ有ヘキト思ヒケレハ長唐櫃ノ底ニ穴ヲアケテ氣ヲ出シ其櫃ノ中ニ伏サセテ數十合昇連ネタル鎧唐櫃ノ跡ニタテ態鎌倉殿ノ御馬廻ニ供奉シテ尾張守ヲハ夜ニ紛レテ藤澤ノ道場ヘソ送りケル命程惜ムヘキ者ハナカリケリ此人遂ニハ御免有テ越前ノ守護ニ補セラレ南都本越中非也トアリ國ノ成敗穩ニテ土民土上民ニ作ルヲ安セシカハ鱒ノ淵ヲ去蝗ノ境ヲ出ル計ナリ在箱根以下至此金勝院本不張守義深以下ノ文無シ尾遊佐入道性阿ハ主ノ落ラル粧ヲ懸テ知タリケレトモ暫人ニアヒシラヒテ主ヲ何クヘモ落延サセン爲ニ少モ騷タル氣色ヲ見セス人ニ推セラレシト島山殿ノ落ラル粧懸テ知タリケレ共基雙六十服茶ナト飲テサリケナキ體ニテ笑戲テ居タリケレハ記ニ毛利家北條家金勝院南都本云三日三夜迄過シケル云々トアリ前田家郎從共モ外様ノ人モ思寄ヘキ様無リケレ共遂ニ隱ルヘキ事ナラネハ島山兄弟落タリト沙汰スル程コソ有ケレ懸テ討手ヲ向ラルト聞ヘケレハ遊佐入道ハ禪僧ノ衣ヲ著テ只一人京ヲ志テソ落行ケル兎角シテ湯本迄落タリケ

向フ

自ラ喉ヲ切キ腹ヲ切ル

江戸修理亮ハ龍口ニテ斬ラ

ルカ行合人ニ人ニノ四字無シ口脇ナル創ヲ隱サン爲ニ袖ニテ口覆シテ過ケルヲ見ル人中々アヤシメテ帽子ヲ脱セ袖ヲ引ノケル間本帽子ヲ取笠ヲヌカセ口脇ノ創隠ナク顯レテ遁ルヘキ様無リケレハ宿屋ノ中門ニ走上リテ自吭カキ放チ上リテ近附者二人取テ引寄刺殺シ自ラ喉ヲカキ放ツ下ト遊佐性阿入道自害スル體ヲ見置テ語傳ヘヨト云儘ニニ作ル返ス刀ニ腹切テ袈裟引被キテ死ニケリ江戸修理亮ハ龍口ニテ生捕レテ斬レヌ其外此ニ隱レ彼ニ落行ケル郎從トモ六十餘人或ハ搜出サレテ斬レ或ハ追懸ラレ腹ヲ切目モ當ラレヌ有様ナリ正本云中ニ毛利家左衛門入道性意ハ駿河國マテ逃上リシヲ守護代所望シケルヲ父ノ入道全ク我子ニアラスト陳シハ歎思召加様ニハ仰候力抑テケルハ御命ニ代ハ懸ル處ヘ尋參御命ニ代ラシテ申候ハカ中々還シケル則此由ヲ守護申ケレハ警固ノ武士モ是ヲ聞テソハロニキカ流シケル則此由ヲ守護感シテ父ケレハ今死罪ヲ赦サレタリ聞テ人モ袖ヲ高義ノ哀ニヤサシキ事ヲ

〔参考〕

〔賴印大僧正行狀繪詞〕二

岩松治部大輔眞義ハ左馬頭義兼ノ嫡々トシテ源家無雙ノ人ナリ錦小路

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四八一

殿ニ心ヲヨセシニヨリテ隱家トナレリ、爰ニ關東管領畠山阿波入道道誓御不審ヲ蒙リシ時、本領子細アルベカラズトテ召出サレテ、康安二年ニ豆州立野城へ發向ス、御所進發ニヨリテ、道誓ハ京都へ參、兄弟トモ降參ス、此條眞義ノ高名ナリ、鎌倉還御之後ハ、早速ニ本領還補スベキ所ニ、兎角延引シテ其期ナシ、隨テ眞義院主へ參テ申テ云、此事人間ノ力及ザル處也、併御加持力ヲ仰ベキヨシ歎申アイダ、八幡ノ本地ノ護摩ヲ、一七日勤行シテ、卷數ヲ遣サル、處ニ、同時ニ還補ノ御教書到來、手ヲ拍テ、法驗ノ地ニヲチザル事ヲ貴デ、上州丹生郷ノ慈悲寺ノ別當職ヲ奉ラル、當寺ハ中納言律師忠快ノ草創靈佛ニシテ、其瑞繁多ナリ、

○畠山國清卒スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔太平記〕

三十八前

畠山兄弟楯籠修禪寺城、附遊佐入道自害事

畠山入道兄弟、甲斐ナキ命助リテ、七條ノ道場へ夜半許ニ落著タリケルヲ、入道兄弟、太平記ニ、自此至京著アリテ、七條道場ニ姑隱レ居給ヒシカ、尙其禪アリテ、宇治邊ニ由來ヲ尋、我廬ヲ占テ、中々安閑ヲ樂ミ給ヒケル、此文、利家トテ、在邊ニ角テ、日數ヲ經ル程ニ、上意仔細ナク、寛免ノ御沙汰、鎮メテ、尾張守義深、式部大輔國熙、召出サレ、ノミナラズ、攝州中島ノ強敵ヲ

國清兄弟七條道場ニ落付ク

聖ノ案内ニ降ラン

楠木氏許サズ

南都山城ノ禪院或ハ草菴等ニ露テ

程ナク卒ス

賜テ、忽ニ絶ントスル一家ヲ興シ給ケル云々、聖ノ前田家本、二三朝、越前、北國、山、深、正、任、越、前、守、修、云、々、可、夫、并、入、道、ト、ア、リ、聖、上、人、ニ、作、ル、二、三、日、勞、リ、奉、リ、テ、道ノ案内者少々相副テ、行路ノ資ナト様々ニ用意シテ、南方へソ送ラレケル、道誓、誓字、知郡ノ在家ニ立寄テ、楠木方へ降參ノ綸旨ヲ申テ、タヒ候へト、宣ヒ遣サレタリケレトモ、楠サシモ許容ノ分ナカリケレハ、十萬騎ニテ關東ヨリ上洛シ、君ヲ惱シ奉ル大惡人、勢盡テ身ノ置所ナキ儘立、降參申テ、御許容ナシ、何ノ御用ニカ、宇智郡ニモ隱レ得ス、都へ立歸ヘキ方モナシ、南都山城脇邊、垣邊ニ作ル、石ニ、トアル禪院、律院、或ハ山賤ノ柴ノ庵、賤カフセ屋ノサヒシキニ、袂ノ露ヲ片敷テ、夜ヲ重ヌヘキ宿モナク、道路ニ袖ヲヒロケヌ計ニテ、朝三暮四ノ資ニ、心有人モカナト、身ヲ苦シメタル有様、聞ニ耳冷シク、見ルニ目モアテラレス、幾程モナク、兄弟共ニハカナク成ケルコソ哀ナレ、而モ利家本、至段尾、載經、日尾、張守、義深、式部、大輔、國熙、被、敕、事、等、皆、同、天、正、本、詳、出、于、上、可、并、見、ラ、レ、ス、ニ、前、田、家、本、人、間、榮、耀、風、前、塵、ト、白、居、聞、ニ、モ、涙、ヲ、被、催、見、ル、ニ、于、モ、目、モ、當、ラ、レ、ス、ニ、前、田、家、本、人、間、榮、耀、風、前、塵、ト、白、居、易、力、作、リ、歎、キ、ケ、ル、カ、幾、程、ナ、ク、兄、弟、共、ニ、ハ、カ、ナ、ク、入、道、ニ、作、ル、本、此、去、々、年、春、ニ、作、富、貴、草、頭、露、ト、杜、甫、力、作、リ、シ、モ、理、カ、ナ、此、人、々、入、道、ニ、作、ル、本、此、去、々、年、春、ハ、三、十、萬、騎、力、大、將、ト、シ、テ、得、第、三、十、四、卷、云、畠、山、率、二、十、萬、家、本、作、二、十、萬、爲、南

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

新田義興
ノ怨靈

方へ發向シタリシカハ、德風遠ク扇テ、靡カヌ草木モナカリシニ、イツシカ
三年ヲ過ス、カ以下源院本、イツシ生ナカラ恥ヲ曝シテ、敵陣ノ境ニサマヨヒ
ヌル事、更ニ直事トハ覺ス、此人ニ出拔レ討レシ新田左兵衛佐義興、怨靈ト
成テ、吉野ノ御廟へ參タリケルカ、畠山ヲハ、義興カ手ニ懸テ、生ナカラ軍門
ニ恥ヲ曝サスヘシト奏シ申ケル由、先立テ人ノ夢ニ見テ、天下ニ披露アリ
シモ、誤ニテハナカリケリト、今コソ思ヒ知レタレ、○西源院本、先立テ披露
ハ無リケリト、今コソ思知レタレト、今コソ

〔喜連川判鑑〕

關東

從三位左兵衛督基氏

壬(康安)

九月、入間川殿畠山道誓退治

國清ノ家
弟遊佐兄
誅セラ

トシテ御進發、豆州箱根山ニ御陣、道誓同舍弟尾張守義深降參シテ箱根ノ
御陣ニ參ル、其後道誓、義深逐電ス、家人遊佐入道兄弟以下ヲ誅ス、道誓ハ密
ニ河内へ赴テ、南朝へ降參ストイヘトモ、許容ナク、終ニ流浪シテ死、

〔畠山家記〕

乾

畠山家由來

因茲、義純ニ五代ノ孫尾張守家國ノ嫡子畠山阿波ノ將監國清ヲ等持院殿
ヨリ鎌倉ノ執事トシテ、關東ノ政務ヲ委附セラレ、左馬頭基氏卿ノ後見ニ
成シ下サル、道誓禪門是也、其後數年ヲ經テ、寶篋院殿義詮公ノ御時、康安年

國清貞治
三年病死

義深ハ義
滿ヨリ河
内ノ守護
ニ任セラ

中、道誓不慮ニ御敵ト成シ時、其舍弟尾張守義深、同式部大輔國熙モ、兄ト一
所ニ御敵ト成ケルカ、無幾程貞治三年ニ、道誓病死セシカハ、義深、國熙モ御
免ヲ蒙リ、道誓カ子阿波守清貞等モ、罪利悉ク免許有テ、元ノ如ク公方家ノ
味方ニ參リ、一族彌々忠勤ヲ抽スル、鹿苑院殿義滿公ノ御時、尾張守義深ハ、
河内ノ國ノ守護ト成テ、多年南方ノ御敵ヲ押へ、和田楠ノ一黨連々ニ被退
治セ、因茲和田、隅屋、甲斐庄等ヲ始テ、降參ノ楠黨、彼家ノ被官ト成シ者多シ、
其後義深ハ身罷、其子右衛門佐基國器量有ル人ニテ、彌忠功有ケル中ニ、明
徳二年ノ冬ノ比、山名陸奥守氏清、同播磨守滿幸謀叛ヲ起シ、攻上テ洛中洛
外合戦ニ及シ時、基國軍功ノ賞トシテ、大和國ヲ加領セララル、○上略

〔尊卑分脈〕

清和源氏

家國

母、式部丞、從五下、尾張守、

國清

母、左近將監、左京大夫、修理大夫、阿波守、關東執事、

義清

母、陸奥守、阿波守、

〔諸家系圖纂〕

三之一

家國

尾張守、從五位下、治部少輔、同判官、法名西蓮、

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

國清

左京大夫、阿波守、關東執權、左近大夫將監、自基氏

義清

阿波守、左近將監

〔畠山家記〕

乾

家國

治部太輔

國清

關東執事、左近將^(監脱カ)阿波守、修理太^(大勝カ)爲紀伊守護、法名道誓、康安二年卒

義清

陸奥阿波守

○國清、足利直義ニ從ヒテ、官軍ト三河矢矧川ニ戰フコト、建武二年十一月二十五日ノ條ニ、和泉ニ岸和田治氏等ト戰フコト、延元元年九月一日ノ條ニ、直義後醍醐天皇河内ニ在スト聞キ、紀伊ノ人志富田兵衛太郎ニ令シ、國清ニ屬シテ、南軍ノ通路ヲ塞ガシムルコト、建武四年正月二日ノ條ニ、光嚴上皇、國清ノ近江園城寺領ヲ濫妨スルヲ停メシメ給フコト、曆應元年九月二十二日ノ條ニ、花園侍從房ヲ誘ヒ、吉野熊野ノ通路ヲ塞ガシムルコト、同四年閏四月二十一日ノ條ニ、直義國清ヲシテ、細川顯氏ト共ニ、近畿ノ南軍ヲ擊タシメントスルコト、貞和三年八月九日ノ條ニ、紀伊泰治一族ヲ招クコト、同年十月二十九日ノ條ニ、

和泉井山城ヲ貴志按察房ニ、紀伊春日山城ヲ警固セシムルコト、同年十二月七日ノ條ニ、上洛スルコト、同二年正月十六日ノ條ニ、兵庫打出川濱ニテ、藥師寺公義ノ襲撃ヲ卻クルコト、同年二月十七日ノ條ニ、修理權大夫ト爲ルコト、同年四月十六日ノ條ニ、從五位上ニ敍セララルコト、同年五月二十九日ノ條ニ、直義ニ從ヒテ、北國ニ赴クコト、同年八月一日ノ條ニ、尊氏、國清ヲ正五位下ニ敍セラレンコトヲ舉申スルコト、同年十月十九日ノ條ニ、尊氏ノ直義討伐ノ軍ニ從フコト、同年十一月四日ノ條ニ、新田義興等ヲ相模河村城ニ攻ムルコト、文和元年三月十五日ノ條ニ、關東執事ト爲ルコト、同二年七月是月ノ條ニ、東國ノ軍ヲ率キテ、京都ニ入ルコト、延文四年十一月六日ノ條ニ、京都ヲ發シ、河内ニ入り、南軍ト四條ニ戰フコト、同年十二月二十三日ノ條ニ、和泉和田一族ヲ招クコト、延文五年三月十日ノ條ニ、河内金剛寺ヲ燒クコト、同月十七日ノ條ニ、河内ノ南軍ヲ防禦スト稱シテ、仁木義長ヲ討タントスルコト、同年七月十八日ノ條ニ、鎌倉ニ下向スルコト、同年八月四

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四八八

日ノ條ニ、基氏、國清ノ請ヲ聽シ、伊豆郡宅郷ノ闕所地及ビ名田ヲ三島神社ニ寄スルコト、去年六月二十五日ノ條ニ、鎌倉ヲ出奔シ、城廓ヲ伊豆ニ構ヘ、基氏、波多野高道等ヲシテ、之ヲ撃タシムルコト、同年十一月二十六日ノ條ニ、再ビ高通等ヲシテ、三戸城ニ戰ハシメ、之ヲ陥ル、コト、本年三月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕

部ハ之 畠山國清



○日根文書(和泉)
建武三年五月十九日執達狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四八九



○歡喜寺文書(紀伊)
建武四年八月十八日施行狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

新 所

四九〇

○淡輪文書(紀伊)
觀應元年八月淡輪助重軍忠狀證判

新 所

○田代文書(筑後)
觀應二年四月田
代入道了賢軍忠
狀證判

南朝正平十七年 北朝貞治元年九月是月

四九一



○和田文書(三) 延文五年三月十日 奉書

十月癸酉朔盡

一日癸酉北朝平座

〔師守記〕

○二十八國圖書館本

十月一日癸酉天晴孟冬月朔方吉慶所願一

々可成就月也壽福增長延命子孫繁昌官位俸祿可任意幸甚云々○中略斯

部少輔ニ任セラルル條ニ收ム

入夜頭中將爲遠朝臣尋申局務云旬平座辨少納□共以不參例内々可注賜

云々付使被注遣了○中略

旬平座辨少納言史共以不參例内々可注賜之狀如件

十月一日 戊剋

爲遠

四位大外記殿

狀師茂ノ返

爲遠旬平座少納言史等ノ不問

二孟平座辨少納言同時不參例一通注進別昏候六位史不參近來不審候歟恐惶謹言

十月一日 亥剋

師茂 狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月一日

二孟平座辨少納言同時不參例

久壽三年四月一日平座、上卿中納言藤原重^{（重九）}以下參入、辨少納言不參、
曆應二年十月一日平座、上卿權中納言隆蔭卿一人參入、行事位次、納言、參
議并辨、少納言等一向不參、不可有先規、无勸盃之儀、
康永二年十月一日平座、上卿中納言藤原資明卿、辨少納言不參、無勸盃、但
居饗如例、

觀應元年四月一日平座、上卿權中納言藤原實長卿、^{春宮權大夫、}辨少納言不參
之間、被略勸盃、於饗膳者如例云々、

延文五年十月一日平座、上卿不參、^{右兵衛督、}議隆家卿、行事、辨、少納言、六位史
等不參、被略勸盃、於饗膳者、如例居之、

平座見參也、上卿權中納言藤原時光卿一人行事、位次納言、宰相辨、少納言、
五位外記史、六位史等不參、權少外記清原良種、^{分配、}奉行職事頭左中將藤
原爲遠朝臣等參陣、無勸盃、依辨少納言不參也、於饗膳者、如例居之、如形用
意被進友永了、子剋許被行之、見參祿法上卿被下外記云々、
^{（裏書）}
一日、

見參公卿
侍從

分配外記良種注進局務、

合見參、次侍從五位已上、

從 一 位 內覽臣、良基公、大閤

關 白 左 大臣 道嗣公

權中納言藤原朝臣時光

從四位下藤原朝臣爲遠 藏人頭、左中將、奉行

貞治元年十月一日

二日、^{甲戌}石清水八幡宮御劔袋破損ス、是日、大外記中原師茂、勘例文ヲ北
朝ニ奏ス、

〔師守記〕^{二十八}帝國圖書館本 十月二日、甲戌、天晴、今朝八幡宮東御前御劔袋

鼠喰損事、勘例一通被付頭右大辨資定朝臣許、此事昨日爲彼朝臣奉行尋申
之間、今朝被付之了、慥賜之由、以詞有返事、^略○中

八幡宮東御前御劔袋鼠喰損事、先例并沙汰之次第、可被注進之由、被仰下
之狀如件、

九月卅日 到十一

右大辨 資定朝臣

資定書狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月一日

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二日

四位大外記殿

師茂書狀

八幡宮東御前御劔袋鼠喰損例一通勘申候可有洩御奏聞候哉仍言上如件

十月二日

大外記中原師茂 狀

追啓

諸社恠異事可勘申例之由被宣下候歟然而隨仰先令注進候可得御意候哉恐惶謹言

勘例

勘例十月十八日被返下沙汰之次第可注加之由被仰候間如此被注加注進了

八幡宮東御前御劔袋鼠喰損例并沙汰次第事

保元三年ノ例

保元三年九月六日被行軒廊御下是八幡宮西御前璽御劔袋爲鼠被喰損事也廿六日被立石清水奉幣使先被定使并可調進同宮璽御劔袋日時今月廿九日被立同奉幣使先被定日時使被喰損璽御袋被調獻之故也

建久七年ノ例

建久七年九月五日被行軒廊御下是石清水八幡宮所司言上八月十七日注文備內殿東御前御劔錦袋并御茵等爲鼠喰損事也

建歷元年ノ例

建歷元年二月三日被行軒廊御下是石清水宮東御殿御劔袋鼠喰損事也

五月廿二日被立石清水奉幣使先被定日時是東御殿御劔袋鼠喰損之間依被調進也

仁治元年ノ例

仁治元年九月六日被軒廊^{行殿乙}御下是石清水八幡宮所司等言上去月十六日注文備今月十五日寅時見付三所御茵御几帳帷并東御前御劔袋鼠喰損事也

同三年ノ例

同三年九月五日被行軒廊御下是石清水八幡宮所司等言上去月十七日注文備今月十五日寅一點中御前御茵東御前御劔袋并御茵外殿中御前御帳帷爲鼠喰損事也

文應元年ノ例

文應元年十月九日權中納言源通基卿參入被行軒廊御下是石清水八幡宮寺所司等言上去八月日注文備今月十五日寅一點參入內殿奉伺御璽^{帷乙}西御前御劔袋并御几帳情額爲鼠被喰損事也

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二日

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二日

四九八

右隨所見注進如件

十月二日

大外記中原師茂

十八日庚寅天陰今曉卯剋雨下則止今日予精進所作如例○中今日頭右大辨資定朝臣進狀於局務云八幡宮東御所御劔袋鼠喰損事先例并沙汰之次第可被注進之由被仰下了而先日被注申之趣沙汰之次第無所見候何樣候哉同可被注進之由其沙汰候也端書云彼勘例一通返獻候早々可注給候也云々先使者被歸也自是可注申之趣被答之則去二日勘例注加被注進了

彼勘例一通返獻候早々可注給候也

八幡宮東御前御劔袋鼠喰損事先例并沙汰之次第可被注進之由被仰了而先日被注申之趣沙汰之次第無所見候何樣候哉同可被注進之由其沙汰候也謹言

十月十八日

資定

四位大外記殿

八幡宮東御前御劔袋鼠喰損例沙汰之次第隨所見注加進上候此外不勘

辨資定
茂ニ八幡
宮劔袋鼠
害ノ先鼠
及ビ沙汰
次第ノ例
ヲ問

師茂ノ返
狀

得候可得御意者也恐惶謹言

十月十八日

師茂

十九日辛卯天陰不降雨今朝八幡宮東御前御劔袋鼠喰損事勘例被付頭辨資定朝臣昨日被付處他行之間今朝被遣了慥賜之由有返事

義詮東寺ノ陣ヨリ歸ル

〔師守記〕

○二帝十八國圖書館本

十月二日甲戌天晴○中是日發向攝州軍勢悉

上洛是宮方勢越川引退之故云々神妙々々（斯波高徳）大夫入道勢朝倉并佐々木山中

判官等爲守護上國云々

入夜亥剋許鎌倉宰相中將義詮自東寺被歸渡六角東洞院宿所攝州靜謐之

故也去月十二日被渡東寺了無程洛居天下大慶不能左右者也

○北軍京都ヨリ攝津ニ向ヒ義詮東寺ニ陣スルコト去月二十二日ノ條ニ見ユ

斯波直持相馬胤頼ノ陸奥東海道檢斷職ヲ安堵ス

〔相馬文書〕三

東海道

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二日

四九九

南方勢退
散ニ依ル

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二日

檢斷職事守 (先例カ) 可致沙汰之 (狀加件カ)

康安二季十月 (二カ) 日

相馬讚岐守殿 (胤賴)

○直持重ネテ同職ヲ安堵スルコト、明年八月十五日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔磐城相馬家譜〕

光胤 相馬彌次郎、

胤賴 相馬治部少輔、讚岐守、

二十一日
トノ説

延文三年十一月廿日襲封、康安元年九月十八日任讚岐守、二年十月廿一日補東奥海道檢斷職、

憲胤 相馬治部少輔、

建仁寺住持元曉月窓寂ス、

第四十世

〔扶桑五山記〕

四住持位次 山城州東山建仁禪寺

燈、紀州人、諡圓光禪師、貞治元年十月二日寂、塔于給孤菴、

〔建仁寺住持位次簿〕

四城○山 四十世月窓和尚、名元曉、勅諡圓光禪師、嗣約翁儉、延文四年己

亥入寺、貞治元年壬寅十月二日寂、給孤菴、

〔禪刹住持籍〕

四城○山 筑前扶桑最初禪窟安國山聖福禪寺歷代住持

聖福寺二
十三世

〔天隱語錄〕 東山建仁寺入寺語錄

八萬四千
ノ寶塔ヲ
建立ス

給孤東堂大和尚、閣浮洲立八万四千基寶塔、見育王之役鬼神、給孤園布一百二十院黃金、推空生而爲長老、先宗之德被兒孫者大哉、迨其挾風雅軛、誰不虛

左乎、給孤祖師月窓、自造八万四千小塔、

〔扶桑五山記〕

四諸塔 山城州東山建仁禪寺 大覺派

給孤菴

〔本朝禪林宗派并五山十刹〕

松源下二世、無明下關溪派

約翁德儉

月窓元曉

〔佛祖宗派綱要〕

揚岐方會

南禪約德儉

建仁月窓元曉

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二日

士曇ノ道
號頌

元光ノ道
號頌

元棟ノ造
塔勸緣疏

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月四日

〔廣智國師語錄〕四頌 月窓

昨夜廣寒宮闕開、銀蟾飛上玉欄時、六根門下放光處、誰管梅香撲鼻來、

〔寂室錄〕上之一頌 月窓

水輪高輾碧天秋、光透虛樞瀨氣流、內外玲瓏常不夜、如何著得睡獼猴、

〔業鏡臺〕幹緣 建仁禪寺建圓光禪師塔勸緣疏

虞宗門顛墜、杞人憂天理或然、營祖塔權輿、愚公移山事孰否、龜從筮從乎龍耳、鬼謀人謀乎牛眠、五常以仁爲先、六度從檀而始、一百屋堆錢之富室、看取龐蘊沉淵、八十頃布金之大心、勝過賢于插草、

四日丙子北朝僧靜舜二、若狹名田莊內井上村ヲ安堵セシム、

〔大德寺文書〕丁箱山城

若狹國名田莊內井上村、如元可被管領者、天氣如此、仍執達如件、

貞治元年十月四日

左少辨(花押)

靜舜御房

北朝左大臣近衛道嗣上表ス、

〔公卿補任〕三十四 左大臣從一位藤道嗣 十月四日上表、

安富泰重
軍忠狀

〔續史愚抄〕二十五 後光嚴院中

十月四日、丙子、關白左大臣道嗣上表、罷大臣公卿補任

諸家傳、歷代要

五日、丑是ヨリ先、北黨肥前松浦黨蜂起シ、安富泰重、筑前福井ニ之ヲ防グ、是日、松浦黨復起レルニ依リ、泰富再ビ福井ニ赴キ、國司ヲ助ケテ、一貴寺山ニ之ヲ防グ、

〔佐賀文書纂〕深江文書

安富民部大夫泰重申軍忠事

右去九月十四日、○中略、長者原合戰ノコトニカ、ル、次松浦御敵蜂起之由、在國司筑前守令申之間、同廿五日、福井罷下、致合力之處、御敵退散之由、依風聞、令參上之處、御敵又鏡濱崎打寄之由、其聞候之間、十月五日、重福井罷下、在國司令同心、於一貴寺高嶽、對於御敵抽忠勤者也、○中略下賜證判、可備將來龜鏡候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正平十七年十一月廿五日

承了(花押)

〔阿蘇文書〕

室町家執事書狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月五日

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月五日

五〇四

不審之處、委細貴札令披見了、其邊數ヶ所被取堅要害候之條、目出候、兼又松浦上下一揆、去月廿七日越山之由、注進到來候了、略中今度事一向御高名至極之間、諸事契申候、恐惶謹言、

十一月十日

氏經(花押)

○菊池武光、斯波氏經、少貳冬資等ヲ、筑前長者原ニ擊チテ之ヲ破ルコト、九月二十一日ノ條ニ見ユ、南黨菊池武顯、筑前志摩郡ノ北黨ヲ擊ツコト、便宜左ニ合致ス、

〔河上山古文書〕

○十二肥前

奉寄進

肥前國河上社

同國佐嘉郡寺法淨寺内野野田地壹町事

右於大明神御寶前、爲座主増如阿闍梨勤行、大般若經壹部毎月奉令轉讀、彌爲奉備朝敵降伏、國中靜安、殊者當家繁昌、身心決樂之精祈也、將又於彼地者、去正平十七年筑前國志摩郡合戰之時、依致忠節、爲料所雖宛給、一統之時有恩賞御沙汰者、以此地可被便補之間、迄于子々孫々、不可有知行相違、仍所奉

城武頭河上社ニ寄ス

寄進如件

正平十九年辰十二月二日

越前權守藤原武顯(花押)

七日、己幕府、赤松則祐ヲ攝津守護ト爲ス、

〔師守記〕

○二十八帝國圖書館本

十月七日、己卯、天陰、已刻以後雨降、略中

(頭卷)今日齋藤五郎左衛門下向播(州力)接州守護職被仰則祐律師使者云々、

佐々木氏頼、近江吉池池莊ヲ、市村六郎ニ預ク、

〔蒲生文書〕

○一出雲

近江國野洲郡吉池庄事、爲料所々預置也、任先例、可致沙汰之狀如件、

貞治元年十月七日

沙彌(花押)

市村六郎左衛門(門)殿

八日、庚辰懷良親王、大嶋源次ニ、其所領ヲ安堵セシメ給フ、

〔來島文書〕

○前筑

本當知行所領事、領掌不可有相違也、仍執達如件、

正平十七年十月八日

右中將(花押)

松浦大嶋源次殿

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月七日 八日

五〇五

十日、壬午北朝、地下ノ、寶莊嚴院領ヲ違亂スルヲ停メ、東寺ヲシテ、之ヲ管領セシム、

〔東寺百合文書〕〇山城 寶莊嚴院評定引付貞治元年甲辰三

寶莊嚴院散在寺領事、止地下輩違亂、可被全管領之由、被仰下候也、仍執達如件、

貞治元

十月十日

左少辨嗣房

謹上 治部卿法印御房

幕府評定始、

〔師守記〕〇二十八 帝國圖書館本 十月十日、壬午、天晴、略 〇今日武家評定始也、修師

理大夫入道發向接州之時、被渡東寺、歸宅以後評定始也、修理大夫入道、執事

左衛門佐入道、佐々木高氏 波多野因幡入道、

十一日、癸未北朝、至孝德無ヲ南禪寺住持ト爲ス、是日、入院ス、

〔師守記〕〇二十八 帝國圖書館本 十月十一日、癸未、天晴、聊風吹、今朝南禪師長寺方

□至入院、勅使頭左中將藤原爲遠朝臣、武家使今川伊豫守、眞透烏帽子、鎧

直垂、勅使行粧府者四人、路次乘馬、小雜色四人、士丁等召具之、予密々結縁之、

勅使御子
左爲遠
武家使今
川貞世

〔南禪住持籍〕五山之上瑞龍山太平興國南禪寺住持名簿

第廿八世無德和尚 諱至孝、嗣法大智海、聖一派、

〇北朝善育ヲ南禪寺住持ト爲スコト、延文五年是秋ノ條ニ、至孝ノ寂スルコト、明年正月十一日ノ條ニ見ユ、

十五日、亥天龍寺、義詮ヲ迎饗ス、

〔師守記〕〇二十八 帝國圖書館本 十月十五日、丁亥、天晴、申剋小雨灑則止、略 〇中今

日鎌倉宰相中將被渡天龍寺云々、長老招引之故云々、

斯波氏經、阿蘇惟村ノ戰功ヲ褒ス、

〔阿蘇文書〕四室町家執事書狀

不審之處、御音信悅入候、自是雖申候、路次難儀之上、無案内之輩、更以不叶候之間、無力候、定被處等閑候歟、心中曾非如在候、抑肥州越被構所々於要害、退治御敵之段、頗無比類御軍忠候哉、自元一向憑存申候處、如此御沙汰彌添感悅候、念可注進申京都候、且御所望事候者、可承候也、尙々兩國戰功異他候哉、雖事煩候、細々可注承候也、恐々謹言、

十月十五日

左京大夫氏經花押

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月十五日

五〇七

肥州越ニ
要害ヲ構
へ南黨ヲ
伐ッ

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月十六日 十七日

五〇八

謹上 阿蘇大宮司殿 （惟村） 康安二十一年十一月十二日到來、
上包オナシ

十六日、子戊北朝記錄所庭中及ビ雜訴儀ヲ停ム、

〔師守記〕二二十八 ○帝國圖書館本 十月十六日、戊子、天晴、略○中 今日記錄所庭中并

雜訴沙汰不被行之傳奏無領狀之故歟、

佐々木高氏、義詮ヲ迎饗ス、

〔師守記〕二二十八 ○帝國圖書館本 十月十六日、戊子、天晴、今日鎌倉宰相中將被渡

佐々木判官入道岡崎宿云々、依招引也、

十七日、丑己義詮、阿蘇惟村ヲ肥後守護ト爲ス、

〔阿蘇文書〕五 足利氏教書

肥後國守護職事、所補任也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

貞治元年十月十七日

御判 （義詮）

阿蘇大宮司殿

裏 此正文路次難儀之間預置候、

貞治元年十月廿七日

沙彌親直花押

〔大友文書〕四 ○筑後

肥後國守護職事、任申請令補任阿蘇大宮司惟村畢、闕國出來者可宛行其替也、爲惟村現不忠者、如元可令管領之狀如件、

貞治元年十月十七日

（花押）（義詮）

大友刑部大輔殿 （兵時）

幕府、嶋津貞久ノ訴ニ因リ、九州探題斯波氏經ニ令シテ、薩摩、大隅二國ノ寺社本所領半濟及ビ闕所地ヲ處分セシメ、讚岐守護細川賴之ヲシテ、同國櫛無保ノ違亂ヲ停メシム、

〔島津文書〕一

分國闕所以下訴訟事、尤有其謂之間、欲有沙汰之處、（斯波氏等）左京大夫鎮西下向之時、被任四ヶ國隨一也、仍尤京都難落居之間、可遣計沙汰由、所成御教書也、定不可有子細歟、（備後）次櫛無保事、急速可仰付讚岐國守護也、（細川等之）老後之忠功、殊所感思也、彌廻籌策、可勵九州靜謐之狀如件、

貞治元年十月十七日

御判 （義詮）

島津上總入道殿 （貞久）

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月十七日

五〇九

九州ノ事
賴朝ノ朝
以來久
以祖
沙汰
等ノ先

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月十七日

五一〇

島津上總入道(貞久)鑒申、大隅薩摩兩國寺社本所領半濟并闕所事、氏時賴尙等、分國共以被任用畢、右大將家以降、就九州事、兩人并道鑒之曩祖、每事及一准御沙汰之處、始中終軍忠之道鑒、偏破烈之思、失面目之由、所歎申也、雖非無子細、鎮西下向之時、被除氏時等分國并日向國所職之、四ヶ國及二島分、可被預置軍勢之旨、被下事書畢、道鑒分國爲隨一之間、難及京都之沙汰、許否之段、依時宜、可有計沙汰之狀如件、

貞治元年十月十七日

左京大夫殿

御判

島津上總入道々鑒申、讚岐國櫛無保地頭職事、道鑒於鎮西、近日殊抽軍忠之處、譜代舊領違亂出來之由、所歎申也、不便事候歟、無相違之様、可令計沙汰哉、恐々、

十一月二日

細川右馬頭殿

花押

○貞久、大隅薩摩二國寺社本所領ノ半濟及ビ闕所ヲ全ウシ、讚岐櫛無

保ノ違亂ヲ停メラレンコトヲ、幕府ニ請フコト、六月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔島津國史〕

道鑑公下

冬十月十七日、幕府賜公教書曰、細川賴之侵掠櫛無

保、當加禁止、至於闕所及寺社邑領家邑事、請於探題可也、據道鑑公舊譜

二十一日、興福寺、同寺維摩、最勝兩會料所近江豐浦莊ノコトヲ北朝ニ請フ、

〔御舉狀并御書等執筆引付〕

維摩、最勝兩會料所近江國豐浦庄間事、學侶衆徒僉議之趣、別會五師兼增書上如此、子細見狀候歟、可有申御沙汰候哉之由所候也、恐惶謹言、

十月廿一日

法印公憲

謹上 左大辨宰相殿

二十二日、北朝伊勢經久ヲ因幡守ニ、葉室宗顯ヲ左兵衛權佐ニ任ズ、

〔師守記〕

○帝國圖書館本

十二月廿九日、庚子、天晴、酉剋許小雨下、亥剋休

略○中

口宣一紙奉之、早可被下知之狀如件、

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二十一日 二十二日

五一

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二十二日

十月廿二日

四位大外記局

權中納言具通卿

五二二

宣旨

平經久

貞治元年十月廿二日 宣旨

平經久

宜任因幡守

兵部少輔藤原宗顯

宜任左兵衛權佐

藏人左少辨藤原嗣房 奉

不被出之、
謹請

宣旨

平經久

宜任因幡守

兵部少輔藤原朝臣宗顯

藤原宗顯

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二十二日

十月廿二日

四位大外記局

權中納言具通卿

五二二

宣旨

平經久

貞治元年十月廿二日 宣旨

平經久

宜任因幡守

兵部少輔藤原宗顯

宜任左兵衛權佐

藏人左少辨藤原嗣房 奉

不被出之、
謹請

宣旨

平經久

宜任因幡守

兵部少輔藤原朝臣宗顯

藤原宗顯

宜任左兵衛權佐

正五下管豐長替

右宣旨早可被下知之狀謹所請如件師茂誠恐謹言

貞治元年十二月廿九日

大外記中原師茂 狀

九州探題斯波氏經、都甲千代王ヲシテ、豊後北浦邊警固ノコトヲ沙汰セシム、

〔都甲文書〕

○坤 豊後

北浦邊警固事、屬六郷執行畢、可致其沙汰、仍執達如件、

康安二年十月廿二日

左京大夫(花押)

都甲千代王殿

○大友氏時、同北浦ノ北黨等隱通スルヲ聞キ、千代王ヲシテ、之ヲ誅伐

セシムルコト、正平十一年十一月十九日ノ條ニ見ユ、

二十三日、乙未幕府、近江守護佐々木氏頼ヲシテ、臨川寺領若狹耳西郷年貢ノ諸關通過ヲ勘セシム、

〔臨川寺重書案文〕

○乾 山城 御教書

臨川寺領新御寄若狹國耳西郷年貢事

南朝正平十七年 北朝貞治元年十月二十三日

五二三

右江州湖上津々浦々無諸關之煩可令勘過之狀依仰下知如件

貞治元年十月廿三日

法眼判
道譽判
沙彌判

二十五日^酉法成寺ノ舊址ニ犬追物アリ、義詮之ヲ觀ル、

〔師守記〕

○^{二十八}帝國圖書館本

十月廿五日^{丁酉}天晴^略○今日於法成寺跡有

犬追物、大樹立車見物、家君予密々見物之、二薦外記并彈正忠延兼御共、及晚歸宅、

二十八日^{庚子}大外記中原師茂、醍醐寺釋迦堂僧衆ノ、大炊寮領山城南山科

御稻内小栗栖御田ヲ押領スルヲ停メラレンコトヲ北朝ニ請フ、

〔師守記〕

○^{二十八}帝國圖書館本

十月廿八日^{庚子}天晴^略○今日南山科御稻内

小栗栖御田三段、大醍醐釋迦堂僧衆押作事、重申狀被付藏人右中辨行知了、

〔師守記〕

○^{二十八}帝國圖書館本

廿八日^{庚子}大炊寮領山城國南山科御稻内小栗栖御田參段、大釋迦堂僧衆師

僧都□□大夫法印以下押作下地、抑留御米事、重申狀^{副具}進覽之、子細見

狀候歟、此事度々雖被尋下、不及請文、散狀結句如前座主^{御座}請文者、彼名字等

不居住寺家之由遁申之間、欲被經御沙汰之處、然座主還補重雖被尋下、不

及是非請文、此上者無盡期候歟、早停押作之儀、全管領可專供御備之由、被成下綸旨於寮□□可有御奏聞候哉、仍言上如件、

十月廿八日

大外記中原師茂

進上 藏人右中辨殿 行知

〔師守記〕

○^{二十九}帝國圖書館本

十一月廿二日^{癸亥}天晴

今日南山科御稻内小栗栖御田三段、大□事重被尋醍醐寺□□御教書行

包令持候間、於記錄所予寫之、匡遠宿禰當番之時到來云々、恐可付之由仰

之了、

北朝法印弘惠寂ス、

〔常樂記〕

十月廿八日、民部卿法印弘惠歸寂、

〔三寶院文書〕

○^{六十一}山城 過去帳

廿八日 飛 大日如來

民部卿法印弘惠、貞治元十、

民部卿法印

十一月 壬寅朔

一日、壬寅、北朝御曆奏、

〔師守記〕

○二十九 帝國圖書館本

十一月一日、壬寅、天晴、黃鐘之朔、所願一々可成

就月也、幸甚々々、今日帥中納言仲房卿、進狀家君云、明日料牛不指合、可借賜云々、此次御曆奏、依上卿不參、可被付內侍所、可被存知云々、被答云、牛事不可有子細之處、四歲小牛、自田舍召寄候、一身記錄所參、猶以難叶之躰候、非自由申狀候、御曆奏、可被付內侍所之由、可存知之趣也、○中御曆奏、依上卿不參、被付內侍所、仍六位外記不能參陣、

〔師守記〕

○二十八

帝國圖書館本

十月廿五日、丁酉、天晴、○中

御曆奏、任例可被致沙汰之狀如件、

十月廿三日

左少辨嗣房

四位大外記殿

御曆奏、任例可令致沙汰之由、可加下知候、仍言上如件、

十月廿五日

大外記中原師茂狀

上卿不參
依内侍所
付

河内田井
莊國清
島山國清
跡津貴志
莊

廿六日、戊戌、天陰、寅剋以後雨降、天明止、午剋甚雨、無程休、其後陰晴不定、今日御曆奏、并春日祭事、被下知文殿代助豐了、今日藏人治部少輔仲光觸申云、梅宮并吉田祭等事、任例可被催沙汰云々、則被出請文了、此次昨日春日祭御曆奏等、請文被出之了、○中御曆奏、任例可令致沙汰、略內藏助事者、相觸不被申分明散狀之由、被仰下候也、仍執進如件、

十月廿六日

國兼

外記史殿

二日、卯義詮、勳功ノ賞トシテ、越後風間入道某名闕跡及ビ河内、攝津等ノ地ヲ大友氏時ニ與フ、

〔大友文書〕

○四 筑後

（花押）

下大友刑部大輔氏時

可令早領知越後國風間入道跡、河内國田井庄、（島山國清）跡、（道誓）攝津國貴志庄闕所分等事

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月二日

右幕大宰筑後入道(少貳賴尙)本通跡替不足分并今度勳功賞所宛行也者早守先例可致沙汰之狀如件

貞治元年十一月二日

越後國風間入道跡事任今月二日御下文可被沙汰付大友刑部大輔氏時代之狀依仰執達如件

貞治元年十一月六日

(新波義將)治部大輔(花押)

上杉民部大輔入道殿

三日(甲辰)菊池武光少貳冬資宗像氏俊等ヲ筑前香椎大隈ニ擊チ尋デ同蕙打ニ發向ス

〔佐賀文書纂〕文深江

安富民部大夫泰重申軍忠事

○中略全文ハ九月二日將又冬資宗像大宮司以下凶徒依打出香椎大隈御出之間十一月三日馳上令御供者也同廿一日蕙打御發向之間御共仕同廿四日迄于歸津之期御共之上者下賜證判可備將來龜鏡候以此旨可有御披露

候恐惶謹言

正平十七年十一月廿五日

(菊池武光)承了(花押)

北朝主殿寮領山城紀伊郡内ノ地ヲ法善某ニ管領セシム

〔壬生文書〕主殿寮所領請文繪旨裁許狀

山城國紀伊郡□貳坪田地參段事於地主職者法善□(可方)致管領可濟地□於寮家之由被仰彼□畢可被存知者天氣如此仍執達如件

貞治元年十一月三日

右大辨

主殿頭殿

北黨式部丞大友氏泰卒ス

〔高野山文書〕西生院紀伊御世代過去牒大友家御曆代

同慈寺殿獨峯清巍公禪師七代尊氏將軍之猶子也貞宗御子號式部丞氏泰

〔東海一漚集〕拈香獨峰上人五七忌辰拈香

非惟建寺度僧多如此袈裟著體何莫謂人間尺頭短花披不謝妙芬陀這箇是

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五一九

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二〇

法華經ヲ
印行ス

洛陽東山永昌禪菴、今月七日、以丁寺主獨峯巍公禪師五七之忌辰、預先印法華經、且寫且讀、至日、借手山僧、蘇此兜樓、供養本師釋迦如來、及一切諸賢聖衆、所集功助、併用奉爲巍公覺靈、莊嚴報地、恭惟某人、長揖衣冠、方袍圓顱、傲睨富貴、隱淪廡廡、究明己躬、服事禪居、護法檀度、內外相扶、命不吾謀、廢于半途、脫娘生袴、未得護身符、豈不惜乎、誰不嗟吁、嗟々吁々、著眼香烟消處看、與君推出白牛車、

〔無規矩〕○下之城上 祭巍獨峯

因法相依、爲法檀度、鳳嶠蔣山、不忘外護、及入吾門、以緇易素、針芥相投、因緣相遇、二十年來、情義金固、爲道孜孜、禪誦惟務、今年胡爲、忽嬰疾苦、衆藥弗靈、終隨薤露、爾先我行、不肯停住、我今頽齡、桑榆景暮、門庭蕭疎、誰來親附、梁棟傾斜、誰敢投梧、平生將謂、壽夭天賦、今當送喪、恍然罔措、淡茶一甌、麝香一炷、志之所之、庶幾昭顧、吁哀哉、尙饗、

〔公方樣當家條々要目〕 當家御代々御位牌

同慈寺殿獨峰清巍菴主 號式部丞氏泰、尊氏將軍之御養子、貞宗御子、
康安二年霜月三日、

靈致ノ祭
文

氏泰源氏
ニ改ム

氏泰ト義
證トハ同
腹ノ兄弟

世系

大友三姓申慣事、御當家之秘密也、

賴朝御門葉源御名字ニ付而者、平氏讓家藤原氏如此也、七代目同慈寺殿氏泰之御時、宮方將軍方起大兵亂、尊氏將軍當國御下向之刻、由來依言上、姓ヲ源家ニ被定之由勅命 茂如此也、又當公方樣 與御當家改事、御呢親之御交無其隱、混元之事、氏泰公母御樣後室ニテ御座ヲ、尊氏將軍以御妻令御上洛候而御子御候是義詮也、氏泰 與一腹之御兄弟無其紛、古賴朝將軍 與御當家能直公、御一躰分身候之處ニ、其後足利殿一筋目被披御世、御下向之刻、御家七代目從御屋形樣如此之御好出來候、氏泰公御袋者、少貳殿御息女也、

〔高野山文書〕○西生院 大友家過去牒

貞宗 六代 近江守、十二月三日逝去、

貞順 次郎、豐後守、大

貞載 三郎、左近將監、建武四年正月十一、都楊梅東院烏丸而結城、

僧一人 即吉祥寺、利

宗 立左近將監、

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二一

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

七代 氏泰 孫太郎、式部丞、道世舍弟之氏時一家相續、相模守、猶子、同慈寺殿、獨峯清巍庵主。

八代 氏時 孫三郎、刑部大輔、三月廿一日、逝去。

〔大友系圖〕

貞宗 孫太郎、左近將監、近江守、從五位下、母戶次太郎時親之女也。

貞順

貞載

宗匡

卽宗和尙

氏泰 字千代松丸、孫太郎、民部丞、通世而舍弟讓氏時、法名清巍、號同慈寺殿、自將軍等持院、尊氏公賜諱之字而稱氏泰也。

氏宗

氏時 字若松丸、孫三郎、刑部大夫、自將軍家源尊氏公、賜源氏姓、自

〔大友系圖〕

貞宗 近江守、從五位、法名具簡。

師親 左近藏人、佐法名正、金野津、號勢家殿。

貞順 近江次郎、謀叛人。

貞載 左近將監、結城判官、與組テ死。

宗匡 三川守、立花先祖。

氏泰 式部丞、法名清巍、同慈寺殿、尊氏將軍將軍御叱以猶子儀、給源氏姓也。

八代 氏時 刑部大夫、法名天祐、關東下向云々。

〔竺僊和尚塔銘〕 資善大夫江瀨等處行中書省左丞番易周伯琦篆

歲甲戌直菴亡、遺命仍以萬壽聘、源氏固留、而廷論起師、主淨智寺、賜金三萬地、三千畝、及天柱峯下、故陞爲壽塔、下瞰大海、絕類楞伽山、作楞伽院、構亭絕頂、曰

妙高燕居、曰一粟乾坤、曰語心堂、曰含暉室、曰最勝巖、歲戊寅直菴之子吏部郎

中大江氏泰、承先志、以關東三浦無量壽寺、請師開山、明年辭淨智、略上

〔東海一漚集〕 銘 櫛田宮鐘銘并序

昔在大日靈貴、會素瓊鳥于高天原、而請取所佩十握劍、呵之化生五女兒、死皆爲神、其長曰某娘、舊祀于伊勢國櫛田川之旁、然而其行宮、總以櫛田宮稱焉、惟在筑之博多者、持統天王朱雀年中、之建也、距今六百五十餘歲也、北條平氏之伯于關東、舉遠江守平隨時居茲府、總管西海道九州之時、尤敬本宮、百廢悉興、

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

氏泰三浦無量壽寺ヲ開キテ梵僊ヲ開ス山ト爲ス

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二四

繇是博多人厚欽此神、凡有所祈、皆答如谷應聲、既而祭禮如法、祭器完具、惟鐘未有、以爲缺也、邑人淨願、擲己所用、累積朱寸、遂以元應元年秋七月、鑄而成之、適當朝廷命征夷大將軍足利源某、爲伐平氏、自正中至建武凡一紀、天下大亂、宮亦累災、其間異祥良多、蓋神見其事於未萌、而但人不預知也、逮平天下定于、一朝廷以博多邑賜大友式部丞源某、爲賞戰功也、邑人以其仁政悅之、若時雨降也、茲之明年、重建本宮、高廣壯麗、過於舊制、見聞隨喜、聲喧街衢、於是淨願亦見義勇爲再役、梟氏、以曆應三年四月二十七日、其功畢矣、以今者視昔者、則其音錯矣、以昔者視今者、則其音贏矣、鏗鏘之響、上于雲霄、可以感欽神靈、而座致盼饗也、後二年、謁予以銘曰、

樂之興也 器以鐘之 不窳不糲 感且容之 堅其質兮
虛厥中兮 扣之必應 谷神空兮 聲出于外 神而通之

〔竺僊和尚語錄〕

偶頌

寄大友式部丞獨峰居士

鯤鵬變化時、水擊三千里、一舉或小歇、再舉動天地、無物堪効芹、聊有屠龍器、清水與越砥、鋒鏑久斂淬、匣中收不得、時常倚天外、願奉終佩之、無適不如意、

氏泰博多
櫛田宮ノ
建本宮ヲ再

梵僊ノ氏
泰ニ寄ス
ル頌

示大友式部丞獨峯居士 二首

我有一句話、未吐人已會、問伊作麼生、依然沒碑記、開口卽已錯、何況落筆書、相見不相識、試問誰似渠、

○雜訴決斷所、美濃國衙ヲシテ、仲村莊領家近衛氏ノ雜掌定海ト、地頭大友氏泰代道仙ト、其所務ヲ中分セシムルコト、建武二年四月三日ノ條ニ、尊氏氏泰ヲシテ軍ニ會セシムルコト、同年十二月十三日ノ條ニ、直義氏泰ヲシテ、一族及ビ豊後、肥前ノ兵ヲ率キテ、坂本ニ向ハシムルコト、延元元年正月十三日ノ條ニ、尊氏鎮西ニ下リ、氏泰ヲ招クコト、同年二月十二日ノ條ニ、尊氏肥後山本、千田兩莊健軍宮領等ノ地頭職ヲ氏泰ニ與フルコト、同年三月十七日ノ條ニ、尊氏氏泰ニ越後紙屋莊ヲ與フルコト、建武四年五月二十一日ノ條ニ、直義氏泰ヲシテ、少貳賴尙ト共ニ、鎮西警固ノ石築地ヲ修理セシムルコト、曆應元年閏七月一日ノ條ニ、氏泰淨智寺梵僊ヲ相模三浦ノ無量壽寺ニ住セシムルコト、同年十月三日ノ條ニ、氏泰上野利根ニ吉祥寺ヲ創シテ、父貞宗ノ冥福ニ

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二五

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二六

資シ、圓月ヲシテ開堂セシムルコト、同二年是歲ノ條ニ、氏泰ノ兵、南軍ト肥後鞍嶽山ニ戰ヒ、菊池城ヲ攻ムルコト、康永二年三月二十五日ノ條ニ、氏泰、田原直貞ト鬩ヲ構フルコト、同三年五月六日ノ條ニ、氏泰、田原八幡社ノ神役ヲ全ウセシムルコト、同年八月四日ノ條ニ、氏泰、南軍ヲ擊タントシテ、野上資親ヲ召スコト、貞和三年十月十五日ノ條ニ、南朝、氏泰ノ來附ヲ褒スルコト、正平六年六月十五日ノ條ニ、尊氏、氏泰ニ勳功ヲ賞シテ、少貳賴尙ノ所領筑前遠賀莊宗像西郷豐前黑田莊等ヲ與フルコト、觀應二年十一月二日ノ條ニ、尊氏、氏泰ヲシテ、田原直貞ニ公武媾和ヲ告ゲ、直義、直冬ノ黨ヲ擊タシムルコト、正平六年十二月八日ノ條ニ、氏泰、伊豫ノ南軍ヲ攻メントスルコト、同七年四月二十一日ノ條ニ、義詮、大友氏時ニ、氏泰ノ所領及ビ豐後守護職ヲ安堵セシムルコト、文和元年九月二十二日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕

部ホ之 大友氏泰



○ 梓原八幡宮文書(豊後)
康永三年八月四日裁許狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二七

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二八

○志賀文書(肥後)
貞和四年六月二日施行狀

氏泰高時
ニ謁ス
尊氏ニ謁
ス
尊氏氏泰
ヲ猶子ト
爲ス

〔豐後舊記〕

後○豐

大友孫太郎藏人式部太輔從五位上源氏泰 受兄貞宗
之讓任豐後之國守元應元年己未春府城主氏泰到相州謁北條高時又到野
州訪足利尊氏尊氏謂大友曰賴朝足利皆義家之裔也能直又賴朝之息也然
貴家所歸依禪師直翁者與我爲親屬彼是之緣不薄於是尊氏以氏泰爲猶子
與源氏姓自書源氏系授氏泰同慈寺府城南古國府有伽藍古昔云神護山同
慈寺不知何古院殿堂破壞荒野小堂獨存安釋迦太子藥師安阿二像府主惜

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月三日

五二九

○入江文書(豐後)
正平六年十二月八日施行狀

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月六日 七日

五三〇

之、寺府北建殿安像、請洛大同禪師住之、大同正和二年入唐、元應二年庚申春、翌年歸朝、寓南禪寺、來豐府、大同自赴京、請同慈寺額禁廷、即勅翰□□書同慈禪寺賜之、懸之山門、元亨元年、北條高時使北條英時爲鎮西探題、住筑前博多、是故少貳、大友、菊池、島津等皆到博多、謁英時、同二年壬戌四月十六日、直翁於蔭山萬壽寺寂、七十八歲、正慶二年癸酉三月、先帝後醍醐天皇密遁隱岐國、赴伯耆國、入船上山、山陽山陰之諸將來從、大友具簡、同舍弟氏泰、少貳妙惠、菊池寂阿各屬官軍、英時聞其逆意、召菊池、大友、少貳二將謀討英時、二將却救英時討菊池、同五月、大友、少貳討英時、同十月三日、大友氏泰卒、牌號同慈寺殿獨峯清巍、

六日、北朝、記錄所庭中及ビ雜訴儀ヲ停ム、

〔師守記〕二十九 ○帝國圖書館本 十一月六日、丁未、天晴、中略 今日記錄所庭中并雜訴沙汰無之、兼日不及相觸也、

七日、北朝、平野祭及ビ春日祭ヲ延引ス、尋デ、春日祭ヲ追行ス、

〔師守記〕二十八 ○帝國圖書館本 十月廿五日、丁酉、天晴、中略

今日頭左中將爲遠朝臣觸申云、春日祭任例可被存知云々、

春日祭任例可被存知之狀如件、

春日祭觸文

十月廿二日

左中將判爲遠朝臣

四位大外記殿

春日祭任例可令存知之由、可加下知候、仍言上如件、

十月廿五日

大外記中原師茂狀

廿六日、戊戌、天陰、寅刻以後雨降、天明止、午剋甚雨、無程休、其後陰晴不定、今日御曆奏并春日祭事被下知文、殿代助豐了、

今日藏人治部少輔仲光觸申云、梅宮并吉田祭等事、任例可被催沙汰云々、則被出請文了、此次昨日春日祭御曆奏等、請文被出之了、

廿七日、己亥、天晴、中略 今日藏人右中辨行知觸申云、平野祭任例可被催沙汰云々、

平野祭任例可被催沙汰之由、所被仰下候也、仍執進如件、

十月廿七日

右中辨行知

四位外記殿

梅宮吉田祭請文

平野祭觸文

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月七日

五三一

平野祭任例可令催沙汰候先可加下知候仍如件(官上服之)

十月廿七日

大外記中原師茂

〔師守記〕

○二十九(頭卷)帝國圖書館本 十一月一日壬寅天晴

今日頭右大辨資定朝臣觸申平野祭事被出請文禮昏云此祭事藏人右中辨爲奉行被相觸候何樣候哉可奉存候云々

平野祭任例可被致沙汰之狀如件(裏卷)

十月廿八日

右大辨資定朝臣

四位大外記殿

平野祭任例可致沙汰之由可加下知候仍言上如件

十一月一日

大外記中原師茂 狀

追啓

件祭事爲藏人右中辨奉行被相觸候何樣候哉可承存候恐惶謹言

三日甲辰天晴○中今日兵部大輔長世朝臣進狀於家君云來七日春日祭內藏助事觸奉候之間申領狀處不及參社頭內藏寮公人料足下行許候歟無案

長世師茂
春日祭
藏助ノ
内藏ノ
コトヲ
フ問

師茂春日
祭延否日
職事ニ問
フ

幣料具ハ
ラザルニ
依ル

春日祭供
神物沙汰

内之間尋申云々被答云春日祭内藏助事御領狀目出候不被參社頭者可御

事闕候於社頭所役候也奉行職事頭中將候上卿無才學可被尋職事云々

今日平野祭事被下文殿代助豐

五日丙午天晴陰申刻雷鳴一兩度同剋風吹雨下無程休入夜時々小雨下今

日春日祭延否事被尋奉行職事不被治定云々

七日戊申天霽入夜丑剋許雨降則止○中今日平野祭延引可爲次支干云々

幣料不具之故歟

今日春日祭延引可爲次支干云々上卿以下難得之故歟

十六日丁巳天晴今朝兵部大輔長世朝臣進狀於家君云來十九日春日祭内

藏助事可沙汰進宣命可賜歟如何不知案内之間尋申趣也被答曰内藏助被

沙汰進條目出候宣命事無才學候可被尋職事云々

十八日己未天晴○中今朝寮使□永下向木津明日春日祭供神物沙汰料也

任例賜切符又賜式了

大炊寮 供御院

檢納御稻參拾束事

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月八日

五三四

右來十九日、春日祭用途料、和泉木津當年御稻內、任例檢納如件、

貞治元年十一月十六日 預彈正忠磯部宿禰

正四位下行頭兼大外記下總守中原朝臣判

春日祭上

十九日、庚申、天晴、午剋地震、○中 今日被行春日祭、上支干、依上卿上卿權中納

言藤原俊冬卿、左少辨同嗣房、藏人權少外記清原良種、分配史不參、召使和氣

助興等參向、官掌不參使不參之間、內藏助賀茂定持、勲代昇御棚云々、有官別

當不參、大膳職沙汰者、光久勲代內侍、兵衛督內侍云々、丑剋被行之、置式見參

如例、

平野祭又

○南卷今日平野祭又延引、幣料難行故歟、

八日、己酉、北朝、梅宮祭ヲ延引ス、尋テ、追行ス、

梅宮吉田

〔師守記〕○二十八 帝國圖書館本 十月廿六日、戊戌、天陰、寅剋以後雨降、天明止、午

剋甚雨、無程休、其後陰晴不定、○中 今日藏人治部少輔仲光觸申云、梅宮并吉

田祭等事、任例可被催沙汰云々、則被出請文了、

○東卷梅宮并吉田祭等事、任例可被催沙汰之狀如件、

十月廿三日

治部少輔判 仲光

四位大外記殿

梅宮并吉田祭等事、任例可令催沙汰之由、可加下知候、仍言上如件、

十月廿六日

大外記中原師茂 狀

〔師守記〕

○二十九 帝國圖書館本 十一月八日、己酉、天晴、入夜戌剋雨下則休、○中

今日藏人治部少輔仲光觸申局務云、梅宮祭延引、可爲次支干云々、○中

○東卷梅宮祭延引、無幣料之故歟、

○東卷梅宮祭延引、可爲次支干、可被存知之狀如件、

十一月七日

治部少輔判 仲光

四位大外記殿

追申

上卿以下卜合事、恐可承存候也、

廿日、辛酉、天晴、○中 今日梅宮祭、上支干、依無幣料延引、上卿不參、左中辨平信兼朝臣參

行、外記史不參、官掌召使同不參、內侍云々、

十日、○辛幕府、二色範光ヲシテ、若狹目代某ノ、天龍寺領同國岡安名ヲ違亂

梅宮祭延引 幣料無キニ依ル

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月十日

五三五

スルヲ停メ、所務ヲ同寺ニ全ウセシム、

〔天龍寺重書目錄〕○甲 山城

道永ノ跡
亂代ノ停ム

天龍寺雜掌申、若狹國岡安名道永事、當國眼代寄事於左右、及亂弄マカ之由、度々被仰了、所詮於岡安名有限正稅者、寺家致其辨處、號打越分年貢、違亂忽不休云々、如御寄進狀者、殊打越之旨所見也、爭國衛可競望哉、太以髣髴歎、不日退彼夫者等、可被全當寺之所務狀、依仰執達如件、

康安貳年十一月十日

沙彌判

一色修理權大夫入道殿

大友氏時、志賀氏房等ヲシテ、菊池武光ノ軍ヲ豊後鳥屋城ニ擊タシム、

〔志賀文書〕○三 肥後

志賀藏人頼房當病之間、○中略全文ハ八月七日ノ條ニ收ム、差遣子息彌太郎氏房於豊後國大野庄鳥屋城、打塞凶徒武光本國之通路、致不退合戰之間、連々軍忠雖不遑注進、

貞治元年十一月十日合戰之時、

武光一族鬼塚左衛門次郎討取之上、氏房親類、大窪孫三郎、若黨中尾兵

衛三郎、左近大郎被疵畢、

同十一日、

分捕頸一、名字、若黨進又五郎、窪助次郎、中間後藤次六郎次郎、彦五郎、源內被疵訖、

同廿九日、

若黨泉右衛門太郎高濤討死、若黨古見孫三郎、中間六郎次郎、源八、七郎次郎被疵畢、○中略、正平十八年閏正

以前條々大概如斯、此外不可勝計、合戰未落居、劇務之砌、日數相隔者、依可有公私不審、先祖所令注進也、早預御證判、爲備後規、言上如件、

承了

刑部大輔大友氏時花押

貞治二年卯月日

〔志賀文書〕○十 肥後

賀村內近地名地頭職事、玄心重代相傳所領也、但子息藏人

二郎於鳥屋城令打死之間、息女愛鶴女嫡子依爲、孫子鬼二郎丸、相副次第證文、限永代所讓與也、於御公事以下者、守惣領宛配之旨可勤仕也、仍讓狀如

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月十日

五三七

志賀二郎
鳥屋城合
戰ニ討死ス

件、

應安三年 戊庚 七月廿五日

(漢書) このゆつり狀一見了、

沙彌玄心(花押)
沙彌(花押)

○武光氏經、冬資等ト筑前長者原ニ戰フコト、九月二十一日ノ條ニ見ユ、

十一日、北朝記錄所雜訴儀、

〔師守記〕

二十九 ○帝國圖書館本

十一月九日、庚戌、天晴、午剋、小雨灑、

略 ○今日召

次有未來、是山城國市邊御稻事付廻文、明後日可有沙汰云々、加奉被返之、件有未故有未養子云々、實甥云々、

今夕、召次行包持來記錄所廻文、明後日可有沙汰云々、家君、予故障搆得者、可參仕之由、載散狀了、

散狀

四位大史

四位大外記 故障搆得者、可參仕候、

刑部卿

大學頭

中大外記

大夫史

主稅頭 故障搆得者、可參仕候、

掃部頭

博士大夫判官

大博士 故障搆得者、可參仕候、

大判事

右來十一日、可有雜訴并庭中上、可有沙汰事、各如法辰一點、可被參記錄所之狀所廻如件、

貞治元年十一月八日

十日、辛亥、天晴、略 ○中 今日眞桑庄預所職事、藤原氏女雜掌進目安、明日可有沙汰云々、

十一日、壬子、天晴、今朝家君以使者、今日雜訴沙汰延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣之處、一定云々、

午斜家君著朝衣、玉帶今季初度、有同車、予衣冠、參記錄所給、先之大判事明宗、大儒宗

季等參仕、未敷座之間、居板雜談少、時、大夫史量實參仕、令敷座、仍面々著座、寄

人四位大外記家君、奥座、大夫史量實、端座、主稅頭予、衣冠上、端座、量實次、大博士宗季、

衣冠上、緒、奥座、家君次、大判事明宗、衣冠、端座、予次、等參仕、明宗直著到日、面々自上首書名字、雜

仕取傳之、副筆、開闔取忘著到不持參之間、以美紙一枚書之、以外也、依無庭中

訴人、傳奏不及著座、雜訴沙汰事了之後、左大辨宰相忠光卿參著當所、眞桑庄

美濃眞桑庄預所職ノ目安

參仕人々

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月十一日

五四〇

預所職事對決、其後面々評定、于時西斜見參、明日可書賜之由、開闔示明宗了、已及黃昏之故也、

沙汰事

一藤原氏女與四條三位隆鄉卿、相論美濃國真桑庄預所職事、

兩方雜掌出對、々決之後退、訴論入面々自下薦申意見、明宗發言、所詮本主中原俊重、久安寄進中御門中納言家成卿、於預所職者、俊重子孫可相傳之由、成返契狀以來代々無相違、且元亨正中記錄所勘狀分明歟、藤原氏女爲本主俊重後葉、受領度々勅裁并次第文契等、所愁申難被棄捐歟之趣一同了、執筆明宗、

一大炊寮與一條大副兼前宿禰、相論山城國市邊御稻田事、

兼前宿禰下向播州之由、加押紙不出對、仍開闔可伺申由令申之、

今日被行雜訴沙汰、四條前大納言隆蔭卿、直衣下冠中御門大納言宣明卿、衣冠下冠賀仁也、左大辨宰相忠光卿、衣冠下冠等參仕、職事藏人右中辨行知一身參仕、

今日開闔押番文於記錄所與辨官座末長押々之、雜仕□、

真桑庄預所雜掌ノ對決

一大炊寮兼前宿禰下向播州之由、相論御稻田ノ事

雜訴沙汰著到

(前卷) 真桑庄預所職事對決之時、藏人右中辨行知不著座、(後卷) 著到書樣

十一月

十一日、

師茂 量實

師守 宗季

明宗

見參書樣、大辨宰相著座之間、書立紙先例也、

見參 參議左大辨藤原朝臣忠光

右中 辨平朝臣行知

大外 記中原朝臣師茂

左大 史小槻宿禰量實

主稅 頭中原朝臣師守

博 士清原真人宗季

南朝正平十七年 北朝貞治元年十一月十一日

五四一